エト2C-97

42-17

香川景樹大人著

古今集正義

Ki232/XVI

42
174

内閣文庫 明治二十八年

ひさの下〔の〕を〔つ〕に改む

やまとうたは。ひとつこゝろとたねとして。よろづのことの葉とそなれりける。よの中にある人。とわざしけるものなれは。心ゐ思ふ事と。見るものきく物ゐつけていひいたせるなり。花になく鶯。水ゐすむのはつのこゑときけは。いきとしいけるもの。いつれかうたとよまさりける。ちからをもいれすしてあめつちをうこかし。めにみえぬおに神をもあはれとおもはせ。をとこ女の中をもやはらけ。たけきものゝふの心をも。なくさむるはうたなり。このうた。あめつちはひらけはしまりけるときよりいてきにけり。しゐはあれとも世にいたはることとは。ひさのたのあめゐしては。したてるひめにはしまあらゐねのつちにしては。そさのをのみことよりろおこりける。ちはやふる神代には歌のもしもさたまらそ。すなはゐしてをの心わきうたのりけらし。人の世となりてそ。みろもしあまりひともしはよみける。ゐくてを花とめて鳥をうらやひ。霞をあはれひつゐをとめ

世をかけて下はすもの道のみちをよろづの句を詞み

ひとつにはうへ歌の下〔おほさゝきのみかどをうへたまつれる歌難波つに咲やこの花冬こもり今はいるへなるとさくやこの花といへるなるへし〕ふたつにはかうへ歌の下〔さく花にはもひつく身のあちきなさ身にいたつきのいるもしらすてといへるなるへし〕みつにはすらへ歌の下〔君にけさあしたの霜のわきていなは戀しきとにきえやわたらんといへる成へし〕よつにはたの下〔わか戀はたむともつきしあり立海のはまのまさてはよみつくすともといへるなるへし〕いつ

なしふ。心とはおほくさま〳〵になりにける。とはき所もいてたつあしもとよりはしまりて年月とわたり。たのき山もふもとのちりひちよりなりて。あまくもたなひくまておひのほれるとくに。このうたもゝくのとくなるへし。なにはつの歌はみゝとのおほんはしめあり。あさゝの山のとのはゝうねめのたはふれよりよみて。このふた歌はうたの父母のやうにてそ。てならふ人のはしめにもしける。ろもゝ歌のさまむつなり。ゝのらの歌にもゝくそあるへき。そのむくさのひとつにはそへ歌。ふたつにはゝろへ歌。みつにはなすらへ歌。よつにはたとへ歌。いつゝにはたゝことと歌。むつゝはいはひ歌〔ゝり〕。今のよの中いろにつき。人の心花おなりにけるより。あたなる歌。はゝのなきことのみいてくれは。色このみの家ゝ。うもれきの人しれぬことゝなりて。まめなるところゝは。花すゝき。ほゝいたすへき事にもゝあらすなりゝたり。そのはしめと思へはゝゝるへくなんあらぬ。

〔にはたゝことうたの下〔いつはりのなき世なりせはしかはかり人のとの葉うれしし〕むつにはいはひ歌の下〔このとのにむへもとみけりさゝくさのみつはよつはにとのつくりせりといへる成へし〕の六首の歌と詞を脱る

いはひ歌の下〔なり〕の二言を補ふ

あるは花をの下〔もてあ〕の三言を補ふ

秋のゝ下〔夕〳〵れ〕を〔夜〕に改む

さかえおこりての下〔けふは〕の三言を補ふ

世にわひの下〔て〕の一言を補ふ

いにしへのよゝのみゝのと。春の花のあした。秋の月の夜とに。さふらふ人々とめして。ことゝゝとゝつけつゝうたとたてまつらしめ給ふ。あるは花ともてあろふとて。たよりなき所ゝもとひ。あるは月と思ふとて。しるへなきやみにたとれる心々と見たまひて。さゝのしおろゝのゝりとしろしめしけん。しゝあるのみにゝらす。さゝれ石にたとへ。つくは山にゝけて君とねゝのひ。よろこひ身にすきたのしひ心にあまり。ふしの煙によろへて人とこひ。松虫のねに友としのひ。高砂すみのえの松も。あひおひのやうにおほえ。男山のむゝしとおもひいて。とみゝへしの一ときとくねるにも。うたといひてろなくさめけるゝ。又春のあしたゝ花のちると見。秋の夜ゝ木のはのおつるとき。あるはとしことに。ゝゝのゝみのゝけゝみゆる。雪と涙ととなけき。草のつゝも水のゝあわとみてわゝのみとおとろき。あるはきのふはさゝのえゝおこりて。けふは時とうしなひ。世にわひ〔て〕したしゝりしもうとく

かのおほん時にの下〔おほきみつのくらゐ〕の一句を刪り〔あひて〕の三言を補ふ

やまの下〔の〕の一言を刪る

なり。あるは松山の涙とうけ野中の水とくみ。秋はきのしたはとゐのめ。あのつきのしきのはねかきとのそへ。あるはくれ竹のうきふしと人にいひ。よしの河とひきて。世の中とうらみきつるゐ。今はあしの山も煙たゝすまゐり。なのらのはしもつくるゐりときく人は。歌にのみゐ心をなくさめける。いにしへよりのくつたはるうちにも。ならの御時よりそひろまりにける。このゐほん世や。うたの心としろしめしたりけん。このゐほんときに〔あひて〕。このきのもとの人まるなん。歌のひしりなりける。これは君もひとも。身とあはせたりといふなるへし。秋のゆふへ龍田川になのるゝもみちとは。みのとのゐほんめに錦と見たまひ。春のあしたよしの山のさくらは。人まろの心には。雲のとのみなんゐほえける。又やまへの赤人といふ人ゐりけり。歌にあやしくたへなりけり。人丸は赤人のかみにたゝんとゐたく。赤人は人まるのしもにたゝんことのたくなんありける。こ

名つけられたの下〔りけ〕の二言を刪る

名つけられたるの下〔こゝにいにしへのとをもしれる人わつかにひとりふたりなりきしかあれどこれかれえたるところえぬどころたかひになんあるゝ〕の一章を取て次なるつきになりにけるの下に〔年は百〕の一言を補ふ

すこの事をの上〔いにしへのとをもしれる人よむ人おほからす〕の一句を刪る

〔其外にの下〔ちかき世に〕の一句を刪る

宇治山の〻下〔僧〕の一字を刪る

の人をとおきて又そくれたる人も。くれ竹のよゝにきこえ。うた糸のようゝにたえそろありける。これよりさきのうたとあつめてなん。萬えふしふと名つけられたる。この御時よりこのうた。年は百とせにあまり。世はとつきになんなりにける。こゝにゐおしへのとも。歌のこゝろともしれる人。わつかにひとりふたりなりき。しのあれどこれかれえたるところえぬところ。たゐひになんある。今この事といふに。うのさくらぬたのき人とは。たやそきやうなれはいれす。其外にろの名きこえたる人はするはち。僧正遍昭は。うたのさまは文たれともまとそくなし。たとへはゑにかける女と見て。いたつらゐ心とうこのそゐ如し。在原のなりひらは。そのこゝろあまりてことはたらす。しほめる花の色なくて。ふはひのこれるゐ如し。ふんやのやすひては。ことはいたくみにてろのさま身ゐれはす。いはゝあき人のよきゝぬきたらんゐことし。宇治山のきせんは。とは

をの丶小町はの下〔いにしへの長通姫の流なり〕の一句を刪り〔ろのこゝろ〕の五言を補ふ
あはれの下〔なるやう〕の四言を刪る
にての下〔すがた〕の三言を補ふ
くろぬしはの下〔こゝろたかし〜て〕の一句を補ふ

このそのにしてはしめとはりたしのならす。いはゝ秋の月と見るに。あのつきの雲にあへるの如し。よめる歌おほくきこえねは。のれこれとのよはしてよくしらす。とのゝ小町は。〔ろのこゝろ〕あはれにて〔そがた〕つよのらそ。いはゝよき女のなやめる所あるに似たり。つよのらぬは女のうたなれはなるへし。大伴のくろぬしは。〔こゝろおのしくて〕ろのさまいやし。いはゝたきゝおへる山人の。はなのうけにやすめるのことし。この外の人々その名きこもる。のへにおふるのつちのはひゝろこり。はやしにしけき木の葉のとくおおほのれと。うたとのみ思ひて。そのさましらぬなるへし。のゝるに今すへらきの。あめのしたしろしめと事。よつの時こゝのへりおなんなりぬる。あまねきおほんうつくしみの波。やしまの外までなのれ。ひろきれはんめくみのかけ。つくは山の麓よりもしけくおはしまして。萬のまつりとときこしめすいとま。もろ〳〵のとゝすて給はぬ

君をおもひの下〔ひとをも〕を〔友を〕に改む
あふさかの下〔やま〕の二言を刪る

あまりお。古へのとともわすれし。ふりにしとともおこし給ふとて。今も見ろなはし。後の世おもつたはれとて。延喜五年四月十八日に。大内記きの友のり。御書のところのあつのりきのつらゆき。さきのうひのさう官おふしのふちのみつね。右衛門の府生みふのたゝみねらにおほせられて。萬えふしふおいちぬふるきうた。みつのらのともたてまつらしめ給ひてなん。それの中おも。梅とのさすよりはしめてほとゝきそときゝ。紅葉とゝり雪と見るおいたるまて。又つる龜につけて君と思ひ。友といはひ。秋はき夏草と見てつまとこひ。逢坂にいたりてたむけと祈り。あるは春夏秋冬にもいちぬ。くさ〳〵の歌となんえらはせ給ひける。すへて千うたはたまき。なつけて古今和歌集といふ。このくてのたひあつめえらはれて。山した水のたえす。濱の眞砂ののそおほくつもりぬれは。いまはあすの河のせになるらうらみもきこえす。さゝれ石のいはほとなるよろこひのみろある

よろこひのみうあるへきの下（うれ枕）を（われら拙き）に改む

ゆきかよとものの下（このうたのもしあるをや）を（このうたもし）に改む

へき。**われら拙き** 言葉は春の花ゐはひすぐなくして。むなしき名のみ秋のよのゐのきとのてれは。ゐつは人のみゝゐおろり。ゐつは歌のこゝろゐはちゐもへと。たゐひく雲のたちゐ。なくしのゐきふしは。つちもきらのこの世におゐしくうまれて。この事のときにゐへるとなんよろこひぬる。人まろなくなりにたれと。歌の事とゝまれるのゐ。たとひ時うつり事さり。たのしひのなしひもきのふとも。この歌もしあとやきの糸たえそ。松のはのちりうせすして。まさきのつらなのくつたはり。鳥のあとひさしくとゝまれらは。歌のさまともしり。とのこゝろとえたらん人は。ゐはそらの月と見るのことくに。古へとあふきて。今とこひさらめのも

此序は顯昭法橋の古今抄とはしめ或家々に傳ふる所の古寫本また舊（フル）きのきりの刊本ともと彼此（ソチコチ）求め集へて其異同と校へ正して其善

ものと撰ひ采て姑く正文とし其取捨せし所々は卽ち其文の頭書にものし侍りもとより其謂れ其出所に至りては本註に辨せりたまゝ〳〵其中にいさゝゝの愚案と申し試みたるにはと口加へゐき侍りぬさるは正本の出ると待はと據なきのしわさゐ侍りもゆさのしら也と咎むへからす

古今和歌集正義總論

景樹

痛に考るに。大同弘仁の大御世より。詩學やう〳〵盛んにして。寛平延喜のおほん時に及ひてそ。殊に甚しくは侍りけん。朝とあく野となく。詩ころあれと尚ひて。大和歌の言痛(コヤタ)のらぬとは。めゝしき戯(タハ)れと辱めて。正實(マヂ)ならんあたりにては。是と呼ふも面と伏るに至れり。歌のおとろへたる事も。是より甚しきは非さりけらし。紀氏この衰弊と憂ひ給ひて。もとより詩歌は。其音清濁とわかれ。其義幽顯のたゐひある事とひろのに辨し。又いにしへ今の大和歌とつとへて。ろれゐ中より勝れたると撰ひて。千首廿卷(マキ)となし。古今和歌集と號けて。奉り給ひしより。大和歌の道再ひ古ゐ復りて。今に迷へり。此集と覽(ミ)ん人は。まつ撰者の心しらひと知へく。大御國は異邦(カラクニ)の風俗(テフリ)と。いたく違へる事と知へき也

と知へく。大御國は異邦の風俗と。いたく違へる事と知へき也

古語にいはく。歌は詠(ヨム)事の難きゐ非す。よく詠事の難き也と。おのれ按するに。よく詠事の難きゐ非す。知る事の難き也。是と知時はよく詠事も難ゐらし。我大和歌の心と知んと

ならは。其原(モト)とある大和魂の。尊き事と知へき也。いはゆる人情と察し。事變と識の如

きは是の末也。その大和魂の。尊き事と知んとならは。まつ大御國の尊きと知へき事論なし。後世大御國の萬國ゐ優れたる事と。言舉する人多しといへとも。まことは其本原の。あやに尊き實理と知らそ。荒唐悠邈の旨とのみ主張して。のつ異見の臆斷ゐ出るもの少のらねは。信そる者も竊に疑ひ。信せさる者は嘲けるに至る。いはんや廣く他方ゐ示すへけんや。そも〳〵我大御國大八島の本號と。豊葦原の水穂の國としも稱へつるは。八百萬の國に優れて。其水穂強く堅く清く甘けれは也。其清きや玉ゐ似て。其堅き事磐の如し。もとより水穂は稻穀の総名ゐして。餘の穀類と陸穂といふゐ對へるの稱也。水々しき穂也と思へるは謬れり。さて其強く堅き事は。其土の強く堅きの故也。其清く甘き事は。其水清く甘けれは也。其土堅くして壞らく事なけれは。其水清て濁る時なく。相交はりて相汚れさる。其水土の中に孕まりて。生とし生出る物。また何物の萬つの國に優れさらん。獨入命の本たる水穂としも抽出て。群品含めり。扶桑の喬き金桃の重きも。何そ異しまん。貴賤長く定まり。男女和らき亂れさる事も。夙くこゝに萌せるとや。さると開闢の始めより。四海の高き最上に位して。天機はしめて到るところ神化生し。其神達鎮領

ものし給へるゐへに。豊榮のほる天津日の。本つ御國と定まり。底津岩根の萬つ國ゐ先立て。毎朝照徹らせる大御光の下ゐ。生固まれる豊葦原の中津國内。その水土いうで剛潔ならさらん。獨神仙の靈域也と。萬邦仰さまつろへるは。うへも尊き旨ゐる哉。其神武不殺の化もさわたらひ。千萬神の神鎮めに鎮め給へるまに〳〵。葦牙の下根いや固く結はゝれ。浦安の浪いと清く立はなれて。生たてる青人草の。あやに尊きあらもる所行は姑くれく。言舉せぬ言靈の。神なうら幸はふ中に。事と咏はん嗟歎の聲。いうて萬つの國に秀てさらん。萬つの外國。其聲音の渾濁不清なるものは。其性情の渾濁不正なるより出れは也。其性情の渾濁不正なるものは。其水土の渾濁不潔なるより生れは也。聲音は性情の符。性情は水土の靈ならん事。さらに論と待へのらす。しのも濁れる中にありては。善と能見し西土の。芳野の花の美菩と盡せるに似たるも。百千鳥保離のこちたきと免のれされは。彼いはもる。樂て淫せて哀ひて傷らさらん。性情の正と得ん事は。ほと〳〵希なるへし。況や黄なる泉に染紙の。いたく喧擾る響ひとや。猶餘んの萬つ國原。其音すへて單直清朗なる事ゐたはさるは。我天津日靈の大御照しまさらん。大御光の遍

き際りに疎げれは。水ー土自ー然に剛ー潔ならとして。彼雜はり濁れる柔ー土弱ー水の中ゐ。涵育の故也と知へし。されは其謠へるや。譜ー節して是と文とり。鏘ー鼓もてこれとたすくといへとも。ゐは其音清ー爽ならす。其調朦ー朧なるといのゝはせん。獨我安積香の山の井淺のらす。清濁る影し見えねは。難波津の何とのわけて。善や惡やとはん。膂肉の空しく。内木綿の洞らのにして。天霧さはる隈しあけれは。金ー石と假らすといへとも。咏ふたゝちに天ー地と感動し。神ー人和樂く。何ろ百ー獸の舞とうらやまん。驚のはつの聲も。あやに聞へきふし〳〵は。いつれの歌にあらさらんと。天ー然の實ー理と推て。歌の歌たる本の心と。序ー中ひろのに論し給へると思ふへし。擇ひて後に邪なき類ひならんや

古昔と考ふるに。凡唐歌は其志と言もの也。さるは專ら思ー意より出て。其義理れのつのら正しきもの有んには。是と政ー治に施して其益少のらと。其用廣きもの也けらし。伶ー官これと擇ひ采て。更ゐ其聲と永くし。其節と諧へ其律に協へ。つひゐ其調成てのち。樂と倡へ頌とわのちて。朝ー廷に奏し郊ー廟に薦むへし。こゝゐ至て始めて我大和歌の。咏ふとなはち神人と感せしむる妙用に。粗並ふへき事あるに似たり。大和歌はもとより性ー情と述るの

外なく。思慮に渉るへきものゐらねは。其言はのなく其心とさゐくして。云へき義もなく。聞へきの理ある事ゐけん。然む義ー理なきものは。實に義ー理なきゐはゐらと。性ー情の自ー然ゐ出て。其義精く其理深くして。人ー智の測り識へき限りならねは。我より姑く義ー理なしといふのみ。義ー理と弄て天ー地何物の有ん。義ー理と離れて天ー地何ゐの感せん。譬へは道行人のもく〳〵遙峯と回視むゐ。見もらん限りは峰有といふへく。やうやくに隔て目路の及はぬゐ至りては。峰ゐしといはんの外なしといへとも。なは其峯は高く聳えて。雲井の奥ゐたてるの如しと知へし。古ー語に。僅ゐ理にわたれは天ー地の感と塞くといひ。義とも て求むれは性と離れて遠しといへる。義何ゑ性ゐ遠のらん。理また感と塞くへきものならんや。是また人ー智の量れる義ー理は。眞ー義ならす至ー理ならさらんのらに。反て神ー人の性ゐ拂り。實は天地感するゐ足さるもの也。情と離て道と求むる徒の。識得へき限りならんや。當ー時の人此理ゐ達せそ。政教に補ひなく。日ー用に疎きと見て。大和歌は唯一ー時心とやる翫ひとれとしめて。漫りに好色の媒とのみ思ひなせるは陋しのらすや。されは我單ー直清ー朗の聲と訛れりとして。反りてがの渾ー濁不ー正の音と發ひしたへる餘りゐ。其方の博

士をさへに置れたり。されはたま〳〵詠吟するも。彼ふのみ倣ひて。屈したる理りとのはへつゝ。更に歌としもあらさめると。反てたけき事に思へらんはあちきなし。此時にあたりて我紀の朝臣。獨此陋弊と歎き悲ひ給へる事久しきに。時なる哉。しの卑めて世に數まへ給はぬ大和歌としも。もろ〳〵の事と弄給はぬ餘りゐ。撰はせ置るへき大御言のり下り。また人もこそあれ我紀の朝臣。其勅としも奉承り給へりしは。實ゐ千載の一遇ゐして。八雲の道更に開け。敷島の涙再ひ復るへき。瑞運なりけらし

或書に。皇國は萬邦に優れたりといへとも。往古より聖者出す。この故ゐ漢國の如き禮樂の制作なくして。大典の缺たると惜むといへり。予ともて是と觀れは更に然らす。我大御國は天津神代の始めより。天地陰陽の自然に則とり。尊卑別れて長く定まり。男女和きて竟に亂れす。大凡神ゐ奉事り。人ゐ交らふ舉動の。清まり愼めるはいふも更也。或は其八十系亂るゝ事ゐく絶る時ゐく。正しく傳へて萬古一日の如し。禮の大ゐるや。更ゐ加ふへき物ゐる事なけん。又大和歌は。彼水土に隨ふ秀靈の。性情より出る自然の音調にして。さるは開闢の始めより。千早振神もよんたひ。遠く人の世に廣こりては。遂ゐ

我磯城島の道とたゝへて。上下とも〳〵調ひ。神人とこしなへに樂むの聲耳ゐ滿り。樂の盛んなるや。是より上なるもの非しのし。何ろ鐘鼓とし也樂といはん。玉帛とし也禮といはん。鐘鼓玉帛と俟て。始めて禮樂の典備れりとせる。却て其實耗しきの故に。是と盛器に假る者也。されは彼國と觀るゐ。さるへき理りと記し備へたらん太古はしらす。其間也る禮樂の實たるもの。全く行れたる世は。とさ〳〵見及ひ侍らぬとや。さるとのなたの教とのみ尊ひ羨ひて。言舉せぬ我浦安の大御國俗と。ゐのを足はぬわさゐ思へるは。惑へるの甚しき者也

或人問。詩は其もと志と言もの也といへとも。又性情より出ともいはさらんや。其性情より出らんものは。謠ふたゝちゐ神人と感動そへきこと。又何ろ大和歌ゐ異ならん。歌も盛りゐわたるもの有て。さるは忽ち滅と失ふに至ると。其理り同機ならそやといへり。已れいはく。其理然るゐ似て然らそ。所ひ舉るすなはちに。神人と感せしむる事は。獨ゐの大和歌の自然の妙用ゐして。外國人の渾濁不正の音調ゐわるへきならそ。其渾濁なるものは。撰ひて後に是と所歌し。是と節奏して。始めて神人感するに至るへきもの也。山

溪の水蘚は其まゝ采て神ゐ薦むへく。澤畔の根芹は淨めて後ゐ祭るへし。ひとしく自然ゐ生るといへとも。其濁淨穢の水土に隨ひて。鬼神こゝに享ると享さるのけちめ。分るゝの如きと推て知へし。或人諸書の不正朦朧の聲と論せし中に。月ゐ名のる蜀魂。花に木傳ふ黄鳥の。清亮和諧の聲は。人みな聞事と希ひ。深林ゐ叫ふ梟。市肆に騒く鴉の如き。不祥嗷々の聲には。誰ゐは耳とそむけさらんといへり。此譬へ甚しといへとも。和漢清濁の音調分れて。神人一は感し一と感せさるの。差めとしるゐは足れりといふへし」文問。然らは大和人の作れる詩は。反て其調清爽ならんには。この大和歌ゐひとしく。神人忽ち感すへきものの。已れいはく猶然らそ。もとより唐歌は唐歌ゐして。ゐなたの音韻の上にてろ。其聽へきの調はあんめれ。いはゆる訓讀にして。詩の詩たるすゐたゐらんやは。されと我大和言の訓に移して後。其義明らゐゐらんには。其訓に移さゝる事ゐたはす。また我大和歌の調と假て後。僅に其感通すへきには。其調と假そはあるへゐらす。是止事と得さるに似たり。もし其まゝ音讀にせは。其義理の分れさる。其風調の聽へきなき。何そ梵經と讀誦そるに異ならん。されは大和人の作れる唐歌は。殊更ゐ調と離れて。其

理りの上と見るにあるのみ。さるは其調々々ゐらさるゐの故也。凡物一たひ感しては。再ひ忘るゝ事ゐたはさる。是人情也。感して忘るゝ者は。もとより眞に感そるものゐあらす。彼理りより入るものは。其感甚た淺くして。調より入るものゝ。其感深きより見る時は。いはゆる感とするに足さるもの也。ろもゝ唐歌は。往昔大友大津の二皇子。倡へ掬め給ひしより。此道大ゐ興れり。是と眞名序に。移彼漢家之字。化我日域之俗。民業一改和歌漸衰。といへるは實に然り。今の都に遷りても。歴朝盛んに行はれ。當時寛平延喜の大御世に至りては。ます〳〵是と翫はし。良辰佳節ことゐ。群臣宴と錫ふゐも。只文人學士と召て。詩と諷はせ文と作らせ給へり。上のくも好ませ給へは。下是より甚しく。天の下押ゐへて。諷詠弄せさるものなきに至る。此後の御世々々ゐも。此道の博士たち。名家こも〳〵競ひ起りて。其才名世に高のらさるゐ非そ。然るに其金玉の聲隨てやみ。遺響留まるもの希ゐして。のつ人口ゐ膾炙するもの彌尠し。遠くは岑守の凌雲集。仲雄王の文華秀麗集。眞主の經國集なとの若干卷。是皆英主賢王の勅撰也といへとも。名たにも知らぬ人多し。ろの外百家の詩集といふもの。たまゝ世に遺れるも。大やう殘缺にして。ほとゝ

地と掃ふに近し。奇しきに非すや。物ゐ終りあり事に限りあるものは。其始めあれは也。我大和歌の如きは。始めもなく終りもゐし。當時弄てとられさる事。土の如しといへとも。下に流れて行水の。猶あり〳〵て絶る事なく。遠き神代の詠より。世々の撰集古今の家集。ゐつは今樣催馬樂の類ひ。なほ童謠のいやしきまて。落る隈ゐく傳はりて。口々に倡へ戸々に謠ふこと。昔今ゐはる事なし。かく傳はるとしの傳はらさるは。所謂感する所の淺きと深きによれり。詩は其感理りより入て。調にゐきの故に。やむ事速やけく。歌は其感調に在て。理りによらさる故に。達そるや遠し。理りは限り有て。調は究りなけれは也。或云。何そ殊更ゐ理りと調の差ひといはん。大和歌は大和言にして。常に親しけれは忘るゝ事なく。唐歌は唐言にして。耳馴さるゐ故ゐ。忘れやすきもの也と。其耳馴さるゐ故に。唐歌は調より入難く。常に親しきゐ故に。大和歌は理りと待さるものゐらんゐは。畢竟其論同し事に落めり。されは詩歌とも。其性情より發するものに至りては。二つなきゐ似たれとも。其感する所ゐ於て。異なる所以ある事としるへき也。眞名序に。俗人爭事榮利。不用詠和歌。悲哉雖貴兼相將。富餘金錢。而骨未腐土中名先滅世上。適爲後世被知者。

唯和歌之人而已。何者語近人耳義慣神明也。といへるは。たゞ〳〵此序の微意の所在と識て。紀氏の宿憤と述るに似たり

又問。然らは詩は畢竟無用の物といはんゐ。是何の言ろ。清濁は天地のなる所。晝夜のわかるゝ所也。地と離れて天につき。夜と弄て晝にのみよるへけんや。物は用ふる所ゐり。用ひさる所ゐり。ゐなたに詩ゐるは。大御國に歌なくは有へゐらさるゐ如し。大御國に其詩と假用ひならせる事。既に千載の久しきに及へり。其用なしといはんや。物其所と得るときは。無用の物ゐる事なし。其所と失ふときは。歌も無用の長物たるへし。すなはち當時の弊風。こゝゐ發れる事と察して。紀氏の微意ある所と知そはゐるへゐらす。詩は天下の義と盡せるもの也。歌は天地の感と達するもの也。何そ漫りゐ優劣と論せん。只神人幽顯の混淆をへゐらさる。大用と辯するのみ。志は理ゐるへく。情は調ふへきも。又自然のそゐたにして。詩はその志と言て情其中にこもり。歌は情と述て志にも及ふもの也。もとより志といふや。情そのふるや。共に嗟嘆の外ゐ出ねは。情志相通ひて。其流れ混同そるに似たりといへとも。其出る源ことならんゐは。其功驗と見るに及んて。

卒に涇渭の違ひあり。是と喩へんに。歌は神祇官の幣物也。詩は太政官に収むへきの具也と云へし

又或人難していはく。詩は志といひ。歌は言と永くそといへり。古より此歌の字とうたとよませて。大和歌にあてたるは。もと皇國のうたも。謠ひて言と永くそるものなれはなるへし。先哲の説大やう然り。さらは大和うたには。歌の字の意よくのなへらんと。今詩と對舉して論せるは。全く當らさるに非そや。已れいはく然らそ。うたといふは。もと嗟歎の聲とさせる稱ゐて。然のまへ出て謠ふ事といふに非そ。さて其嗟嘆の聲は。自然にひとり永きものなれは。しはらく歌の字の。永言の意と假用ひたるのみ。大よそ大和言に。のしこの文字と當て。うまく叶へるものは非そと知へし。然らはうたは。譜節して謠ふものゐは非さるにや。街談俚諺の類ひすら猶歌ふめり。況やうたゐらんとうたはさらんや。いはゆる神樂催馬樂今樣のことき。うたにあらすして何そ。只うたは出るまに〳〵調へなりて。譜節と待たそ。謠はすして謠ふなる。自然の妙用あるとかたるのみ。是うたと稱ふるの名義也。譬へは美人の雅粉と假そして。れのつのち艶なるの如し。まして雅粉

とはとこさん。麗はしともうるはしのらん物のうち。又天然の風姿神彩。中々に汚るらん。其嫌ひなきにも非さめる。委しき論ありといへとも。今盡し難し。さはさて譜節と待そして。其調とをすものは。其咨嗟咏歎の聲。清朗舒緩にして。僅に一音一言の上ゐも。自然の雅韵ゐるの故也。これと山鳥の一聲。きく人鼓舞そるゐ喩ふ。さはいへ一たひ此誠と失ふときは。其雅韵共に亂れて。彼言靈も何に依てのの幸はゝむ。されは只。此調諧ひて亂れさらんと。まことの歌とはいふめり。何ろ理りとまつの暇あらん。況や節奏に於てとや。うたの名義は粗集中の解き。猶委しくは新學異見に辯せり。是らと見わたして後。詩と對へて。大やう差はさる旨と知へき也。さらは又大和うたも。のなたの歌も。其言永やのに謠はんには。彼理りと離れて。專ら調にあらんも同しのらんゐは。其感應の效驗も。同しかるへう思へらんは猶然らす。既にもいへるの如く。他邦は其人氏。柔土弱水の中に生出て。其性情より出らん聲音といへとも。清潔なる事あたはす。さるは人のみならす禽獸の聲まても。更ふ皇國の禽獸の如きゐは非そ。なは金石糸竹の無情の音ゐ至りても。其濁韵とまぬのれさるは。水土自然の理にして。のの理ゐきに似たるの深理

なるとや。聽人これとき、知へし。盧器の死ー聲すら猶このくの如し。況や風ー聲水音の類ひ。何ぞ皇國と同しのらん。其水ー土不ー潔なるより。天ー氣常に朦朧として。我日の本つ大御空の。清く朗らのなるの如き事あたはさるも。また論なし。さて然何の上も溷ー濁不ー正ならんゐは。其大あるものはいふも更也。小なるものといへとも。大やう擇ひて清濁と分たさる事能はそ。善ー惡邪ー正はそなはち人ー物の清ー濁にして。いよ〳〵擇はさる事と得へけんや。是はた教法の出くる所以也。さると彼國は。聖賢の教こちたきの故に。中々に亂れて。世々治まらすと思へるは。末と見て本と知さるの謬ゐて。是やのて風ー土自然の道なる事と辯せさる也。さてしのも清濁と擇ふとさは。又理りに渉らさる事と得へのらす。此謠ふや。僅ゐ理りゐ渉れは。忽ち天地の感と塞くへし。このなたの歌は。其もと彼理りより出て。理りなさに調へなせるものなれは。なは其調の上ゐ。自然に本の理りと含みて離れさるものあらん。さるは大御國の。もとより清濁なくして擇ひなきものと。同日の論に非そ。抑此ー水土自然の神ー理は。もとより萬ー品にわたりて道すものなし。これらの事皆深き考ありて。委しくは別に論せり。今は唯聲ー音の一ー端ゐのけて說ゐせは。其差ひ毫釐に似たるとも。

忽せに見る事なのれ。實ゐ本ー朝異ー邦の流ー風。萬ー古千ー里ゐ判るゝ所の基ー本也。されは畏こくも我神ー國の美は。清の一字ともて藏ふへし。橘良基の庭ー訓ゐ云く。雖有百術不如一ー清と。此語神ー明に通そへし。何ぞ治ー政に止まらん。されは往昔野ー山大ー師在ー唐の日。越州の節ー度ー使に與へ給へる書に。伏願我日本國也。曦ー和初御之天。夸父不步之地也。途ー徑乎仲ー尼將浮所不能之海也。山ー谷則秦王欲往所不至之嶽也。と書れたり。既ゐのしこの載ー籍に傳ふる所も。東ー方有國其人懇ー直。禮義之鄉君ー子之國。と崇まふめり。登くも愉ー快ゐちそや。いと近くは入ー道時名朝臣實はく。我神ー國の八ー荒ゐ優れたるど。人の首ー面に譬ふへし。一ー身の最ー上に位して。眼耳鼻舌心の衆ー靈こゝに聚る。されはろひとり剛ー潔にして。もろ〳〵の不ー淨と受そ。萬ー邦は是に從ふ四ー肢百ー骸の如しと。此說また深く信するに足れり。仰のさるへけんや

此大和歌と唐歌の。似て同しのらさる事と。序ー中に大ー略辯しられたりといへとも。彼詩のみ玩はれん世ゐは。憚りの關堅くして。通ちん事やすのらさると量り給ひ。唐嘲りの虛音と假て。姑くのあたさまゐ媚謠ひて。物し給ひぬれは。全ー文其微ー意の所在と見

しる人なく。只文一章の麗はしきのみ愛翫はれて。詩の盛んなるにさし加へて世に行れたるは。其慮りの遠きに出つといへとも。實は天津御神のあやに奇しき。大御所爲ゑして。千載の恩賜也けらし。此歌。もし絶す散失すして永く傳はり。鳥のあと久しくとゝまれらはと。願ひ給ひしも世にしるく。千載の今に至りて。太虛の月と望むの如し。歌のさまともしり。事の心と得たらん人は。仰きまつらさらんやは。紀氏なくなりに給へれと。歌の道とゝまれる哉。當初より疏述注解數十家に及ひ。さるは思ひと重ね。精きと究めさるに非そといへとも。其旨とある意と知ことなけれは。靴と隔つる痒のりの。もとのしみと免れさるのみならそ。裟と被くの謬りもろ多のらん。己れ少きより此集と喜みて。讀耽ること年久しく。遂に紀氏の神靈ちはひて。たま〳〵其微志のある所と。見る事あるに隨ひ。おはけゑくも大御國の大御國たる。萬古の始めと認め得て。大和歌の大和歌ならん。千載の惑ひと解に似たりといへとも。なは後賢の非議あらんと恐るゝのみ。希くは世の識者。我過ちと補ひて。深き悔なのらしめは。不朽の幸ひならんと云

天保三年九月十五日

正六位下行長門介平朝臣景樹

やまとうたは人のこゝろとたねとしてよろづのことの葉とそなれりける

やまと歌はのら歌ゑひのへる名也ろのゑみは常に大和歌ともいひけるゑらしすなはち紀氏の家集にもやまとうたしれる人とめしてと有また順集ゑやまと歌えらふ所と梨壺ゑれのせ給ひて高光集ゑやまとうたひとつそへて伊勢物語にやまと歌ゑのゝれりけりなと見えまた字音のまゝにわのともいへりこは詩のさかえたるゑゑされて此ころよへる稱なるへし（たとへは呉琴のわたりて後こゑたなるとは大和琴と名つけ唐畢麥の取はやされて本よりあると大和なてしことわのちよふ類ひ也）さて詩學さのんゑ行はれ歌は人しれぬ埋れ草となりて世にゑとろへはてたると此たひ撰集の事ゑほし興されし時ゑゑひて其勅とさへのうふりしゑはいて此道とゑはやけに復さんの心より我やまと歌はとはけましていへりさは時俗の稱へに從ひて其意と寓したる也此序の全意茲ゑあり心ともちひて見るへし人のこゝろと云々は心のうつるまゑ〳〵幾千よろづの言のはとなりもくといふとの葉は言の端の意にてつめてはことはといふ俗に口のはにのくるなといふはゑ同しくもとのりそめ言といふ也さて歌は言のはしとのみあらはすものなれは打まのせてとのはともいひならへり今はその端と草

木の葉ゐよせて心と種と云るに對へたるそ文のあやなる（釋名の釋樂器云八聲曰レ歌々柯也所レ歌之言其質也以聲吟咏有二上下一如下草木之有ㇾ柯葉上也といへるによりて葉とみて其木其草としるこのことく歌によりて心としるよりことのはといふなといへるは其文意と能せさるのみならそ皇國言のふりとも しらぬ杜一撰の説也）顯昭の古今抄には貫之集にはひとつ心と種としてとありといへりもしさらはひとつのつと後にのとあやまりたるにやあらんされと今流布の貫之集にはさることみえす按るに一つ心はひとへの眞心といふのつは萬つとさへ對して其義のなへるに似たり（この顯注のひとつ心によりて近ころ荷田春滿のひとつの心とせるは非也此ひとつ心はふた心の反對ふて心と濁りてとなふる當時の常言なる事としらす妄にのゝ言とくはへて下の萬のことの葉にむのへたるはつたなきさのしらにてやのて語調もたしろくめり況や對句にいたりてのたへのゝもしとはふく類ひはすなはち紀氏の文法なる事とも辨せさる者也）

世中にある人とわさしけきものなれは心におもふことをみるものきくものゐつけていひ出せるなり

人の世にある事や業やしけきはさら也しの事業しけきまに〳〵心ゐ思ふとなき事あたはを其思ひと見るものゐふれきくものにつけてうたふといふ上には心にねさして外にあらはるゝ大旨といひこゝには其もゑよしとことわりのつそのあらはるゝさまをとけり（打聞に世の人くさ〳〵のなを業ゐ付て其思ふ心といひ出せる也といへるは非也物ふつけてとこそあれ業につけてとはいはすこは事業しけきものなれはこのならす心に思ふを多しろの心にふもふ事と見るものの聞ものにつけてといへる意也）

花になくうくひす水にすむかはつの聲をきけはいきとしいけるものいつれの歌とよまさりける

こゝは鳥虫の類ひにいたるまて世に生といける物のときに感し物に應して發する聲はみな歌なるといへり況や人としてはもたしやむことあたはを又おはよろ作意と用ふるはまことの歌にあらさる事とあのして其本とさとせりこのつはこの歌の我ものならす自然にもとりてこちたきと思はしむる意ありされはいつれの歌とよまさりけるとはけませても書りいきとしいけるもの歌とよまさるはなしみな歌となんよみけるなと事もなく書れろせるとは同しこのらもそうらの心は詩にあたりたる激一語なると見しるへき也のはつは今河鹿（カハカ）といへり彼の聲はほのらのにさえわたりてきくにたへたれは古より人のめてはやすもの也常ゐ山河の水底ゐひろむものなれは水にすむといふさるは秋とむねとなけは春一鶯とむのへてろの聲の世にふもしろきものとあけたり眞字序ゐも擇みて

秋蟬と出せり秋蟬はひくらし也（後世のへるとさしてのはつといふはたのへり今田園にすたくのへるの聲何の聞へきふしあらん田舍のちよへりのへるは彼の通稱也彼種類いつのたへ放ちやりても本所にのへりて住物なれは犬やう其名と取たる中ゐ物とひくとひきといひ河ゐすひとかはつといひ或は青のへる雨のへるゐと其上ゐ付てくさ〳〵別品とわのちよへる也此後天暦の頃能宣兼盛なと其同種なるにつきて今云のへるとも打てめて河津とよまれたるより其さまゐのみよみ來たれると後ゐいたりて清輔卿のはつはのへるの異名也といはれしより世の中しのの思ひなりて實の河津と忘れたるより今とものへるの事とゐもへる）は當らさる事也）さてろのこのみの諸君子此鶯のはつの語によりて風聲水音も皆歌也といはれたるはひたそら類と推て生としいけるものといふのきりと忘れたる也歌はこの性情と述るのみさる非情のうゑとめてうたなりといはゝ何等のひゝきの歌ゐらさらんゐもふへしさてこは當世詩ころゐれと倘みて歌はうたとのみ思ひてろのさましらぬ人の爲にいはれたりといへとも實に千古の正論也ゐはよろ人のこゝろ物ゐふれてはのならそこゑゐり感して動くときはその聲永しろの永きとうたとさし其永くするとうたふといふ後世譜節して謠ふのみとまとのうたとこゝろえたるは末ゐつきて本と失へるもの也もとうたといふはうちうつとものよひてうつろにむなしきの名也さるは晴になけくゐてなし言にしてしのも其こゝろとさゐく聞へきとわりなけれは也畢竟嗟

歎の聲といふせめてこれといへはたゝ阿といひ耶といふもうたの外ゐらすいまた其文義ゐしといへとも聽人の感する事ひとへに其聲のしらへにあり（今こゝにしらへといふは世にまうけてこゝのふる調にはゐらすゐのつのら出くる聲ゐなし阿といひ耶といふも喜ひの聲はよろこひ悲みの聲はのなしみ他の耳にもしの打つけゐゐのるゝとしはらくしらへといふ感應はもはらこのしらへにありて理りにゐらさるとと悟てのち鶯のはつの聲も歌なりといへると自得すへし）ろも〳〵音調は天地にねさして古今とつらぬき四海ゐわたりて異類とすふるもの也言語は世々に移り年々に流れのつ貴賤とへたて都鄙とたのひて定則ゐしさると後人詞ゐつきてのち調といふは本末と取ちのへたるものゐて大よろ違はさる事少きはうへならそやこの三節わつの百有三十言にして古へとはらひ今と盡せりさるは此序の大ひねのみならす此道の準繩にして是にのなへは歌是ゐたのへはうたゐらさる也其言のたやそきは友とちと語ふとく其こゝろの遠きこと天雲の上と望むにひとし次なる諸章の或は時宜にしたのひ或は漢文に據てものせられたる類ひゐわらとされは歴代の諸賢のりゐも此道ととけるに此語にもとつのさるはなく後世一己の說となせりとゐもへる叢もゐは此語の外に出る事ゐたはと大いなりとせさらんや此章とよみ得てのち紀氏の前に紀氏ゐく紀氏

の後に紀氏なきことゝしるへきもの也

ちのうちともいれそしてあめつちとうこのしめに見えぬにこのみともあはれとおもはせとと

こ女の中ともやはらけたけきものゝふの心ともあくさむるはうたなり

こゝおては歌とあらはれて物と感せしむる効驗と舉たり是は詩序に正得失動天地感鬼神莫近於詩先王以是經夫婦成孝敬厚人倫美教化移風俗云々とあるによられたれと中おも正得失云々なとのしひ言はおきてまさにこのなふへきのみと摘採れし也のつちうらともいれすしてといへるに天つちの動く事たはやそく聞えめに見えぬところへたるに鬼かみのさま物ふのく聞えてろの德化いと遠しろく更にめてたき大和ふみとなれりさて何の道も心ともたね思ひとこらすに至りては其はと〳〵の感應いのてなのらんされと歌はこのりやそく手ちのきものなく然らすして然るしるしのいちしるけれは力とも入そしてといひ又しか〳〵は歌也と引とりて書るもの也この莫近於詩といへる心おも同しこのくも詩序にもたれてさなのら歌のいさと〳〵舉られたるはやのてこれとれさふる例の一家の文法也しこのるおも天地と動し鬼神と感せしむるおとゝはいたく物

遠き事に思ひて何れの世何れの歌には雨ふれり神あらはれたりおといともまれなるためしのみ引出めり本より是もさる事なのらさのみいはんはおの〳〵れうき心ちろそる猶常にけちのき驗あらさらんやはしる人にして知へきものこのやのて男女のなのとやはらけ武士の心となくさむるといへるとは誰も親しく聞なそめり人心の感するはすなはち天地鬼神の外ならんや精誠の發するお應しては何物の感動せさらん思ふへしこの歌おめつちのひらけはしまりける時よりいてきおけりおまのうきはしのしたおてめ神と神となりたまへるとといへる歌なりさて此歌といふもの假ろめの物おらす世の中始りける時よりいてきおけりといへり天地既に開けては神人化生し神人化生するに至りては其性情なき事あたはそされは必歌も出來へき大よそのことわりと推究ていへる也

○注おの天の浮橋云々此古注はすへてひの言のみなるにこはわきていみしきひの言也こゝは只歌は天地の開け始めし時よりありといふとわりまてといへる事既にとけり諸冊二神唱酬の御言と指ていへるならんやのつ二神浮橋に立給ひしの天地のひ

らけ始りける時ならんやよく思ふへしさるにたま〳〵古語拾遺ふ一開夫開闢之初伊弉諾伊弉冊二神共爲夫婦云々とあるを見出て余村抄に引しよりわつこのに其據と得ていよ〳〵然りと思へるはいよ〳〵謬也此拾遺の文は其開闢の初めと神世七代の末にも引及ほし大よろにいへるにて書紀等の天地開闢之初といふふ同しのらそ畢竟神代といはんこの如しまとは次ふ文端とあらためて天地剖判之初天中所生之神名曰天御中主神云々とこのけるろしのと其最初とことわり出しなりけるされは天地剖判之初云々は今のあめつちのひらけはしまりける時といふふ語意語勢ともわへるもの也聞わくへしこの開闢之初はこなたにて只あめつちのはしめと大やうにいはんに同し萬葉卷二人麿呂の長歌に天地之初之時之久堅之天河原爾八百萬千萬神之神集集座而神分分之時爾天照日女之命云々のく天地の初といふのみは天照す大神にさへのけていへり歌なとには猶大よそふしのもいふへき也卷十九に天地之初時從宇津曾美能八十伴男者また天地之遠始欲なと猶ありこは皆神代といふにたのふへのらそこれらとあめつちのひらけはしまりける時とはいはれさるに准らへて開闢

之初は天地開闢之初天地剖判之初なといへるふは更に同しのらさると辨そへし畢竟人皇の御代ならさる太古とさして大よろにいへるにてさるは今より仰て開闢の方に近けれは也萬葉中人皇の大御代とさへ打まのせて神代といへるの往々あるとも推なろらへて拘らさると思ふへしひたすらとわりとのみ推て語意の反正口調の緩急異ふるとも辨へさるはいふのひなしさはいへと二神夫婦と成給ひしと開闢之初と書るはもと文の拙さにて前後其例もなき事なれはのくしひたる說も出來ぬる也およそ古語拾遺は勅撰なりといへとも實は廣成の造意に出て杜撰の私說少しとせそこは別ふ辨ありさてまた此二神の大御言と歌也といへるもいみしき謬也何ふよりての然はいへる書紀ふもゝとより歌とはいはれを歌とは大のた歌曰歌之曰ふとある例也されは歌の書法の假字書にもあらす本書ふは熹哉遇可美少男焉とあると一書には妍哉可愛少男歟とのき一書には少男歟と少男乎とす又一書には美哉善少男とも意にまのせて書れたり古事記ふは妍哉と阿那邇夜しと書りさるはもとより歌ふらねはしとけなくのけるもの也もし是ととらはやのて一書の扳矛而喜之曰善乎國之在

矣なとの御言の類ひも皆歌也といひて叶ふへしまた此大御言歌にしあらは書紀古事記等に慥ふ記されて世にいちしるけれは是こそ歌のまさに傳はる始めなるへきと其義とこゝにあけなのら何ろ再ひ後なる二歌と引出て世に傳はる事は是より始まるといふへけんいはれなき事也又眞字序に若夫春鶯之囀花中秋蟬之吟樹上雖無曲折各發歌謠物皆有之自然理也然而神世七代時質人淳情欲無分和歌未作逮于素盞嗚尊到出雲國始有三十一字詠云々こは此文と摸したる者なるに是も素盞嗚尊より始まるといひて二神の御言ふあつのらす又神世七代和歌未作といへれは七代のうちなる二神の唱言と指ていひしふあらさる事まも〳〵明らけしさはいへ此大御言左旋右旋先唱後和の事あれはもとよりおしなへなる平言にあらさるも論なしさるにより て又いよ〳〵歌ならさる事もいちしるし歌はさる業してよむへきものふあらされは也のつ同し言としもかたみに唱ふへけんやはこは前ふ論ありさて此眞字序といふも後人の摸作にして據のたき事のみ多のれと古注のむけに拙き類ひにはあらすさるにふへての先達この妄注にはのられて此大御言としも打まのせたる歌也と思ひと

るに至りて文意とさへ聞まとはれたるはいふのしとも傍はらいたき事也

しのあれとも世につたはるとは久のたのあめにしてはしたてるひめにはしまりしたてるひめはあめわのみこのめふりせうとの神ののたちとのたにゝうつりてのゝやくとよめるえひすうたなるへしこれらはもしのすもさたまちすうたのやうふもあらぬとゝも也

あらのねのつちにしてはそさのとのみとよりそれこりける

もとより歌は天地のはしめよりありといへとも語りつき或は書しるして世につたはりぬるは下照姫素戔嗚尊の御歌ろまさしく其はしめの興りなりけるといへり是によりて上の文は然るへき理りのみといへるにてろれとさす歌の有ふはあらさると知へしてきふけりといひするて然あれとも其源はるのなれとなとうけたる語勢に て其後にやう〳〵素戔嗚尊よりふこれりといふ也さるふ間近き父母の御神の唱言とさしてのなふへけんや八雲たつ天ふるやの二歌書紀の最初ふあれは然ことわりて舉られたるのみ八雲の御歌は天なるの歌よりさきふれと天上にて歌ひ地下にて詠給ひしその

上下の位にしたのひて前後の次第にのゝはらさるは文章也さて此文上に既に天地のひらけはしまりける時よりといへる其意をまさに受たるにはあらねと其あめにして云々其つちにしては云々と彼上の天地と分ちうけていへるやうに聞あさるゝのおのつのらいみしき也

○注に歌のやうゐもあらぬ事とも也といへるは次の文ゐ事の心わきのたのりけらしとあると神代の歌とおとしめたる詞也と思ひあやまりてのくはのける也又天なるやのうたと書紀ゐ夷曲古事記ゐ夷振とあるとみてえひす歌とさへいへるゐと論ゐき事は諸注ゐいへり

ちはやふる神代にはうたのもしもさたまらそすなはにしてとの心わきのたのりけらし

太古は心ゐ感し思ふとゝは人の聞ゐのゝはらす出るまに〳〵いひ出たるものなれはろの文字も定まらそしのとは事の心わきまへ難し今見て然るのみならす當初(ソンカミ)よりも分明ゐはわきのたのりけらしといふ也歌のもしも定まらすは章の長短句の多少定まらさるも也すなはゐしてはもきのまゝにしてつくろひなきといふ(或説云上代の歌は文字の數も定まらそといへるは誤也

神世の歌といへとも五言と七言とゐもるゝ事ゐし其中に或は五言と四言又は三言によみ七言と六言八言によめる事も多けれともそれもみな謠ふ時は節と永くして是とたし余れるとは節とつゝめて短くうたひて皆五言七言の調ゐのなへて謠へるものゐれは三言四言六言八言もうたふ所はみな五言と七言の調也といへるは非也其いはもる五言と三四言とし七言と六言或は八言とせるはやのて文字の數定まらさるゐ非そして何ろいのてこれとは誤といへるろれうたふ節とし物つゝしりて一言二言とわくへけんやしの節もてゐやとると言の數とせは只一言と七言としなは引はへて三十一言にもうたふへし何そ三四言と待ん節と言とと一つに思へるは余りにとさなしては節して謠ふの歌の名義の根元なりと思ひ違へるよりの謬也此歌の歌たる委しき事は前に辨せり)また文字といふ事のならすしも筆して書といへるのみゐはゐらしいにしへ何の詞にもの〻ろく用ゐし事と見えたり其もとは文字出來て後は何のとにもこれと借て記その故ゐ其比はひよりいつとゐく出來し詞なるへし文字はのならそ詞ゐて詞はのならそ文字となれゝはしのるへきもの也(後なる源氏物語にも別れといふとわのれといふ文字といひざる詞といふへきとさる文字なといへり今の俗にもの〻らとのもしひたるきとひもしなといひなれまた戀といふ字にひかれ義理と云字ゐのらまれなと多くいへるは古の遺言ともいひつへし)

人の世となりてすさのとのみことよりろみそもしあまりひともしはよみけるすさのとのみとはあまてるおほん神のこのみなり女とすみたまはんとていつものくにゝみやつくりしたまふ時ゐそのところゐやいろの雲のたつとみてよみ給へるなりやくも

たついつもやへのきつまこめにやへかきつくるろのやへのきと

此文はいのわそれとも聞え難しのくては人の世となりて後すさのとの尊といふ人有て

その人今の三十一言の歌はよみ始めたりといふの外聞へきやうゐしさて考るにすさの

との尊よりその句すてに上わありのはのりの文にわつのに數言とはさみて又すさのと

の尊よりろと同しとといふへきゐらそ語わもころよるへけれのくしたゝのなる神の御

名におきてとやされは此一句決めて衍文也此すさのとの尊よりの十言と除きて人の世

となりてそみろもし餘り一もしはよみけるとつゝけてみれはいとよく聞えて重復のさ

はりなく文のつらも拙のらさる也さて其意は歌は上の二歌より始り起りて世に傳れり

されとも其神代の歌は大のたは文字も定まらす事の上もわきのたきと人の世となりて

後ゐろもはら三十一言に定めて今の心得やすき歌はよみけるといへりさるは八雲の詠

とも天ゐるやの歌とも歌のもしも定まらすそなはゐして事の心わき難しといへる中に

うちこめたる文意也三十一言の歌神代にもすゐはち八雲の詠とはしめまれ〳〵なきに

はあらねとさるのたに定まれる後ならねはなは文字も定まらすといへる中に入へき也

又雜躰の歌人の世となりても多のらさるゐあらねと大よろは三十一言によめるゐれは

今は其大段とわけて人の世となりてみろもしあまり云々といへるのみ人の世とあるは

神代にむかひていへるにて只後世といはんの如し然るを後人謬りて思へらく上にそさ

のとの尊よりろ起りけるといへるは八重垣の神詠ゐて其詠まさしく三十一言なれは此

御歌に本つきてろ人の世に三十一言にはよみならひけるといへる文意也と見たる也さ

れとも千早ふる神代にはと端と改めたれは其文上章と語脉はなれて其意には聞えさる

より再ひそさのとの尊よりの一句と加へてさる意に扶けなしたるなるへし二章別段な

るを一つに思ひて強て文理と造りなしたるよりつひゐのく聞えぬ事とはなれる也（譬へ

は尊よりの下なる曾文字とひきわけて世となりての下にかき尊よりの下ゐの文字とく

はへて人の世となりてろ素盞嗚の尊よりのみろもし餘り云々とやうゐつゝけなさは只

此一節の文意はのりはいさゝの通るへきゐ似たり其意はいま人の世となりてろ素盞嗚

の尊よりかこりし三十もし餘り一文字は受傳てよみけるといふゐ扶て聞へしされとな

は詞たらはねは更に此序の躰裁ゐはあらそ諸註この曾文字の所たのへるとも辨せすし

ひて此意はへゐときなせるは疎漏ゐりといふへし又この附會と正さすして文の一躰也

ゐといへるはいよ〳〵論するにたらさる也）按るに具字序に逑于素盞嗚尊到出雲國始有三十一字詠とある

ゐよりて此惑ひは出來たる也此具字序は下照姫の長歌とおさて後なる豐玉姫の赤珠の

短歌と取て彼三十一詠の系統としめしたる意なれは文義大に異なり其後雖天神之孫海童之女莫不以和歌通情者といへる是也此眞字序も同しく此文と意得あやまちてしの書なせるの又次なる淺か山の歌とも富のと川の歌ふのへて作れるなと思へはわさと改めなしたるにやさはいつれわもあれ今と混すへきにあらすさるとも辨へを今は此眞字序と證として強て其ふりに引直したるもの也もとより此神詠は短歌のみの祖ならすもろ〳〵歌といふ歌の權輿也さるわたま〳〵三十一言あれは短歌の作是より起るといはんも又たのふましき事なれはさるとひの言也といふにはあらを此序の文意ふかきてはさらに然らすといふのみ

○註に素盞嗚尊は云々此註は下照姫のと同義なれは上段のすさのとの尊よりろ起けるといふ下にころ有へきとこゝにしも書たるは彼兩段と一章に見なしたるの故也顯昭の本にはそなはち尊よりろおこりけるの所にのけり天てるふはん神のこのみなといへるいみしき謬は諸註に辨せるの如しさてやくもたつの夜はやへ櫻やは製ふとの夜と同く其數多きといひて多くの雲たち出る雲とたゝみてつゝけなしたる出雲の枕詞也といへりこの夜に伊の發語とくはへて伊夜ともいふいやましいや珍しの如しいやと略してやといふ也と思へるは本末たのへりさて出雲八重垣は出雲の宮の八重垣といふと調にまのせて約めたるにて出雲の宮造りといはんに同し後わも津守の海士の網引と津守わひきのうけの緒の云々小野のふるのらとふるのら小野のもと柏云まなとさへいへる類ひ擧るにたへそ皆風調と專らとしてきゝの疎きといたはらさる古の序の格也八重垣は宮殿の結搆とほめたゝへたるわて大宮と九重といふに同しく千木高しりなと云んにひとしき意はへ也さて其宮造りは奇稻田姫とこめ置てそみたまはん料なれは妻籠に八重垣造るといふ妻と得て屋と造るは古今の通俗也再ひろの八重垣とと折のへそは嗟歎のならひわて自然の事の結句の遠文字は其事とつよむる古の常語にて後に至りてもの〳〵用ふる手わとは也さてのくは說なすもの〳〵今よまんする歌にのくさまに打のさぬるのみにて其興趣はあきの如くよむへきならねは是とも事の心わき難しといふ中にしはらく打こめたるもの也實わ意はへもてにとはもうまくは意得のたき所あり天なるやの歌も是にあわしさてころ異說も

いてくるなめれ又歌に八雲とあるに付て八色の雲などいへるは例の論するにたらぬ
さて此雲のたつといふ事元來とられぬと也古事記ゐ自其地雲立騰とあるも此歌ゐよ
りての一説なるへく思ゆ書紀ゐは雲のさたなし出雲は國名八雲たつは其枕詞なれは
實の雲のたゝん事こゝにのなはも又まとの雲に向ひてはのくはよみ出られぬ事也實
景のよみさまと序歌の調と更に混すべきものにあらす風土記に出雲の國名是より起
るといへるも推あての説にてとり難きいはれあり此詠本文にあつのらねは委くこゝ
に辨せすもへて書紀古事記の歌の序文は其歌ゐつきて設けたるも少のらもみもれは
ゐく盡くは信しのたき事別に論せり
のくてそ花とめて鳥とうちやみのすみとあはれみ露とのなしむこゝろ言葉ゐはくさま〳〵
ゐゐりにける
のくてろは人の世となりてろ云々とうけていふやゝ人の世と移りてよりのの事ゐさし
けくなりゆきてのく萬つの言の葉となれるといふ也こは發端やまと歌はといふよりい
ひ出せる也といふまての大旨とこゝにて註せる文意也めてうちやみゐはれみのなしむ

なといふも畢竟は皆感する事としるへし四季のつらにもあてすしらへにまのぜたるの
めてたき也
とはき所もいてたつあしもとよりはしまりてとし月とわたりたのき山もふもとのちりひち
よりゐりてあま雲たなひくまてゐひのはれるとくにこのうたものくのとくなるへし
こは神代より歌のきさしの起りて此古今の頃まてゐひろこり行れける喩へ也樂天座右
の銘ゐ千里始足下高山起微塵吾道亦如此行之貴日新といふ文ともて書りといへり
されと千里云々ゐ年月とわたりの一句とくはへて神代より今に至れるとわりとのゐへ
高山云々に天雲たゐ引まての一句とろへて漸ゐ成遂たる趣とみせたるなと例の我物ゐ
して書成たるもの也ちりひちよりゐりてはちりやひちやつもりのはれる也ちりは埃と
いひひちは塊といふさて此文過去と指なのら裏ゐ未來と含めて後も猶のくの如くゐる
へしといへる意に聞ゆるかめてたき也ゐるへしとゆるへて後來とも兼たるは上文の事
の心わきのたのりけらしと今につきて神代ともはのりたると同し心はへにて再ひとわ
るへき趣きとひとへにて聞とる格也後の文になりとなるへしけるとけらしなとわさと

おほめきて書あと類ひにあらさる事は上に此歌もといひ神代にはとあるとうけたる意はへと味ひて知へし

なにはつのうたはみうとのおほんはしめなり

おほさゝきのみうとのみにはつにて見こときこえける時東宮とたうひゐゆつりてくらゐあつきたまはて三年ゐなりにけれは王仁といふひとのいふうり思ひてよみて奉りけるうた也この花はうめの花と云なるへし

こゝも上とうけて何のうへにも此道のもきわたれる事實と述たりやうて嬰兒の手ゐちふも歌にあらそやといふ意はへ也なにはつの歌は難波津ゐ咲やこの花冬こもり今は春へと咲やこの花の歌也帝の御世しめとはしろしめす大御代の初めと祝ひ奉りし歌なりとの意也うくてはいたく言たらねとなへて世に誰もしりたる事なれは只うの端緒とあけて采女の云々といへるに句とならへて文となせるのみされは采女の歌れよりよみてといへるも同しく言のたらさるもの也故に此二句には後人の意ゐまうのせたる妄說多し辨せすは有へからそ先歌の意は春まち出て諸木の花の咲わたれるに御代の初めの賑ひと淮ちへていへり再ひ折返して咲や木花と歌へるに天の下の彌榮えにさうえはてゐさまみる心ちしてけにも愛たき歌也仁德紀に春正月御位ゐ即玉ひしとあれは其春の歌也ともいふへきなれと然らし考るに御即位有て四年二月の詔ゐ今朕臨億兆於茲三年頒音不聆炊煙轉疎即知五穀不登百姓窮乏也云々同年三月の詔に自今之後至于三載悉除課役息百姓之苦云々又七年四月天皇居臺上而遠望之烟氣多起是日語皇后曰朕既富矣豈有愁乎云々又十年十月甫科課役以擣造宮室於是百姓之不領而扶老携幼運材負簣不問日夜竭力爭作是以未經幾時而宮室悉成故於今稱聖帝也これによりて見れは此歌よみしは七年より十年までの間に有へし四五年までは天下貧窮なりしにはさしも榮えたる此歌の調ゐゐはぬこゝちす統御八十七年の久しきには七八年のうちは御代の初めといはん事もとより也

○註に東宮とたうひに云々歌の意はしゐ訝ゐり思ひて諭し奉りしには非さる事本註に解るゐ如し又王仁ゐよめりとする事何れの書にも見えたる事ゐけれはいと覺束ゐしこは誰にても有なん按するゐ太さゝきの尊とそゝめて御位につけたりといふには

當世に鉅儒賢才の名ありてこのつ兎道のみこの師とし玉ひし王仁のさとし奉らん事いとものつきづきしけれは然も附會せるなるへし太子薨し玉ひて讓る所なく御即位ませしは當然の理にして自然の事也何ろ他のそゝめとまち給はんさて此歌と强てこの諷諭せしものゝとりなせしは次なる六義のはしめの風に配たるとみて詩に上と風刺すとある意はへによせたる也次にこの二歌は歌のちゝはゝとあるとみれは撰者も王仁のよめりしといふにしはらくよりて難波津と男歌とせられたるにやあらんされといふこゝろ思ひてよめりしといへる方にはもとよりとられさる事御門のふはん始也といへる語調ゝしるし後なる奥義抄にそら位に即玉へる時に新羅の王仁の奉る歌也といひてそゝめ奉りし歌とはせられさるとやさは祝ひの意歌のふもてに明らかにてまこゝろへさすちなけれは也又餘桟に難して云應神紀云四年春正月辛丑朔甲子立兎道稚郎子爲嗣云々このゝれは兎道の皇子太子ゝ立玉へる事は紛ゝし應神天皇崩御の後御位ゝ即せ玉はん事ところ互ゝゆつらせ給ひつれ又兎道の皇子の御事と申さそしてたのひに讓るといへるも覺束なしといへりしこゝろと近ころ伊勢人須賀直見この東宮とのゝ

文字はとの寫誤ゝりとして東宮と互に讓りてとよみ解たるは實にめてたき說也さてはいと明らかにて更ゝ疑ふそちなしこの花はうめの花云々是も冬こもりは春とゝふこすの枕詞なると辨せす冬こもりし花の咲出るとやうゝ見ゝして梅なるへしと思ひとれるもの也このならす梅とのみさせるにはあらそ

あさゝの山のとの葉はうねめのたはふれよりよみて

このつらきのゝはきみとみちのゝくへつこのはしたりける時ゝ國のつこのさことにろろこのなりとてまうけなとしたりけれとそさましこのりけれはうねめなりける女のこのはらけとりてよめる也これにそゝはきみの心とけにける

あさゝの山の言のはとい萬葉卷十六に安積香山影副所見山井之淺心乎吾念莫國とある歌也右歌の傳云葛城王遣于陸奥國之時國司祇承緩怠異甚於時王意不悅怒色顯面雖設飲饌不肯宴樂於是有前采女風流娘子左手捧觴右手持水擊之王膝而詠其歌爾乃王意解脫樂飲終日とありさて歌と傳と併て考るに葛城王其國司祇承等のすへてなめしきふるまひなると怒てさる設けゝとも樂まさいと不興なりけれは更ゝあつこのひわひて前の

采女の風流なるの有けるを其宴席に出してあへしらひもてなさせつる也こは都の由緣あれはのねても此宴會ゐまとひしにても有ぬへしさて其うねめ蓋さすとて此あさの山と謠ひつゝいと近くさしよりて膝なと打てなまめきたる也（或説に左右の手のふさきたるにはいつれの手ゐて膝とはうたんゐはつのなしと難したるは餘りにつたなしもたる盃のさしゐのれさらんやは）さて歌の意は我心君ゐ淺からんやいとあつのしくも思ひよせ參らすとなけさうひたると戯れよりよみてと云る也いはゆる序歌ゐて山の井のは淺きといはん爲也また安積香山とおけるはこの宴會のの山の邊りゐとにてやのて其所とさせるならん宮城郡と國府に定められたるは其後の事なるへし昔山の井といへるはゐさと掘たる井にはあらて山川の流れといさゝのせきてよとめ堪へたる也其滯れる水とゐといひ其のまへる柵とゐせきといふさるは居の意にて今も流ぬ水と居水といへり影さへは同十三卷の長歌に天雲之影寒所見隱來矣長谷之河者云々とある類ひにて今もたゝ安積香山の影のみもる事にて其形容といへる也さて淺きといはんのためゐ山の井とおきて影さへみゆるとしらへたる心詞なつのしく姿けたのきものうさてころ王の意是に解て宴樂ひねもそゐ及へりといへり是そのたけき心となくさめしものゐて又さる感情は專ら本の句のしらへにあり此歌より淺きとたにいへは安りに山の井と用ひてのの調といたはらさる後世の心と捨てもとよみ出たる古人の雅ひと見るへき也又世に此淺の山の末と淺くは人と思ふ物のはと唱へのへたり六帖好忠集大和物語なとゐしのあれは既ゐ此頃詭りて彼手習ゐもたのへる方とや傳へけんさて此歌とのく唱へのへたるといのゐと考るに此戯れ歌と諫めの歌と思ひとりしよりのさのしら也淺き心と吾ゐもはなくにと有ては諫めの方にはいとも似けなき心ちすれは淺くは人と思ふものはとして自他ととりのへのつ調とつよめたる也さて其意はいのて君とはしの淺々しく思ひ輕め參らせん質一直なるの却て疎そのけゐみゆるゐめりなとやう彼あつま人の不骨なる方に扶けなしたるさまにゐはしたらん意ならめと猶しのは聞とり難したとひ然聞もとものくもきすくゐる理りと立ていさめんにはなの〳〵怪ふ方ころはあらめ其怒なこむへきものならんや又しの實たちて諫めたらん言の葉といのて戯れよりよゆりとはいふへき諸説水と持膝と打と戯れ也と思へるはたのへりよしや水と持膝と打ともさはのり正しく諫めたると戯れとはいひのたしこは其歌の意の戯れたる

といへる事上に解るこの如しやうて本文に帝の御初め也采女の戯れよりよみてと云るは二歌の意と解釋したる也其形狀とのみいへるあらんやこの主文而譎諫之者無罪聞之者足以戒なといへるとうらやみて其德とたのくせんの心よりみれはいと淺はこのふさる効驗の有へき歌とも思ひなされねはこく惑へる說も出くる也よく眞情と推てみるへし陸奥はこのりのはしたなき所にて宮の內につこへ馴たる風流女の立まへるたに有と思はすにこゝる歌よみ出たらんには誰の人このは打解て與にいらすやは有へき其用は只一時の怒と流すにあるのみ外に理りて責て誣る事あこれこは詩に關雎麟趾之化王者之風鵲巢騶虞之德諸侯之風也あと書る類ひとみて唯御世の初めと祝ひ戯れに怒となこめたるはこのりの事は何ふもあらしと歌の父母也といはんふは彼關雎騶虞の如きの德化なくてはと思へるより大雀尊と皇位ふすゝめ葛城王と諷諫せるふと牽强附會の說とあしてこの詩序にきそへるもの也さるは詩情ふも疎く本より歌はわりなくはこのふきこの本意なる事とも知さるものふて中々此集の罪人といふへし然るふ新撰和歌集に上以風化下之以諷刺上雖誠假文於綺靡之下然復取義於敎誡之中者也といへるはいこのにと

いふに凡古人の漢文ふ書るものはこのなたの文例句法にこのらまれて其意にはたこへる事少このらもと今も大このた詩序のまゝと書うつされたるにてこのたへはこのなはぬ所多くやこのて此序ふ眞心と述られたるとは事のさま同しこのらすこのつみつこのらよまれたる歌の心にも違へるもの也もとより歌ともて下と風化し上と諷刺せる事なとさ〳〵ふき事也しこのいふこのら國にたにさる例はいよ〳〵聞しらぬこゝちせるとや風化諷刺ともて詩歌の德とこのたるはなこの〳〵なる事也よしやさる事たま〳〵有とも打まこのせて歌は然るもの也とはいふへこのらもと又この新撰といふもの今の本はそのこのみ紀氏のえらひ玉へるにはあらもとみゆとはへつに論ありされは其序文にはさてもなは疑ひなきふあらすさはとまれ大よそ皇國人の書るものは假字書あらはろれと質とし照して眞字書とは取捨すへししらす〳〵事質にたこへるもの多しさるは已この言語と文字のうへともとより調のこのなはされは也（譬へは都人のこのりにひふ詞してものいひこゝろむるに大このたなる事こそいひ出られてもへて事の上違へるこの如し況や唐さへつりの我大和言に叶ふへき謂れなきこと也としるへし）さて萬葉の傳文はさる歌よみたらん時の形容と後より思ひやりて書たるもの也水と持とあるは山の井ふ准へたる意

といふ説あれといふあたらすこの水は酒の字の寫誤にても有ぬへし又つら〳〵文勢と
みるに此傳書し人も諒論の歌とせしふそあらん髣髴なしすへて萬葉中の詞書は受難き
事のみ多き中にわきて此十六の卷は其歌の趣意に遂へるもの少のらす大抵のゝる傳と
いふものゝ類ひ一わたりは中々世人のうけのふものゝてさて眞實ゝは遂へる事多きう
のし却て實事のうへゝは打わはぬいふのしきふしも変るへし只耳にきくは身にあそ思
ひの外にして切當ならさるのもゝ也遠くは仲丸の天原振さけみれはと留別の歌とし近
くは道灌のかゝるときさこそ命の惜のらめと辭世の詠とするの如き實は其ことわり更
に有ましき事なると大よそなる打つけには誰もさこそと聞なすより相つたへて世にも
廣く成行めり深く心と用すは有へのらもさてこゝの文たはふれよりよみて此ふた歌は
云々と云るは詞つゝのさるに似たれといふしへは此てもしにとさまる意ありし也大井
行幸の序ゝもゝはれ我君の御代長月の九日と昨日いひて殘れる菊み玉はん云々土佐日
記にも昔の人と思ひいてゝいつのときのわそるゝまた海神におちてといひて何のあし
のけにとつけてはやのつまのいもし云々なとあるきのふいひて思ひ出てゝおちてといひ

てなとのて文字みな同し格也次にもつくは山の麓よりもしけくゝはしまして云々ふり
にしとともゝこし給ふとて云々つたはれとて云々なとたゝみていひたといへは鎮火祭
の文に吾乎見阿波多志給比津止申給弖吾名妖能命波上津國乎所知食倍志吾波下津國乎
所知牟止申弖石隠給弖與美津枚坂爾至坐弖云々なとの類舉るにたへそこれらとたゝに
いひすてたるものとのみ見るは古語にくらき也委しくは外に辨せり

○註ゝ葛城の玉と云々こは萬葉の傳文のまゝとうつしたるものゝれは論なしたゝ前
の采女と本文ゝ從ひて采女とのみ書るこの傳とかはれるのみ

このふたうたは歌のちゝはゝのやうにてそ手ならふ人のはしめにもしける

御代の盛は木の花の匂ひに留まり大君の怒は山の井の影と流れていとも愛たき二歌な
れは手のく初めといはひて先これと習はせ難波津は男歌安積香山は女歌ゝるの故ゝ習
ふ子にあたりて父母のやうゝといへるのみこれと世にあらゆる歌といふ歌の父母なり
と思へるは非也さて歌の父母といひ手習ふ人のはしめゝもなといへる何となくたはや
すけに聞えて今は歌のゝまれく歌ほひたる世中のさまゝもひやらるゝなと文の妙也さ

て今の世の伊呂波に同しき物ゐれはたゝ難波津の歌安積香山の言の葉とのみいひ註に
も歌と挙さるはたゝ賤き世ゐしらぬ人なけれは也（餘社ゐ云或注に安積香山の歌は
なきとよしとすとゐれとそれはいはれすゐまねくしりたる事なれは人のゐまねくしりたるともて歌と出すましくは注そ
る事も無用也又出雲八重垣の神詠はゐはゐまねくしれるとやと云るは
非也或注にしたゐふへし今の世の伊呂波といふも色は匂へと散ぬると我世誰そ常ならん云々の初と摘ていへるゐて今と同意也さると伊呂波とのみいはんとたらすとして全
くとなへは中々ゐそゐりぬへし今と推て古の趣と知へし八重垣の神詠と同類ゐいへる
は當らぬと也又註そる事も無用也といへるもいゝよし歌とは出さすともゐさゐ山の
とゐ葉とゐらんには其
意と説すは有へゐらす）

そも〳〵うたのさまむつゐりゐらの歌にもゐくゐるゐあるへき
ろも〳〵〻更に文端と起しいふ時上にゐたりて置詞ゐてそれもそれゐれとゐろれはろ
れゐしてなといふ意の省き約まりて出たる語なれはゐくのとくいつれ中間ゐれく例也
抑の字とゐてたるも其意と見るにたよりゐり後世發端にこの語とゐくはとゐりなしさ
て歌のさま六つなといひて其品とゐくらん事は絶て有ましきとゐくいれたるゐゐの
當世もてはやすゐら歌には六義ゐりなといのめしくいひ立てやまと歌の言痛（コヤガ）ゐらぬと
いめゝしきかたにゐとしめて取ゐけぬ習俗なると下ゐ憤れるより彼ゐのはこりて貴（ウト）しと

する所と奪ひてみす〳〵ゐゐものにして嘲りしめしたる也さるはしはらく勢ひとひし
くたはゐりにて畢竟は下に笑たるたはゐさといふへし和歌にもとより六くさの体ゐれ
は唐の詩などゐものゝる事有へしとまざしく彼六義と掠めなゐら却てしらすゐはゐ凌
きたる文也（醫へは和氣氏の醫の丹波家に向ひていはんに我大御國の産物ゐ人參といふ良藥ゐりろこの專ら崇む唐山なとにも此物なき事ゐちしといへるゐ如
し丹家きゝて如何は答ん中々口と開ゐんはゐろゐるへし今の文勢語意是にひとしきも
の也後世此一時の意と悟らそして是と千載の模範としてうたよむわさとはふゐき習ひ
有物ゐ思ひなせるは歎くへし昔も今も機に臨て時と救ふには後の弊とゐへりみるゐい
とまなきと如何はせんまた勅と奉して撰勒せし此集の序ゐれはゐしてみてもゐしてみ
つゝしみてもつゝしむへきとしの私さまにたはれてはしきまゝならん事よもゐらしと
思はんは紀氏の紀氏なるとしらさる也こは此撰集の一擧ゐよりて積年の蓄憤とのへら
れたるものゐて後世文章とことゝしてみたりゐ上とはめ下にてらひ名望利達とはゐる
類ひにゐらそされは次にも古の事とも歌の心ともしれる人纔に一人二人也といひて傑
出の人とも心のまゝゐ褒貶せられたるなと尋常勅撰の序の体ゐらんや猶此外の人々其
名聞もるる野へに生るゐつらのはひひろこり林にしけき木葉のとくに多ゐれと歌とのみ
れもひて其さましらぬゐるへしゐといはれたれたり此中にいゐなる誰ゐはこもるらん歌の仙
の中に官位たゐき人とは憚ていれそといへるはしはらくの謙辭ゐして實に當今くはふ
へき人ゐる事なけれはさる高きゐたりも野へのつらのゐけはなれすしけき木葉の數
に入へし其外も今の世中色につき人の心花ゐ野へのつらのゐけるよりゐたなる歌はゐなき言のみ
いてくれはゐと書る何とゐ憚り何とゐいはさ花ゐ成ゐけるはゐされ或はそしるも只道と興
すの一すちのみ曲士の窺ひしるさゐゐにゐらんゐるはゐされゐるゝや誹るや恍惚として影とと
るに似てやとら打つけならねは全意詩文と斥くとゐへとも全意詩文ゐ寄れるゐ如しこ
ゝにゐいて文人學士もむゐふに端なく逐んに跡なけれは天下醉るに似て千載の今ゐ其

眞と知人あしさはいへ此實内にありて此驗あらはれさる事あたはぬは是よりやう〳〵貴きいやしき歌のさましる世となりてこの花のあした月の夜とにもてあそはれ或は已のし〻歎ひ悲ひ行のふにも再ひ此歌とのみよむ事となれるはひとへゐ此集のいさとゐるとゆくへし退すのひて後撰拾遺の撰ありて後御世々々これゐ倣ひて終に廿一集に及ひ世ゐひとしく行はる〻事も只此集開基の庇蔭によるのみ譬へは鼻祖の鴻業隆んなる時は子孫自然に相續て榮もるこの如し龍の頭あるや全身龍ともて動くもし其頭なき時は蚯蚓何そゐのたむといふへし

さて次々にいへる六くさすへて當らぬ事也詩の六義すら世儒論ありて大のたは意得のたきものゐるへし是と歌にあて〻うまく當らぬは紀氏もよくしられたる事なれと近世詩に競ひて三式の撰あり四病八階ゐと立られたる其例にわさとしはらく本つきて彼六義の説とゐけ其擧るにつきて又其六義の實なきと暗ゐあらはせるものにてこは火ともて火とけつ一家の文法にしてはとんと謎語に似て其よむ人として自悟せん事と待もの也ゐろそのにみてゐやまつ事なゐれされは今の六躰のろへ歌云々は世ゐいひ慣しゐらもる歌の名目とたよりにまのせて一時其數に配(アテ)たるのみさらに意と用ひたるにゐらす元よりさる事ゐけれは也そへ歌ゐるらへ歌たとへ歌なと名こそはのへてもいへ歌にはいの〻よみわくへきすへて同し意なるとや此外た〻言歌いはひ歌なと六くさの數にあつへき名ならんやされは此歌の前に此稱なく此序の後ゐ此稱ゐし（書紀の神武の卷に諷歌倒語とゐるゐそへうたさのさきこと〻仮字付たるはもとより後のしわさにてやのて此序のそへ歌諷の意ゐ似たるともてはめたるもの也こはふうのたうこと音讀ゐそへき事別に辨ありまた萬葉に譬喩歌とゐる是もひものと音讀にのけるの記者の意也たとへ歌ともよみて其意たのはねは然よまんも妨なけれと打まかせてたとへ歌と云る事なし況やその外の名目も今古ものゐ見えたる事なしもし正しき名ゐらんにはたま〳〵は家集撰集なとにしの〳〵の時よめるたとへうたしの〳〵のろへ歌とよみけるなと或はのそへ歌となんよめるいはひ歌とつのはしけるなとやう有へきにたえてさる事有事なしもし其心は其歌にて明らのゐれはしのことわるゐ及はそとといは〻何そ又其心六つにとい〻まらん又何そ歌の名稱と唱ふへき更にその筋なきこと也）中ゐものろへうたといふ躰有へうもあらすこは今の街謠に一より十まてゐらへ諷ふとのろへ歌といへる類ひの何そ名稱ありしゐるへしもとより唐の歌ゐもかくそ有へきなとわされたるゐこの名目もうきたらんとは推はのるへき也是としもふのき義理ある事に思ひて先匠さま〳〵論あれと水の月と〻さむるゐひとしくいよ〳〵亂れていよ〳〵ある所としらさるものこは作者の意と得さるのみならそ文辭の調にうとさのもゑ也然はあれと強て配當(オシアテ)たらんにはこのしこの六義の説に似つのはしきといふへきなれは風にろへ歌とあて〻風喩するやうの意にとれるなとつき〳〵も猶もこのりあるのたゐはめたるもの也

そのひくさのひとつゐはろへうたゐはさ〻きのみのとろへたてまつれるうた

なにはつにさくやこのはな冬ごもり
今をはるへとさくやこのはなといへるなるへし

此六くさの歌は荷田春満の古注より前に又詞そ一人の注也といへるはさるへきと也按るにもとは此歌細字ゐ書たりけんと後の難注ゐ分つへしとていさゝの大字に書たるの紛れて本文の行になりたるなるへし本文は一つにはそへ歌二つにはゐろへ歌三つにはゐ云々とこそ有つちめ舊説には是等の歌や是々には叶ふちんとやはり紀氏の書るゐりといへれと數首の歌と序文の中ゐ書くはへんもいのゝゐるうへしの此うたと讀つちねて は前後の文勢いたく亂れて調へ通らねは決めて撰者の書れたるにはゐらすもとより此六体は一時の名目ゐして其實なき事辨せるの如し歌なとゐつへき事尤撰者の意にゐちすされは大さゝきのみのとゝいふより歌のけてとり捨へきもの也（難波津の歌の意は前に解るの如く帝そそへたるにはゐらそ大御代と准らへたる也今は木花と此花とさしたる方にみてみのとゝろへたるとせるゐるへしもしは是も古註の如くいふのりゐもひてよめりと見たらんならはもとよりいふにたらそ）

ふたつゐはゐのそへうた

さくはなにおもひつく身のあちきゐさ
みにいたつきのいるもしらすでといへるなるへし

これはたゝことにいひてものゐたとへなともせぬものなりこのうたいのにいへるにのゐらんろの心えのたしいつゝにたゝことうたといへるなんこれにはのなふへき

此歌は拾遺集物名につくみとのくしてやのて其鶏の上とよめる黒主の歌也餘材抄に勞の身に入といふといたつきの矢の身に入とそへて鶏の花に戯れとりて人のねらひ寄て射るともしらぬのあちきなき事とよめるのといひてるろ然るへき又同し作者の我心あやしくあたゐ春くれは花につく身といのて成けんと同しつくみをよみたる歌ゐ並ひて木たれは是も人の花にうのれたると云るのとも思へと人の花をめてんにかゐらすいたつきゐりてあちきなしともいふへきゐらねは事のさまのなはさるうへゐさては矢によせたる詮もなき也鶏の上にこそいたつきの矢も似つのはしけれ餘材に和名集ゐ平題箭揚雄方言云鏃不銳者謂之平題（和名以太都伎）郭璞曰顯猶頭也いたつきの矢さきはまろゐる故に小鳥ゐとゐ疵とつけすしてとらんとては今も是ゐて射る事也と申すと云り按るにしの

疵つけしと勞はりて物それは其矢といたつきといふ成へしあちきなきは今も俗にいへるろよく當れるのひあきゐはのゐきとのねたる意はへ也無狀無賴等の文字の上ゐ泥むへのらすさて是とのろへ歌にあてたるはつふ〳〵とつゝしりたる語調ゐれはなるへし前ゐいへるの如くのろへ歌なといふはしはらく六義にあたりて有ゐふ名目と舉たるゐれはもとより的當をへきにあらそ

○顯註いつゝにはたゝこと歌と云所に云今註云此花歌者平兼盛詠也然者此註不可云貫之作仍有此註之古本不可云貫之自筆歟或人云公任卿之注也云々此義宜歟とありさらは此六義の歌と難したる古注は公任卿也といへる或說ゐ顯昭も同意せられたる也其文意其文体と按そるに尤然るべくおほもさらは自餘の古註もみな同卿なるへしゝのるに餘材に公任卿也と雖もしのらを顯昭抄に公任註とてひのれたるは別に眞字也しのれは只天曆のころより後の或人の註と意得へしといへるは非也其公任卿也といふ說もやのて顯註ゐあらすや別に眞字の注ありとて又假字の書入ともなとのせられさらんすなはち眞字の註も古註と同意ゐるともても同卿なると知へしされは顯昭も

雨やうとも用ひられたりさて此註ゐ是はたゝ言ゐいひて物ゐたとへなともせぬもの也とは是とまさしく六義の賦也と見たる也釋名ゐ敷布其義謂之賦ゐとゐるゐのなへんとそれと大のた敷布せさらん歌はすくなけれは取分て是と定めんゐよしなく文飾ゐきの似たるのたより次なるたゝこと歌と引よせたるもの也されとのろふるとたゝことゝ何そ一つならん猶たゝこと歌の所ゐいへり

みつにはなすらへうた

きみにけさゐしたの霜のゐきていゐは

こひしきとにきえやゐたらんといへるなるへし

これは物ゐもゐすらへてそれのやうにゐんゐるとやうゐ云なり此歌よくのゐへりとも見えすたちちめのゐやのゐふこのまゆこもりいふせくもゐるのいもゐゐはすてのやうゐるやこれゐはのなふへのらん

君にけさは紀氏の自筆と云傳て難波人遠里何のしのもてる古本ありてそれには君のけさとゐり是ろ正しのるへき君ゐとゐるは解のたしけさしも君の起ゐのれていなはいの

に戀しくさるたひ〳〵に身も消んそらんと也あしたの霜は只おきてと云ん枕ゐのりて其霜に准らへたるならねは此歌こゝに叶はさる事論なし

○註に是は物にも准らへてといへるも文字は後に誤入したるゐるへし物にもといへは下のて文字おのつのら濁られて忽ち准らへぬ事となるは語調の定れる格也今は物ゐ准ふるといふなれはも文字ありては叶はす顯本とみるゐはたしても文字なしさてもとよりなそらへ歌といへはかならす物ゐ准らへて其物のやうゐ有といふ意ゐるへきと此歌よくも叶はすと難したり是も六義の比の正面ゐゐて〳〵いへりたちねの云々は萬葉卷十二ゐ垂乳根之母我養蠶乃眉隱馬聲蜂音石花蛸蠣荒鹿異母二不相而とゐる歌也是も序歌ゐれはなすらへ歌ゐは更にゐなはす蠶の眉にこもれるはゐたちも見えそ其さま變りゆく物ゐれはいふせくといはん爲に置りいふせきは物のわきためゝおはつゐのゐきといふ又ゐひこといひれこさんとてたちねの母ゐと置るのみ母は子とゐひそたつるものなれは也一首の意は心もとゐくいふせくも有哉此ころ妹にゐはすしてゐれはと打歎きたる也然るど諸註親の本にありて相みゐたき女と蠶の眉に

こもれるゐゐすらへたりと思へるは非也もし蠶と女子に譬んには重て妹にゐはそてといふへけんや更ゐ一首のすち通らぬ事也卷十一ゐも足常母蕤子眉隱隱在妹見依鴨これも末に妹とみんといへは同し序歌なるど知へし卷十三の長歌ゐも帶乳根矣母之養蠶之眉隱氣衝渡云々是もゐれの眉にこもらんとする時は息つかしく苦しけに打ふるまふさまといひて只いきつきといはん序のみさて是等みなゐひこと讀へし親のやしなふ女子とさすと思ひしよりさる方にゐなへんとて母のゐふこと用言によみ來れるは認也さて蠶とこといふは引籠れる方の稱ゐてこりこはるこゝしきなとのこもみな其義にて籠海鼠なとこといふも籠はこもりかゐる意海鼠はこゝもりて耳目頭尾あらはならさるの稱也たま〳〵搜神記に漢禮皇后親採桑祀蠶神曰苑窳婦人寓氏公主公主者女之尊稱也蕘窳婦人先蠶者也故今世或謂蠶爲女兒者是古之遺言也とゐると見て猶母の養蠶はこれによりて娘ゐたとへたりなと思ひまとふ事なゐれ又後世は鳥獸の類のみゐふといへとも古へは人にもいへりされといやしめたる語にて子弟婢僕より禽獸まてに至りていふしめ置てはく〳〵みめくひ意なれは也やしゐふと同

義にして差別あると知へし書紀雄略の御卷に天皇欲使后妃親桑以勸蠶事爰命螺嬴聚國内蠶於是螺嬴誤聚嬰兒奉獻天皇天皇大咲賜嬰兒於螺嬴曰汝宜自養螺嬴卽養嬰兒於宮墻下仍賜姓爲少子部連とあり是とみるゐそのみは人ともゐふと云しより此誤は有けんとおほも今も奴僕と幼童より使ひそたつるとやゐて子のひといひ命の限り召使ふとのひ殺しゐといへるはたま〳〵古言の遺れる也（打聞ゐ此歌は萬葉によるに譬喩歌の下に入へくこゝに）

ゐなはすと云るも非也こは寄物陳思と云中にある歌なれはひとへに譬喩也と思ひ誤れる也なすらへ歌にのゐはそは譬へ歌にもいゐて叶はん寄物陳思は萬葉撰者の後よりのけし題目なれは後世さる題とのまへてよめりしとはこのはれりされは數十首の中譬へたるはもとよりにて其物さぬは序にもゐれ枕にもゐれ大よろゐ集よせたる物也やゐのて此たらちねの歌とさしはさみたる前後の歌嫋婦等之績麻之多田有打麻懸績時無二戀渡鴨玉手次不懸者辛苦懸垂者績手見卷之欲寸君可毛これらのたゝりと云るもたすきといへるもうむといひのけと云んゐ爲の序のみ譬へたるには非そ今の養蠶もひとしき序ゐるとしるへし）

さて本書に母とあるとおやといへるはいのにと考るゐ其はしめは母の字とやゐてゐやとしもよませたるならん新撰萬葉には足千種之祖と打まのせて書れたりたらちねは母の枕なる事をのふへのらねはしのもよみゐして母親の事とせしなるへし子と養ふとたらつと云事は當時の

常語にて疑ひなき事ゐれは也今の俗ゐも嬰兒のけしきとるとたらすといへり其本は子と育つる事とひたそといひ或はひたらすといふたらちねは其ひの言の省のれたる也いちはやふるの伊とすてゝちはやふるとよみなす格にひとしひたらそは命秀の意にてひいてさするといふ今ひとゝなすといはんの如しさるは母のしわさなれはやゐて母の枕詞と調へなしたる也さると古事記萬葉等に日足と書たるに付て日とたらしむる事と思へるは非也何の業のは日と經すして成ゆくへき日とつむと日たすといはんも語の上とゝのはす委くはたらちねの親の守りと云々の歌の所に云へしいにしへ兒とつのさとる事は專ら母親のまゝゐして親といへは大のた母の事にて萬葉なとゐ親はさくれと親にたのひぬゐといふ類ひみな母の事也ろは母の恩遇深き事父の比類ならねはおのつのら然もいひゐれたるものろ其後遍昭の歌ゐたらちねはのゝれとてしも烏玉の我黑髮と撫すや有けんとゐるは母とも親ともいはす垂乳根は母ゐる事しるけれは枕詞とはたらけて母の事としてよまれたる也髮とあつのひものせん事は父のわさにあらぬと思ふへし是と父母の上と見たるよりたらちねは汝親に通して

いふと思ひとれる謬は出來たりやのて紀氏さへ父子の事とたちちねの親子など詠出
られたりこは母の事とはしりつゝ只親といふ枕にのみ用ひられしにや壁東あし其後
父とたちちと母とたちちめなといふ遣意の說さへ起れり今たちちめとあるもろれに
從へる例の古註のひのわさとも見ゆれと難波本には此初句たちちねとあれはしはら
くこれは後人のさのしらとすへし

よつふはたとへうた

わのこひはよむともつきしありそうみの
はまのまさこはよみつくすともといへるなるへし
これはよろつの草木鳥けたものにつけて心とみそるありこのうたはのくれたる所なんあ
きされとはしめのろへうたとおなしやうなれはすこしさまとのへたるなるへしすまのあ
まのしはやくけふり風といたみおもはぬのたにたなひきにけりこのうたなとやのなふへ
のらん

我戀は云々歌の意明らけし餘林に戀の限なきと濱の眞砂ふたとへたるともてたとへ歌

とするのといへりさる事なるへしされと眞砂と引出たるといふまてにて譬へあしたる
ふわらねはもとよりこれも叶へりとはみえすありろは荒磯にて海のありそとはいふへ
くありろ海とはいはれぬ事なのら集中にもありそ海の濱の眞砂とたのめしはともあれ
いはやくより誤れるあるへし越中の名所あといふはもとよりあらぬ事諸註に辨せり

○註に是はよろつの草木云々此意はたとへ歌は外物につきて其意と興せはしはらく
其物さねはのくるへきとわりなるとこは隱れたる所なけれはたとへ歌に叶はそされ
としの隱れては最初のそへ歌と大のた同しふりにみもれはすこしさまとのへたるな
るへしといへりさて引たる須磨のあまの歌はさとにたとへ歌也されとみつのら上に
云る如くのくてはそへ歌と同しものなれは其わいためともいひわくへきとさていは
さるはいはれさるの故也畢竟ろへ歌もあすらへうたもたとへ歌もみな譬喩の名なれ
はいのゝは解わくへき强てのなたの風比興にあてゝ說んとすれとろれ又明のに分つ
へき物ならねはたのひにもとりていよ〳〵何の事ともしられすなれり須磨のあまの
歌は戀部ふいつ

いつゝにはたゝことうた

いつはりのゐき世なりせはいのはのり

人のとのはうれしのらましといへるなるへし

これはとのとゝのはりたゝしきといふなりこのうたの心さらにのゐはすとめうたとやいふへのらん山さくらゐくまていろとみつるのなな花ちるへくも風ふのぬよに

偽のなき世云々これも戀部に出たれはそこゐ解りさてこはものにもよせそ又序も枕も用ひねはよく聞もる方よりたゝこと歌に出せるなるへし土佐日記に行舟の網手の長き春の日とよろのいのまて我はへゐけりきく人思へるやうなるたゝことなる云々とあり

こは船中ゐ四五十日經たるといふ意とやのてよろのいのまてへゐけりといへるといのに不堪なりとて餘り只あり也とわらひそしりたる意也されはたゝ言歌とは其詞といたはらて只平言ときくの如きのえせ歌といふへし其有のまゝゐるかたに雅しき意といさゝのあてたるたはわさ也此歌は調さはやのにたけ有ていつれたゝ言といふへきそのたならんや

○註に是は事のとゝのはり云々とはこなたの名義ゐ抱はらす雅にあてゝいふなれは例の論そへのらす山櫻云々は兼盛の歌にて太平の世にあへると下に樂める意といと長閑にめてたく調へなしたりいのての是とたゝことゝいはん又雅にも當れりとは見えそいつれのなふへのらぬ事也さてとめ歌云々は寫誤の顛倒ゐるへし此歌の末のせふのぬ世にといふと承てこの歌とやいふへのらんとありし一句と前行の此歌の意更ゐのなはすの下にふとあやまちて書入たる本のさて弘まりしものとみゆさては此歌のこゝろさらにのなはそこの歌とやいふへのらんとゐるとしのつゝさては何の事ともきこえねはとめ歌とや云々ゐとつひにあらぬ事にさへうつしたかへ來たれるゐらん今の如く歌とのみ書そてゝは其ことわりもつきす前後の例ゐも違へるもの也されは原本は此歌のこゝろさらゐ叶はす山さくらゐくまて色とみつる哉花ちるへくも風吹ぬ世にこの歌とやいふへのらんとろ有けんさるは事のとゝのはり正しきは此歌とやいふへきと山櫻の歌の雅の意によくのなへると云りこのととめと字形も似たれはきはめてさるあやまりゐるへしもとよりとめ歌といふ事有へくもあらぬ事也

むつにはいはひうた

このとのはむへもとみけりさきくさの

みつはよつはにとのつくりせりといへるなるへし

これは世とほめて神ゐつくるなり此うたいはひうたとは見えそなんある春日野にゐのな

つみつゝよろつ代といはふこゝろは神ろしるらんこれちやすこしのなふへゐらんゐほよ

ろむくさゐゐのれんことは云ゐるましきことになん

此殿は云々催馬樂の呂歌也この殿は閑しゐたのはすけに〳〵富さのえましけりみつは

よつはに殿造りせるはとゝめるしるしと見てほめたゝへたる也榮華は何もあれと先は

家造りのいのめしくきち〳〵しきゐいちしろきものなれはのくいへりさき草は三つと

いん爲の枕なる事諸註ゐ辨せるの如しみつはよつはゝ三端四端にてゐまたの軒端のと

のく打ちのひ或は立のさなれるといふ又軒とつまともいへはみつまよつまの音便にて

も有へし何れにても意はたのはすむへは諾宜の字なとゐあてゝ俗にけゐもといはんの

如し古はうへといへり今も猶うへと唱ふへき事なと秋部ゐ吹のちに云々の歌の所にい

へりさてこゝの文のく註歌とぬきさる時はむつゐはいはひ歌今の世中とつちゐりてつ

ゝきとなさを試ゐいはゝ六つゐはいはひ歌なりと也のとちめなと有つらんとのの歌と

本文とせる時とり捨たるゐるへし古本とえて正すへし（春滿は六つにはいはひ歌のら

る一句と引ゐろしてこゝに入たるは非也さはのり意にまこのせんもゐまりなるに文意さ

へくたくるもの也こゝの意は歌にはのゝる六體の品ゐりしのるに今の世中色ゐつきと

しはらく六義と正しき方ゐゐしていへるなれは六つゐは祝ひ歌也今の世中云々とつゝ

のてはのゐふへのちす此一句ゐひたにはさまりては語意つらぬのさるのみならすはし

めゐなくては詩學にゐたの歌にものくろ有へきと上な

る勢ひとも得さるもの也）

○註に是は世とほめて云々こは更にいはひ歌とは見えすいはひ歌は神につくる意な

くてはのなはしと難したる也例の頌にあてゝしのいへれといのて神ゐつくるともて

いはひ歌と定めん又此歌いのてのいはひ歌にあたらさらん詩序ゐ頌者美盛德之形容

以其成功告神明者也といへるも德功とはめて稱へゐくるころゐちめ神明に告るとい

ふは事の上ゐして其詩にはゐつこのちす其德功とうたふのすなはち神ゐ告る也さると

神に告る意とよむ事と意得て神ろしるらんの歌と引たるはとさなしさてまた神ろし

るらんは神に告るといふにもあらねは猶ゐのぬ方に思へるより少しのなふへのらん

と云る也歌の意は賀部ゐとけり大よろ六くさに云々は大和歌とのなたの六義に配ち
てうまくのなへん事は其本たのひたれは得有ましき事也といへり初めにいへるの如
く此六くさのなたの六義によれりといへとも更にこなたさまの名義と立られたれは
強て風賦等の義に説へきゐあらすさらは前註の意のなへらんやといふゐこれも名義
のたはれなる事としらねは畢竟五十歩の論にていつれとるゐたらす
いまの世中いろゐつき人の心花ゐなりゐけるよりゐたなるうたはのなきとのみいてくれは
色このみのいへにうもれ木の人しれぬことなりてまめなるところには花すゝきはに出す
へきとにもあらぬなりゐたり
今の世と見るに人情やゝあさらに成て色に媚ひ花ゐてらふまに〳〵しとけなき歌とり
へなき詞のみよみ出くれは只色にふけるすき人の家にのみうち〳〵あつのふわさと成
て正しき所ゐてはなか〳〵翫ふへうもあらぬ面ふせなる事ゐ成ぬと也色このみのいへ
にと顯本難波本ともに家にのみとのみの詞ろへりさる方ことわりよろしきゐも似たれ
とさるはひゝきあまりていたく次の句調まてみたるれはやはり普通のまゝになきそ正

しきなくてもさる意の外には聞えさる也又上にはのなき事のみとあるのみゐ打合もこ
ゝろよのうちぬ又此はに出すと云る出すの意と眞字序にあしく意得て難進大夫之前と書
るは例の謬也ゐよろはに出るはあらはるゝ事也されはは出すへきはあらはすへきと
いふにてさるゐはやけならんあたりにてはのけてもとり出ぬ事にてやのて上なる人し
れぬと同意也仲哀紀の幡荻穂出吾也とあるもあらはれし吾也といへる意なるとも證と
すへしさて當世詩のみさのえて歌の廢れたる事は實ゐのゝりとみえて歴史中ゐも詩の
事といへは大小とゐくと〳〵くこれと擧られ歌の上はたえてさたなしたま〳〵當時三
式の撰なと有といへとも唯詩のうへとうらやみたる心より書なして中々歌のおもてふ
せなるもの也此後やうやくに興りて再ひ古ゐのへり來たるは實に此集の力といふへし
さて建久正治の頃よりあまりに取はやされて群德の祖百福の宗と貴み或は理世撫民
の鴻基と建て朝廷さのんに行はれ其實は妖艶浮華ゐ流て餘波今ゐ至れり抑歌は思ひ
とのふる外ゐさの中に男女の情は更に風月の感のおよふへき所ならねはのく歌の廢れ
たらん時はおのつのら好色の家ゐのみ殘るへき理り也されは當時の衰へたるは却て誠

實の失ふへのちさると見るにたれり後世のさのんにみゆるは或は秘授或は法則の事々しきのみ實は只宮殿中の遊ひ草と成て誠實失はれたる也後世のさのんなる歌當時の衰へたるにたえて及はさるはうへおらもや

ろのはしめとれもへはのゝるへくなんあらぬいにしへのよゝのみおとはるのはなのあした

秋の月のよとにさふらふ人々とめしてことにつけつゝうたとたてまつらしめ給ふ

其本とたゝせはのく好色の家にのみあつのふへきやうの物にはあらもを古は世々の帝時々に是と翫ひたまひ侍ふ人々にもの花ふつけ月ふよせて仰事ありしといふ也こゝに花のあしたとあるはいさゝの足はぬこゝちして打まのせたる詞にあらすこは月の夜といふに對へたるあれと月の夜は咎なき也されとこれよりふるく萬葉中にも時雨の秋紅葉の山なとの數多けれは猶さて有なん委くは別に論あり大井行幸の時の序文に旅のの霜のつるなとあるに至りてはたゝ文字の上といはれたるに似て餘りふ詞となさぬこゝちもさて此類の詞此ころ漢文の訓より流れきたる弊にて紀氏も時の勢ひにのゝりてたま〳〵是はのりの事は有ふるへし建久の頃に至りてむけにいはれなき言葉の起りし其もとはこゝに萌せりといふへし

あるは花とそふとてたよりなき所ふまとひあるは月とふもふとてしるへなきやみふたとれる心々と見給ひてさのしおろのなりとしろしめしけん

花とそふは一本花ともてあろふとあるに從ふへしもてあの三字れちたる也紀氏の自筆といふ陽明家の御本もしのるよし柳原亞相公宣へり後拾遺の序にも花ともてあろひ鳥とあはれまそといふ事ふしとありろふとてと有は何の事とも聞えす餘材にこふの寫誤ならんといへれと打まのせて花と戀ふといはんも聞ふれぬ心ちすさて花と翫ふとて便りふき所にまとひとは咲ぬさき散たる跡の野山とたつねあるは雲ふる峯とよちあるは匂ひなき林にまとふといふ月とれもふとてしるへふき闇にたとれるとは出んとまち入しとしたひて宵あのつきとねたみあるは雨夜の空とまもりあるは光うとき水隱れまてたとるといふこは上に花のあした月の夜ととあると承ていへりさる人々の花に月ふのこちよせて奉りけん風雅の情と思ひはのりてあやに書ふしたる也正しく君臣と別れては心の底まてはさすのふ顯れぬくま〳〵も多のると歌の上に至りては情のもくにまの

せてのの便りなきゐまとひ暗にたとれるときのとさなき眞心ともいひ出めりさるたひ〳〵と見そなはしあつめて其賢愚ともわのち知し召たまひけんと也（餘材ゐ花のあるひ月のなき暗に見んとたとるは愚なる人の歌よむとてあらぬ方ゐこゝろとめくらすさまし也花と吉野ゐたつね月と姨すてゐなのむるはのしこき方今は愚ゐるのたとあけてさのしき方とあらはす也といへるは非也こは教長卿注ゐたよりなき所云々とは花歌月歌とわろくよむ心なりとあるゐよれるなるへし顯昭これと破して此義いゐゝ上下の心ゐのなはすや是は花とたつね月ともてあそふこゝろさしのふのき心といへりもとよりしのるへき事也いのに愚かなりとて侍ひてうた奉るはのりの人の花のあるましきの所にのみまとひ月のなき闇に見んとのみ心とめくらさんやさはのり愚昧ならんには誰の人のはみしらさるへき何ろうたによりてあらはるゝ事と待ん又あたへのみと擧て事たるへけんやよしさらはさのしきのたもあはもの遠し又心々と見玉ひてとうけたるはやのて賢愚の心々ゐりさらはこの二句の中ゐ賢愚の心あるへき事論ゐきとやまた打聞に御國の古の朝々に歌ともてひとの賢愚とこゝろみ玉ひ及弟の例國史に見えたる事なしと難したるも非也こは歌によりては人の賢愚ともまさに辨へしれる紀氏の心より古の聖主賢王もとよりさるのたの御心しらひありつらんと推量り奉て云れたる也さる事ありとさし定ていへるゐは非そ國史等に載たる事ならんには知し召けんといのてゐはりはひろのに作者の意と述たるなりよく見わくへしこは眞字序ゐ蓋見二上古歌一多存二古質之語一未レ爲二耳目之翫一徒爲二教誡之端一云々君臣之情由レ斯可レ見賢愚之性於レ是相分所下以隨二民之欲一擇中士之才上也なとあるにのみなつみてこの假字序の意とはよくもものゐり）

しのあるのみゐあらそさゝれ石にたとへつくは山にのけてきみとねのひ

しの大やけの上のみならそ私の思ひと述んゐも此歌こそあれとひろく其用と擧る也さと是よりは多く集中の歌の意詞と取よろひて文と成たること諸抄に引るの如し合せ見るへし

よろこひ身ゐすきたのしみ心ゐあまりふしのけふりゐよろへて人とこひまつむしのねゐ友

としのひ高さこすみのえの松もあひおひのやうゐゐはえ

顯註云あひおひとは小松の生合也昔の友と思ふ心也云々餘材云あひおひは相生也俗にも常ゐいふ言也惠慶歌集に屏風に子日所二葉より相生しても見てしのな今日ちきりける野への小松に新古今に大貳三位相生の小鹽の山の小松原今よりちよの蔭と待なん云々と云り按るにあひおひといふ詞はやくより有つらめと物ゐ見えたるは此序始め也また拾遺集に安法々師天降るあら人神の相生と思へは久し住吉の松なと上に擧たる惠慶三位等の歌あり高砂住吉の松は老たる例によめる古歌につきていへりけゐ今も同し年ころゐ生出たらん人と相生といふも古言の遺れる也舊說にあひおひとは相逐也互に追すのひなるやうゐと也といへると遠鏡に主張していへるは非也相逐の意は齡の上なら

てもいはるゝ方あり又古歌の意にも皆違へり古來の相ふひ理りもたちひてふたやのなるへし春満は是と相老の意として假字とも改めたるも猶非也互ゐ老たるとあひおいとひへる事昔より例もなく又相ふひのやうにふはえとは相ふひにはあらぬ物としのふはもといふ也今は松も我も老たれはまとに相老あるゐやうゐふはえといひて叶ふへけんや思ふへしこは已の老たる心より非情の松の老たるとも昔の友ゐなろへられて同し齢のはとにやとふとは思ひなさるゝわりなき感哀といへり

男山のむのしと思ひいてとみなへしの一時とくねるゐもうたといひてろなくさめける

是は集中に今ころあれ我もむのしは男山榮ゆく時も有こし物とといへる歌の意ととり秋の野になまめき立る女郎花あなのしのまし花も一時とよめる歌の詞によりて男女老ての述懐といへる歌男さのりの昔と思ひ少女とのたの夢の間なると悔るにも歌とよみ出て人しれす思ひとやるのはの更になくさむわざなんなきといへり一本思ひ出でとあるは用ふへからす

又はるのゐしたに花のちるとみ秋のゆふくれに木の葉のゐつるとき〻あるはとしことゐの

〻みのゐけゐみもる雪と波とゐけき草のつも水の洲と見てゐのみとゐとろき

こゝに秋の夕暮とある暮の詞いの〻後ゐふと嘗そへたるにや春の朝ゐむのは〻秋の夕とそ有へきさてろ調も詞もと〻のふへくゐはゆ善本と得て正そへし次にも秋のゆふへ立田川云々春のゐしたによしの山云々とあるとも思ふへし難波本には秋の夜にとあり猶もふへといはんにはゐくる〻心ちそれと一本なれは先從ふへくころ夕暮とあるにはまさりぬへし

あるはきのふはさのえゐこりて時とうしなひ世にわひしたしのりしもうとくなりあるは松山の波とうけ野中の水とくみ

きのふは榮えゐこりての下にけふはの一句脱たり難波本ゐけふは時とうしなひとあるそ正しきのならそゐくては文となさす諸註時と失ひ世にわひとつらねてこ〻ろえたるは謬也こは世ゐ在詫るゐ付て親しのりし中もゐのつのら疎く成行といふ意の一句也されはゐのならす世にわひてとて文字あるへしなくては句のつらと成さる事也この時と失ひて世にわふるの義ゐ思ひとる時はて文字ゐまりて聞えぬ事となれ〻はみたりに取す

てたる成へしさて或は松山の浪とのけて契りあるは野中の水とくみて喩へといふ也
秋はきのしたはとなのめあのつきのしきのはねのきとのろへ
物よりはやく萩の下葉の色つけるは又あくあはれに殊更なる鴫の羽音とねさめてきく
はいのに悲しのらさらん下葉となのめとはつく〳〵と守り入て思ひしむ也羽のきとの
ろへとは心そみていさゝの聞もれとさねといへり大よろのゝるふし〳〵と見すくし聞
すてん人はいのに歌のこゝろとも思ひしるへきたよりなき所にまとひしるへあき聞に
たとるといへるとはしめ又さゝれ石にたとへといふより是まてつき〳〵同しさまなる
はのなき事と打のへしたるは後世ゐ艶と本とし文と飾てつや〳〵のきなす類ひにあら
そ思ひあまりてなの〳〵しくつちねられたるものろ其もゑいのゐとなれはさる物の哀
れとしるらん事は人とあるのきりたのきも賤しきもいにしへゐ今に露たのふましきゐ
さけゐして彼あめつちといたませかにのみとゐのするわさもたゝ此さのひにあれは也
わつのゐ此情とうしなふ時は衆そむき親はなるゝにいたるされは家とゝのふるより
民とをさむるまてこのすちとはなれてなし得たるためしと聞す事の淺きに似たるとも

てゐろろのゐ見る事なかれ句々解たてんもくた〳〵しけれはたゝ兩三句と註しおけり
此意と推てみなのら等閑ならぬゐはれと聞しるへきゐや
あるはくれ竹のうきふしと人にいひよし濃川とひきて世中とうらみきつるに
此きつるにといふはしのうらみ來つるゐ今はうきふしなき世中にあひてといふはのり
の意こもれりさるは上の文のさるへきところ〳〵と此一つにふさね承て結ひたるゐて
のく事にふれ物ゐよりてしの〳〵有來つるにといふ意ゐれは恨みきつるにとはいへれ
と專ら恨の一句ゐとゝまるへのらす譬へはさゝれ石にたとへ來つるゐ今は御世もし
の〳〵あるは松山の波とろのけ來つるに今は其契もしの〳〵とやうゐ物うつり事ふ
りて歎ひ悲ひ行のふさまと此一言ゐて聞する也さりとて上につちねたる句々のきり
と打のへしてといふにはあらそ只終りに其端と開きてさる大のたの意はへと示し富士
の山長柄の橋の二つとあけて其文と承とさめたるのみ恨み來つるに今はふしの山も烟
たゝそなりとさるへきかたに調とゝのへてことわりの打こすとはしはらくのへり見
さるもの也ては上に事の心わきのたのりけらしといひ此歌ものくの如くゐるへしとい

へる前後とのねたる格のたくひに似て彼再ひいふへきとひとへにて聞えしむる一家の文法也理ゐのみくしてしらへゐ疎き人の聞わくさのひにはあらす言と忘て意と得へきもの也

今はふしの山もけふりたゝそなりなのらのはしもつくるゐりときく人はうたにのみそこゝろとなくさめける

さて今はよろへて人とこひし富士の烟もたゝそなりたとへて身となけきし長柄の橋もつくられたると聞ちん後は只ありし其世の歌にのみ心となくさむるの外ゐしと也物のあらたまり行となけくはなへての人情ゐり況や世ゐしるき富士の烟長柄の橋にあらんとや此二つと擧てのゝちん類ひゐ變りゆくすへての上とも聞せたる也源氏の總角にけにふる言を人の心とのふる便也けると思ひ出給ふなとありふしの烟は上に集中の歌の意とえて富士の烟によそへて人とこひとのゝれ長柄の橋は雜部ゐ世中にふりぬるものは津國のなのらの橋とゐれとなりけりゐとあると承たりさて其はしめと思へはのゝるへくなんあらぬといふより何々つらぬきて此所まて大意一すちにて近世の如くすき人

の翫ひとのみなるへき物にはあらすと云事としめしたる也中間ゐ歌といひてそなくさめけるといへるはたのれ歌とよむ事也こゝゐ歌にのみろ云々とゐるは古歌と誦するといふ也のくやまと歌の情とつくせる中にのら歌のこゝにうとくしてのはりの妙用ある事なきとのたはらかとしめたる意あるに心とつくへしさて當時富士の山は淺間阿蘇なとのとくたけく燃上りて炎なとゐらはにみゆる事なけれはにや都良香の富士の記に其甑中常有氣蒸出とのゝれ集中にならぬ思ひむゐし烟とよみ後撰にもしるしなき思ひとそきくふしのねものとはのりの烟なるらん信濃ゐる淺間の山もゝもゐれは富士の烟ののひやゐのらんとありそなはち紀氏もゝゆれともしるしたにゐきふしのねにとよみ給ひ忠岑もふしの山とや下このれけるなとよまれたるにてたゝ烟のみ絶々なるさまし られたり（其後更科の日記ゐはやまのいたゝきのそこしたひらきたるより烟はたちのはるもふくれはひのもえたつもみもと云又十六夜の日記ゐは富士の山とみれは烟もたゝす昔父のあろんにさろはれていのにゐるみの浦ゐれはなと詠し頃遠つあふみの國までは見しのはふしの烟の末も朝夕たしのにみえしものといつの年よりの絶しとゝへはさたのに答ふる人たになしなとのけり）

さるは時ありてみえみ見えすみ常に定めなのらんゐはしひて斷續の時代と論そへきゐあらそ此撰の頃はたま〳〵ほとへてたゝさりしなるへし遠

くは延暦近くは寶永のころ大ゐ燒出し事は尤希變にして常とのたるの例には引のたし又長柄の橋と造られたる事國史にみえそといへとも史の脫文なるへしやうて集中に伊勢の歌難波なる長柄の橋も造るなり今は吾身と何にたとへん新後拾遺集亭子院の御歌つくるなるはしとしる〳〵恨れは思ひるのらといふゐそ有けるゐと同時のうたにてだしのなる證也餘材に云文德實錄第五日仁壽三年九月 戊子朔戊辰 攝津國奏言長柄三國兩河頃年橋梁斷人馬不通請準堀江河置二隻船以通濟渡許之是より後久しく絶て渡されさりける歟與風集にもこほれてもあれはたとへてなくさめし長柄の橋も今は聞えすとよめると後ゐ又改めて渡されけるにやといへり按そるに仁壽三年の奏ゐよりて船渡しとなり人わたらそゐりたる後もなほ其橋はそれなのらにさてありし也さて四五十年と經て寛平の末なと再ひ改め造られたりとみゆそは亭子院の御製伊勢の歌なとにていちしるし敎長卿もなのらの橋はふりて久しく弄たると新らしく造らんやうの心也といはれたりさはのりなる橋の年へていたつらにのゝれると舟渡りの往のひゐ誰々もみあれたるのやう〳〵ゐ朽こほれてわつのに柱はのりたちのこるまてゐも成行しゐりさ

れは上の與風の歌また世中ゐふりぬる物は云々の歌ゐと其外も此年ころ舊きためしゐは先此橋と引出たる也藤原のころ布留の舊都の瑞籬と久しき物によみゐれたると同例也榮花物語に御舟止めて御らんすれはふるき橋の柱たゝ一つ殘れり今は我身とといひたるは昔ものくふりて有けるとゐもふも衰也とゐるは又此後いつの造られたる橋のふりたる也（又此つくるといへると盡とみたる舊說あり打聞にこれと扶て云此集よりのちち天暦の御屏風に長柄の橋柱わつのゐ殘れるのたに藤原清忠蘆間よりみもるゐのらのはし柱むのしのあとのしるへ也けり是も延喜の頃は朽盡たる證なりといへり按するに盡るといふもゐ物ゐころよれ橋ならはくちぬとのたえぬとの有へきなり橋と盡るといふへけんや遠鏡に云盡なれはつきぬ也とこそいへつくるなりとはいはそこれ雅言ののならす定れる格也といへり又天暦の御屏風の歌と引たるは猶當らそさはのりせゐいひはやしうたにとみてふりたる名の高けれはわともなく新たにさへつくられたらん後はとさらゐ昔なつのしみて其朽たりしおも影と畫にも寫してもてはやさるへき事なり是と當時延喜のころくち盡たる證なりとはいのていふへきまた伊勢集に長柄の橋つくると聞てと端書ゐり是今新たゐ造ると聞てといへる也朽盡たるならんには俄ゐ盡ると聞てといふへけんや彼家集の詞は皆後人の僞作なれは取擧へきにあらねと其後人も七百年前の古人にて此歌と造る意とみて書くはへたる端書なれは今此證とするにはたれるもの也のつ此歌朽盡る心なならは俳諧ゐは入さる事ろさるもゐはうたの所ゐいへり其後能因法師長柄の橋造れるとの說にて別に論ゐりさてこはまのふへのらぬ事なれと猶近く盡るの說と執そる人もそのみ造るの外なのりし證なり顯注にも異論ゐし此盡るといふは鎌倉の頃に出こしなのらねは煩はしきとのくなのらねはしきとのふへりみそさたしゐき侍る也）

いゐしへよりのくつたはる中ゐもゐらの御時よりそひろまりにけるののおほん世や歌の心としろしめしたりけん

ならの御時とは平城天皇の御代とさし申せり此天皇ゐりゐの後奈良にましませしによりて平城天皇或はならの帝と稱し奉る也古より歌の傳はりこし間にも殊に此帝の御時より盛に弘まりしと也此帝の大御歌世々にもくれさせ給ひていとゝもめてたきに人丸赤人さへ御世にあひ奉て萬葉集と撰みたりと思ひなしてのくいへり彼おほん世とは天子の御事と憚りて大らのにいへるにて彼帝や歌の歌たる深き心とは知し召たりけんといへる也

ののおほん時におほきみつのくらゐのきのもとの人まろなんうたのひしりなりける

人麻呂は飛鳥の朝より藤原の宮の限りゐ仕へし人ゐて平城天皇の御時の人にあらそまた正三位ゐるへき由もなしのゝるたのひは萬葉によりてしるへし然るに此序にのく有はいのにといふに大凡古人の詠歌ゐたつさふは後世專門の業として奥と探り精と究むる如きの類ひにはあらすやのて此集ゐとおの〳〵奉職のいろしき中にして期年の間に

撰みて奉りたるも今ゐてゐもへは捷速ならすや況や萬葉集は此後に梨壺の五臣のつ〳〵訓ともつけられたるとゐもふにも當時ゐは讀事たに難のりけん事しらるされは今の撰者たちも萬葉は只一わたりの事にて意と用ひてゐきらめたる物ゐあらすさるの上に平城帝の御時人麻呂赤人なと勅と承て撰みし物といふ浮説の世に有にもたれて誤られしならんまた貞觀の御時文室有季に萬葉集撰のころと尋給ひしゐ答へ申せし歌神無月時雨ふりゐけるならの葉の名ゐゐふ宮の古とそこれと集中雜部にあり是ならの葉の名ゐゐふ宮とあれは平城宮と指たるゐて平城帝と申奉りしに非る事いちしるく又清輔卿の袋草子ゐ此歌と二所まて引れたるに末句ならの都のふるとそこれと有顯昭の古今にもしのありて其意ゐ解れたると定家卿も異義と申玉はねは當時しのもとゐへて同意ゐれは平城宮なる事論なき也又時雨ふりゐけるといひ古言そ是といへるなと平城帝の御代の末より貞觀の始めまてわつの四十年はのりの近き昔と指たる語調ならんや又さはのりのほとに世ゐ人しれすなりていつはのりゐと尋ね給ふまてにいたるへき物ならんや思ふへしゝのるに此有季の歌とも平城帝の御時と指たるものとゐもひ取て此集ゐ

いれ萬葉の時代の證とせられたるは恐らくは先入をまとひたる中々なるあやまちをや侍らん委くは歌の所にいへり新撰の序に大同とおきて弘仁已來延長までの歌を抽よしにいはれたるにも大同は人麻呂萬葉撰の代として其後よりと集られたる意なると知へし此事顯注にいはれたりいうれ平城宮と平城帝とを同し事におもはれけるよりの邊ひある事はまぬかれす是と餘材を辯して云此ならの御時よりといふをつきて古來異義まち〳〵なり互に是非すといへともいつれも正義にあたらす其集の撰者萬葉集といのにみられけるにの覺束なき事おはき故なり是私にいふにあらそ京極黄門も大きに不審のよし宣べり延喜の聖代に四天王ともいふへき人々勅を承て撰ひ世に人おはき頃あれはうきたる事は有へからそと深く信するより後の先達ひたすら此序を證として奈良の帝萬葉出來の時代人麻呂赤人等の事とさたせらるゝ故に首尾相叶はぬ事そくなからそ撰者のこゝろならの帝とは大同天子と指て申奉れり顯昭此義を用ひられたり但人麻呂赤人の時代等に至りては疑ひを殘されさるをあらす云々ならのみかとは平城天皇と申奉りてかたく其他にわたらぬ御名也仙覺等寧樂宮御宇といひ聖武の御世と平城朝廷と

いへる同し事と存せられたる大きをしからす平城朝廷とも寧樂宮御宇ともいふは廣く元明天皇より皇仁天皇までにわたりてかたく平城天皇にはわたらそ朝廷御宇は世としろしめすにつきて申せは也平城天皇平城天子は玉体をつきて申せは又他にわたる事なしとおは其證と引て委くいへり按そるに此後天暦の頃にいたりて梨壺の五人勅をうけて此集とよみ解れしよりさるかたの惑ひ世を明らかにはなり侍りけらし野宮の歌合の末なる爲憲の詞に抑順梨壺おは奈良の都のふる歌よみときえちひ奉し云々とあるにてみれは平城宮なる事此時誰もしれる事しられたるまた正三位とあるのみは撰者の誤ならす決めて後人の書加へたる也餘材に云忠岑の長歌にあはれいにしへありきてふ人九ところはうれしけれ身はしもあのら言の葉と天つ空まて聞えあけ云々正三位ならは身は下なのらとは云へのらす顯昭抄に或人是とたすけてむとみと通すれはふはきむつのくちゐなりといへると破られたりまたにいふをたちさる事也といへり按するを眞字序おは柿本大夫とあれは後人眞字序とのきしよりも猶後のしわさとみゆさて大き三つのくらゐの一句とそれはこの御時に柿本の人麻呂なん歌のひしりなりけるとつゝく也のく

てはいさゝこの文のたらはぬ心ちす彼御時ふゐひてとか何とこのゐるへき所也古本と得て
たゝすへしもとより今のとくかほき三つのくちゐの一句ありてもとゐり讃さるは同し
事なれとしこの調のもるふ時は其とゐりかのつのらはらまりひゝくゝの也又撰者萬葉と
人丸の撰とおもはれたる事は既に上に引たる長歌に人丸こゝはうれしけれ身は下なの
らとの葉と天つ空まて聞えあけ末の世までのおとゝなし今も仰の下れるはちりにつけ
とや蘆の身に云々とよめるにてもしられたりこはさきゐ人丸萬葉とえらひて今の古今
の芳躅となせるとよろこへる意なれは也當時殊に人傑おほしといへとも時代の遠近と
取たかへられたるものこの眞據ともしれる人ゐらんにはいこで誹議ともいれさらん然る
ゐ近世文明の運にのり遠く舊記と校へ古言と解ともて終身の業とし是と古學とをなへ
てろの才辨にはこれる輩たま〳〵此等の事と見出て此書と見ゐとし撰者とゐあつるは
いとこのしこし紀氏の心ともちひ給へる此のきりならんや是等の誤いくはく有とも何そ
其功と損するにたらん況や是は概世のあやまりにて一己の臆說ならさるとや
これは君も人も身とゐはせたりといふなるへし秋のゆふへたつた川になかるゝもみちとは

みこのとのゐはんめにゐしきとみたまひ春のゐしたよしの山のさくらは人まろのこゝろには
雲このとのみなんゐはえける
この御時にこの人ゐるは實ゐ君臣合体といふものゐるへしとなり臣と入といへる事は
天皇とは現つ神遠つ神ゐと申奉りてやこて神ゐしませはその天子にむこのへては臣はみ
ゐ人なれは也後世たゝ主從と云はこりの上ゐ用ひならせる君臣の臣とも漫りに人と稱
ふるはひこの事也龍田川にゐかるゝ云々は集中の御製のこゝろといふすなはち次の古注
に出せり餘材云人丸の歌ゐ吉野山のさくらと雲ゐまこのへたるはなけれと上に對してい
はんとてゐるましき事ならねはこのくはこのける也身とゐはせたりといふとうけて心のこ
なへるよしに云りといへり
また山のへのゐこの人といふ人ありけりうたにゐやしくたへなりけりひとまろはゐこの人こゝ
みにたゝひとこのたくゐこの人はひとまろこのしもふたゝんことこのたくゐんありける
ならのみこのとの御うた龍田川もみちみたれてゐこるめりわたらはにしき中やたえゐん人
丸うめの花それとも見えす久このたのゐまさる雪のなへてふれゝはは〳〵とゐこのしのう

らのわさきりゐしまのくれもくふねとしろおもふ赤人はるの野ゐすみれつみにとてしわれろ野となつのしみ一夜ねゐけるわのうちにしほみちくれはのたとなみあしべとさしてたつなきわたる

山部はやまべなれはもとよりやまへのわの人と有けんと眞字序に例の意もゐく山邊と書しと後に證として假字序ともやまのへとなはしたるゐるへし眞字序によりて違ひ來れる事少のらも歌にあやしきはのりのたきこゝろゐて奇妙ゐりといはむのとしさて人丸赤人ともにならのみのとのおほん時ゐまさりゐとらぬ歌仙なりといひてその中に上にといひ下にといへるしらへゐいさゝの赤人のおくれたるけちめと見せたる也こゝの文と餘材に世說曰元方難爲兄季方難爲弟これに似たりといへり萬葉第十七に大伴家持の同池主ゐおくれる書ゐ幼年未遨山梯之門云々池主の答書に山柿歌泉比此加蕊云々なとあれは既に奈良のころより歌仙のはまれありて當時もゝはら人口に膾炙せしなるへしされはいま紀氏のはしめてぬき出給へるにはあらすといへとも千載の後まて聲名雷のとくにひゝきつひにはのけまくものしてきおはみ神とまてたふとまれたまふ事

はまたく此序の一舉によりてゐりけり共にあふのさるへけんや

○赤人の春の野に云々の歌は萬葉第八にあり歌の心只のりそめに堇つみにと來し我なるに其あらましはものならてなへていひしらぬ野へのけしきのゐつのしさに思はえそ一夜とさへねにけるといへり今にていへは嵐山のさくら嵯峨野のそみれに日とくらして大炊の茶店にやとりとるたくひ也野遊の情思ふへしさると打つけに野にふし草枕せんはいにしへならんのらになはいのゝ也と思ふより諸說只かへりのねたるこゝろと一夜ねにけりといひなしたるもの也といへるはいふゐたらそ罪にけるは既に宿りたる上の語にてまのはぬ事なるとやそみれは俗ゐいふけんけ花也今そまひ草とそみれといふはたのへりさては歌のけしきにものなはさるもの也若のうらゐ云々是も萬葉第六ゐいつ若の浦ゐ汐のみちくるまに〳〵ありつる干潟なくゐり行にわさりしたつもとりのねて汀の蘆へとさして鳴わたるといふ也蘆へのへの言はもと方の字なとゐあたりて俗にいふ方角とさすにてろれより遊の字なとの意にもうつりてひろく山へ川へゐといふはつねなれと草木の上ゐとゐは大のたいふへきにあらそされ

と葦はのならす洲崎磯邊などに限りなく茂りつらなるものなれは其わたりと大やうさして蘆へといふ古歌に野之上山上などあるによりて此蘆へなどとも上の略語也と思へるはたのへりさてたま〳〵萬葉卷十に旦霧八重山越而霍公鳥宇能花邊拇鳴越來とよめるうの花へも卯花は山もせに咲みてるものゐれは也同卷に五月山宇能花月夜といひまた宇能花山などあるにもいとひろく咲わたれるけしきとしるへし今もうつ木山はさるものにていと木高く郭公などやとりして鳴也里中なる垣ねわたりの類ひにはあらすさて集中にも難波の蘆のめもはるにしけき我戀などよめり鶴のさして鳴わたらん蘆原のはる〳〵なる景色思ふへしさいへうつしてはいのゐいひなすも常なれとさりとて打つけにわつの二もと三もとあらんゐも後世ひたもら蘆へとのみいへるはしらへふのつのらうちあはぬものの只一むらの卯花とうの花山などいへる同しあやまち也

この人々とおきてまたそくれたる人もくれ竹のよゝにきこえゐたいとのより〳〵ゐたえすそありける

この兩歌仙の外にも世々時々にゐほたえすきこゆる人もすくなのらそといへり

これよりさきのうたとあつめてなん萬葉集となつけられたりける

これよりさきは奈良のみかとの御時より以前といふ此御宇のの兩人におふせて萬葉とえらましめ給ひしといふ也こゝにこの集撰の事といへるは下に至りて萬葉集にいらぬふるき歌云々といふへきはしと開き又ひとまろゐくゐりゐたれと云々ゐといふへきも也さて次なる彼御時より此のた年は百歳あまり世は十つきになんなりにけるといふ一節とぬきあけてこゝゐ屬して名つけられたりけるのの御時云々とつゝけゐしまた十つきになんなりにけるこゝゐいゐしへの事とも云々とつらぬへしさゐくては前後とゝのはさる也正文と見合すへし餘材ゐ奈良の御時歌のさのりゐて萬葉撰まれたるよしひてれとろへたるもゐともいはすにはのゐふこゝゐ古の事ともうたのこゝろとも云々といへるゐほつのゐしといへり實ゐさる事也正文はこの所に年はもゝとせあまり云々の句入れゝは其間に歌のゐとろへ衰たると聞せたるもの也しのして文勢とのへりみるにことわりはさるものゐらなほしらへとなさゝる所ありこの名つけられたりけるはたゝ

名つけられたるとのみありつらん正文のとく引なほすときは此句の末はとつきになんなりにけるといふのとちめゐれはまつこゝに名つけられたりけるとゝさめむすふへきにあらすさては一段のうちにとさまる手にとは間ちのくにらみて別意ののたちとなそもの也こは按するゐ今本のとくみたれては此句にて段落となれゝはたゝ名つけられたるとあらんはろの結句うきてとさまらさるよりけるの二字とくはへてたりけるとなほしたるものなるへくゐはも後に顯本とみれは名つけられけるとありなほたるといはてはけるの詞前後重なり侍れとのくても句調のみはとゝのへり

こゝにいにしへの事ともうたのこゝろともしれる人わつのにひとりふたりなりきしのわれとこれのれえたるところえぬところたのひふなんある

古の事といへるいゐしへは上ゐいにしへの世々のみのとゝひへるいにしへ也事とはろの御世々々の事實とさす歌のこゝろともしれるとは當世のあたゐる歌はのなき言のみいひ出る中にありてもなほ然らさるといふ次に歌とのみゐもひてろのさましらぬといへる反也また六人とゐけなのらひとりふたりとのけるは大やうにいへるものゝせめて世にまれなるときのする文勢ゐて其數に拘はらす決めてもくなきといふ常語也ふたりみたり或はみたりよたりといはんはやゝろの數ゐてゝろ有事とまぬのれそされは世なれたる常語にまのせてのく大よろにいへるろおたやのゐるこれのれえたるところえぬところはろのよめる歌ののたみに得失ゐるといふやのて次に論せるの如し

このゐはんときよりこののたとしはもゝとせゐまり世はとつきになんゐりにける

大同元年より延喜六年まて百有一年なれはもゝとせゐまりといひ平城天皇より醍醐天皇まて十代なれは十つきといふ也むのしより此集の奏覽と延喜五年とかもへるはゐやまりゐて實は延喜六年なり五年まては百年なれは今百とせゐまりとゐるにものなはさるのみならす六年と見さる時は事の上みなたのへる事くはしく末にいへり（舊說に百せゐまりと云るはこの集の歌數千首餘けに歌の千首餘ゐらんとは其ゐまりと百年なると引のへて百年ゐまりとは曾せ世は十つきになんなりにけるとゐらきて何ろゐつらはしく餘りとはのくへけりは曾へきゐゐらすまた實に百年ならんには年は百とゐらんろ却て文のかもてもたやそのるへき實にろむ非也さるは物ゐころよるへけれいのゐ文勢ならんのらゐ大御世の年歴としるさんゐ餘りゐきとゐまりとのくへきものならんや）難波本には百年ゐ餘りとに文字ありさるはなはたしのなりこは

調も理も相のなへは尤從ふへし後人實はあまりゐしと思へるより其意を輕くせんとて
にと省きたるなるへし眞字序にも時歴十代數過百年と書たると見るへし或本にこの過
といふ字のなきは五年とあるにのなへんとてのさのしら也（餘材云集中と見るに延喜十四年までの歌見えたり
五年にえらみとはるといはゝ其のちのうたはかしていれらるゝのたしのならそといへ
る也こは集中に數首入たる右大將定國卿の四十の賀の歌と專らいへり此賀は延喜
六年二月あると十四年なりとかもへるよりのくはいへるもの也其謬なる事はうたの所
に辨せり六年二月は奏進前なれは入へき事論なし奏上已後のうたの入たるのたしのわ
しられたるは延喜七年の大井川行幸の時のうた二首同年七條の后と悼奉る伊勢の長歌
一首同十二年亭子院歌合の歌二首友則逝悼の歌二首そへて七首也此外ありやなしや今
しるによしあし此亭子院歌合も十三年也と昔より
思ひとれるは謬也十二年なる事其所に辨しおけり）

いにしへのことともうたともしれる人よむ人ふはのらす

此一句難波本ゐなさろ正しきのくふなし事といたつらに打のさねていふへきならねは
衍文なる事うたのひなし互になんある今この事といふ云々と引つゝけてよむへし既
に春滿はのくのとくつらねたりされとも是よりさきの歌とあつめて萬葉集と名つけら
れたりける又のの御時よりこのの た年はもゝとせあまり世はとつきゐなんゐりにける
これらの語とも衍文なりとして共にはふきたるはあたらそこは萬葉の時代のたのひた

るを紀氏によもさる事はあらしとかもひそくしたるのあやまり也（餘材遠鏡等にもれ
なはし試みたれともなは衍文ののたにつきてよむ人ふはのらすといふ結句を用ひたる
はのなはすのくては上にこゝにいにしへの事ともと打いてたるこゝにの詞すわらすこ
ゝにといふはその物をさしゝめす詞也こゝおよむ人ふはのらすとうけと
ひる拙き文あらんやこゝにひとりふたりなりきと収るへきこと論なし）さて此衍文
と按そるに今のとくこのの御時云々の句こゝに有時は世は十つきゐなんなりにける今こ
のとといふゐ云々とつちゐりてことわりゐく竹に木とつきたちんやうなれは下文とか
こさん料にまたいふしへの事とも云々と同し事とはいへるなるへし猶正文につきて見
るへし上にすさのとの尊と再ひいへるとかなしこゝろのさのしら也

今このとといふふつのさくちゐたのき人とはたやすきやうなれはいれそ

上文のたのひになんあるといふよりこゝへつゝくへき事既に辨せるの如しさて官位た
のき人とはれしゐへにその得失といはんはなめしくやそけに聞ゆれは憚りていれそと
也

そのはのにちのき世にその名きこえたるひとはそなはち

此ちのき世にの一句きはめて衍文なり眞字序に近代存古風者纔二三人とある近代の

語ゐつきたる後人のさのしらなるへしこの眞字序の近代云々のこゝろは上にこゝにいゐしへの事とゝ歌のこゝろともしれる人わつのにひとりふたりゐりきとある所ゐてこゝにといふ詞すなはち近代といへるにあたれる也さるに再ひゐなし意といふへきにあらす又上ゐつのさくらゐたのき人とはいれそといへるも近代の人也それとうけて其外にといふなるに又のさねてさらに近き世にとことわるへきものならんや更ゐことわりなき事也こは其外ゐろの名きこえたる人はそなはちといふ一句なれは近き世にの語中間に入てはろの外にその名とたゝみたるしらへもみたるゝ也又すなはちはいゐしへ大のたは句尾にゐきて次とゐこす詞也今もそなはちといひとめてさてはしとあらためて僧正遍昭はといふ也今すなはちと次の句頭にゐくりちのき世にの言とくはへてそのはのにちのき世ゐその名きこえたる人はといふと句となせるは古にくらく闕ふうときのあやまち也また此そなはちは下の六人とそへたる語脉句頭にありては遍昭一人にとゝまるのみならそ前後の語脉とうしなへる事となへてしるへし此集羇旅の部に男まのりいたりてすなはち身まのりゐけれはといへるもすなはちは上のいたりてにつく也家集

にも春たゝんそなはちとに君のためちとせつむへきわのなりけり是もたゝんすなはちとつゝけていへる也春のたつすなはちとゐといひきるこゝろにはあらそこはみゐ紀氏のつのひ給へるそなはちにてたしのなる證ゐれはまつ是とわくふるくは書紀に蒼海而引舉之卽戈鋒垂落之潮結而爲島云々云爾卽將巡天柱約束曰云々思則潮滋之瓊思則潮涸之瓊云々古事記ゐ如此云期乃詔汝者自右廻逢我者自左廻逢云々信如言來乃每船垂入巳頭飲其酒云々堀其歷木卽咋食其香坂王云々などみるへしろのこのみ則卽乃なとの字とすなはちとよみなす時は大のたこゝろはへ也句尾にゐのそしてはたちまち語勢と失ふのみならすそなはち汝は右よりめくりゐへなといふ至りては記者の語と御神の詔と混つになりて文意さへわのれぬとや此のち拾遺集の詞書にも春日のつのひにまのりてのへりてそなはち女のもとにつのはしけるうつほの俊蔭にうまれ落るすなはち女ゐのの布ふところに抱きて云々源氏若紫に今そなたにもとのたまへるすなはち僧都まゐり給へり枕草子に此ころものゝけにこうしにけるにやゐるまゝにすなはちねふり聲に成たるいとゐくし又しの〳〵の

人こもちせ給へりゐといひきのせていぬるそゐはち火桶くた物なともてきつゝのす又明ぬれはゐりたるそなはち淺みとりなる薄やうゐ云々また竹取物語ゐは綱たもるそなはちにやしまのなへの上ゐ落たまへりとゐ文字とさへくはへたれはいよ〳〵句尾につくへき事まのふへのらす今は其聞とりやそき一二とあけたりゐして知へしたま〳〵は句頭にれくもあるに泥みて上に引たる源氏のすなはちなともしひて句頭ゐれのんと

て今本にはのたまへるのるとりにさへ改めたり（其後鬻師の和讃にも凡夫善惡の心水も飯入しぬれはすなはちに大悲心とろ轉そなるとあり此ころゐは多分句頭にゐくとゝなりゐたれと猶又のくもいへり今世といへとそひたすち句頭にのみゐくにもゐらすたとへは何はそなはち何とことゐり是はすなはち是也とさししめす語なとはやはり句尾につきて古の格也）さてもはち句頭にゐく事とゐりしは即乃なとの字と此語にのみゐて丶つのひなれたる中頃より遂にのく漢文の方につきたる也さてすなはちの意は爲之（スノ、チ）後にて是となそやゐてといふ也すの丶ちとは唱へのたきよりそのとそなといふより下の丶もはといはる丶は調の自然也是も猶古はするの丶ちゐせるの丶ちなといひて定れる言ゐてはなのりけんいひならすまに〳〵遂にのくひとつの語となれるは後世に者の字とてへりといへるゐゐて丶然よむ事とゐれる類也往古は即則便廼な

とのの字とはのれともしのともされはともやのてともときはともそなはちとも其いふへきの宜しき處にゐて丶猶いのにもよみなせし也中ゐ就てすなはちは勢ひ强き語なれはおのつのち句尾につくへき理り也今俗にそるや否やなといふに似ていひきるへきゆとりゐきはのり速のゐる調としるへし則と句尾につけてときはとよみなれたるとおなし格也

僧正遍昭はうたのさまはえたれともまとそくゐしたとへは繪ゐのける女と見ていたつらに心とうこのすのことし

あさみとりいとよりのけて白露と玉ゐもぬける春の柳のはちす葉のにこりにしまぬ心もて何のは露と玉とゐさむくさのゐて馬よりゐちてよめる名にめて丶とれるはのりろとみなへしわれゐちにきと人にのたるゐ

遍昭の歌は打ゐくるよりさはやきてそのたれのしといへともろの口のろくゐされたるに思ひしめたるまとの心はへすくなしと也たとへのこ丶ろは其さまはえたりといふに畫かける女のうるはしく花やきたるとよろへまとすくなしといふに心とうこのすもい

たつちなる所とあてたるのみのく引はなれてのすのゐる譬へさまのおもしろき也後世よき物にはよき物とくらへあしきものゐはあしき物とくらへてうまくのなへりとする類ひにはあらすそは玉に金とあて塵に芥とあてたるに似て中々れそきわさ也さる心より此序の譬喩の打つけゐらぬとあのぬ物にゐもへるはいふにたらを古注の歌の意は本文の歌につきていへれはこゝにとのす次々みなしのり

ありはらのゐりひらはろの心あまりてことはたらすしほめるはあのいろなくて匂ひのこれるのことし

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわの身ひとつはもとの身ゐして大のたは月ともめてしこれろ此つもれは人の老となるもの霖ぬるよの夢とはゐなみまとろめはいやはのなゐもなりまさるのな

業平の歌はあまりおろのこゝろふのくしてれのつのらことはのたらさるにいたる也さて其詞のたらぬと花のしはみて色なきにたとへこゝろあまりたると匂ひの殘れるゐあてたる也遍昭の所ゐはたとへは云々と有てろの外はいはゝ云々とのみいへり是はたと

へていはゝといふへきと互にしてはふく文にて其ふもき方と最初にかける也然るゐ此朝臣のはのりたとへはともいはゝともなきは調の上にまのせたるものにて脫文ゐはあらすのゝはりていふのる事なのれ試にのの語とくはへてしるへし忽しらへみたるゝ也また遍昭には歌のさまといひて其外はその心ろのさまなといへるも初めゐゆつれるゐてゐなしれもむき也

ふんやのやそひてはとはゝたくみにてそのさま身にゐはそいはゝあき人のよききぬきたらんのことし

ふくのちにのへの草木のしとるれはむへ山のせとあらしといふらん深草のみのとの御國忌に草ふのきのすみのたゐゝのけのくしてる日のくれしけふにやはあらぬ

康秀は詞ののさりそくる方より其事實ゐあはぬ所ありと也ろの詞の巧みゐるとよき衣にたとへ其巧みの心に應せぬとあき人のその衣きたるによろへたり是と眞字序に其体近俗とのけるはあき人といふになつみたる例のひの事也さらに卑俗なる方ゐ取ていへるにはあらすたゝ身にゐはぬにたとへたるのみ先哲例の眞字序によりて卑しきたとへ

と思へるはいみしき誤也却ておこれる姿とはいふへしとへて此六人のたとへさまいと
せまちすして心のすのゐるあまりに其とゝまるさのひとうしなひてのくまとへる説も
出來る也物のたとへはたゝひとへの打きゝに匂ひくるのきりとおもひ取へきものそ
○宇治山の僧させんはとはのそのゐしてはしめとはりたしのならすいはゝ秋の月とみるにあ
のつきの雲ゐあへるのことし
わの庵はみやこのたつみしのそそむ世とうち山と人はいふなり
よめる歌おほくきこえねはのれこれとのよはしてよくしらと
喜撰の歌はたけ高くのそのなれとも一首の上しとけなき心ちしてたしのならすといへ
り其たけ高くのすのなると秋の月とのろひに譬へはしめおはりさたまらぬと其月の雲
ゐあへるゐよそへたり雲は曉ゐたなひく大のたのけしきによりていへるのみ歌のその
たにつきて曉ゐこゝろはなき也曉とうたの結句ゐあてゝとけるゐとはいふにたちそ秋
の月としもいへるはいたくすみきりて中天にのゝれる影の深遠なるといふ也集中にさ
よ中と夜はふけぬらし雁のねの聞もる空に月わたる見も又は古文に山高月小なといへ

るそ此たとへのけしきにのなふへきわさと秋としもいへるは高くそめるといはんため
也やのて曉の雲にあへるといへるゐふけしづまりたるけしきとおもふへし是と異字序
に詞花麗といへるは例の意とえさるひの事也花麗といひてのすのなるにのなはんやこ
は秋の月のたとへになつみて光と花とちらすはのりとなといへるさはやきたる月のけ
しきにおもひとれるもの也始め終りは只一首といふにおなしく歌の全体とさせる也是
とも彼序ゐ首尾停滯とのけり停滯とはとゝこほる也たしのならすは手ゐとられぬ事也
混そへきにあらそ此首尾停滯といふにつきて吾庵の歌とも世ゐ思ひたのへるより後に
は譬と歌と相たすけて誤ちと遂し也委くは歌の所に辨せり又宇治山の僧とある僧の字
も眞字序より入たる也難波本になきとよしとそよめる歌云々は此僧の歌はさしも世ゐ
そくなのりしとなは六人の數にいれて同しつらゐ論せるとことわれる也按るに此序の
評は吾庵の一首のみゐつきていへるにはあらそ喜撰は隱遁の人なれはよめる歌も世に
おほくあらはれすたま〳〵きく所の三五首の上ゐて其体とさためんはいのゝゐれとし
はらくさる方につきていひこゝろむる也餘の五人のとく前後あまたとのよはしてよく

した丶めしる事あたはそといふ意あるへしさると此集ゐ入たるの一首也とて喜撰の歌生涯一首のみ也なといへるはいふにたらそ勅と奉して道の式とも作りたる人の只一首のみよみ出てやまんものは又あまたよみたるも此一首の外世にきこえそといふもかしあて也いつれ不通の説といふへしされはおほくきこえそところあれこれのみ也とはいはさるとや孫姫式に基泉の歌木間よりみもるは谷の螢のもいさりゐ海人のうみへ行のもこの基泉同人ゐるへしといへり文字とのへてこく事古來たはし既に此歌玉葉集ゐは喜撰としていれられたり宇治山記には窺詮仙人と書りといへりこれゐよりて釋書には窺仙ともこのきつ又難波本には宇治山の基撰とありて其文字一定しのたしさて樹下集に喜撰けのれたるたふさはふれし極樂の西ののせふけ秋の初花といふ歌有これもさきの螢の歌もたしのならぬ所ありてまた凡調ならすよく此序の評ゐのなへり

とのゝこまちはいにしへのろとほりひめの流なりあはれゐるやうにてつよのらすいはゝよき女のゐやめるところあるに似たりつよのらぬは女の歌なれはなるへし

かもひつゝぬれはや人の見えつらん夢としりせはさめさらましといろみえてうつろふものは世中の人のこゝろのはなにろ有けるわひぬれは身そうき草のねとたえてさそうふ水ゐらはいなんとろ思ふそとほりひめのうたわのせこのくへきよひなりさゝのにのくものふるまひのねてしるしも

こゝに衣通姫の流なりとゐるはことわりもゐき事にて疑ひなき誤入なれは取すつへし眞字序もこれによりて小野小町之歌古衣通姫之流也と書りさて此一句とはふく時は小野の小町はゐはれなるやうゐてとつゝく也さるは詞たらはすのつは餘の例にもたのへり又ゐはれなるやうにてのやうの語こゝにのなはす上にも歌の父母のやうゐて云々相生のやうに云々たやすきやうなれは云々ゐとある皆それのやうにあるといふ意はへにて父母ならぬと父母となすらへ相生ゐらぬと相生とおはえたやすき事ならぬとたやすきゐなす也今はゐはれなるとゐはれゐると云ゐれはやうにといふへきならす事のらゐよりてはゐさとふはめく事なきにしもゐらねとしのも得失と論そるゐいたはりて書へきにゐらそ餘の評と推てしるへし衣通姫の一句といれんとしてとのくいろひたるなるへし小野の小町はろのこゝろゐはれゐてすのたつよのらすなとや有けん猶いのにも有

つらめと今はことわりと例とと推て大やうといひてゝろみおく也古本とえて正すへし又つよのらぬは女の歌なれはなるへしとは女はたゝやめとさへいひてなよひたるゝ常とすれはよめる歌もさるのたによわ〳〵しのらんはやのてまとのすのたなれは失とまてはあらしとたすけていへる也（打聽に此つよのらぬ云々は註ゐて文にあらすといひ喜撰の評のよめる歌云々の所にもいはく此六人の詞ともかの〳〵對の詞もてのきたるとこれらの事有ては文のつゝき亂れてきこゑ是とも註としてのそき見れはよくつゝきてめてたしといへるは非也此句とも有となきとは其事の心たのひゆく事ゐゝとみたりに注とはしてすつへきにあらすさりとていたつら事ならはこそあらめ其趣然るへき事なるとやたとひ對の詞は前後ひとしのらすともこと わりのつきぬのきりはいはてやむへきならねはいひのへたるもの也此句ありとて文のつゝき見たれたりとはいふへからそらを文のみたれたるは其みたれたる所につきて辨したるゝ見てしるへし又註者のれこれとのよはしてよくしらすとかのれ受はりていふへけんやれもふへし）

○衣通姫の歌は允恭紀に和餓勢故餓句倍枳豫臂奈利佐瑳餓泥能區茂能於盧夸比盧豫比辭流辭毛とあり今は訛れる也蛛のものせると客至て喜ひあるの瑞應とする事和漢同例也さてれこゐひの語はもと興起の意より出て何ゐても思ひゐこしてなす方ゐて行の字などあてたるもよくゐへり今も蛛のゐこなふわさなると思ふへし起なひのなひは音なひ荷ゐひなどのなひにて延の轉語也ふるまひは物ゐ觸るより出たる語にて

舉動の字とあてたるもゐはさるにあらす意ふるまふ意也此觸まひのまひも見まひ立まひのまひゐて同しく延の轉也時俗に經する事とふるまひといひ或はととなしきふるまひ振籍のふるまひなといへるみな事ゐふれ物にふるゝよりいひて其意よく叶へりされは此蛛のゐこなひとふるまひとゐはしたるはいはれゐしこは後世ゐこなひ事ゐこなひとそるなといへはひとへに浮屠氏の所行となりて殊さらゐ是と行者とさへいへれはさる方に耳なれて蛛の糸引はこりの事とれこなひといはんは似けなきやうに聞なさるゝより今にのなへてふるまひとはゐはせるもの也されと大のたの世ゐつれて變りゆくのやのてれのつのらなる言語の道ゐれは今よまん歌にも蛛のれこるひといふへしとゐはゐらす古はいにしへにのゐひてしのもことわりさへたのはぬとみたりゐ引直せるの僻事ゐると辨せる也又結句の今霄とのねてとしたるは本の句の霄にのさなれはなるへしのくては其蛛のふるまひとのねてしれりといふ方にも聞なさるゝ語勢ありてまとはしきてゝちするは本より作者の詞にたのへれは也こよひしるしもは蛛のゐこゐひ今霄いちしるしとたしのに其兆あらはれたるといふゐていと

おきらけしさゝのねは枕詞也後にさゝのにといひて蛛の別名とす其義は戀の部の今しはとわひにしものと云々の歌の所にいふへし

大友のくろぬしはそのさまいやしいはゝたきゝかへるやまひとの花のこけにやそめるのことし

かもひ出て戀しき時は初のりのおきてわたると人はしらすやのゝみ山いさ立よりてみてものんとしへぬる身は老やしぬると

其さまいやしの上に脫文あるへしといへり實にさるへき事也眞字序に頗有逸興而体甚鄙と有ふよれは心おのしくてとの詞かもしろくしてとの猶めてたき詞有けんのしこゝにも眞字序ゐ大友黑主之歌古猿丸大夫之姿也とありしのれは此假字序にもしの有けんもはのりのたけれと今は脫語おれはしるへきやうなしたとひしの有とも上の衣通姫とあるに同しくとられぬ事也この衣通姫猿丸大夫とあるには愚考おれとろの辨なのくしてのつ用なき事なれは別にしるすへし（打聽云遍昭は歌の体とえたりといふは此延喜の前四五代の風体ふて貫之の好まれしこゝろ也康秀黑主といやしとそるは古風ののたちあると好まれさるよりいへる也古の歌は丈夫の心ともとゝしてよめるゆゑにかのつのらふとくたくましき也今の京となりては其

丈夫の心みな失て弱くたとやのゐうつくしくのみ詠るとよしとする事になりぬこゝの六人の評は天下古今おわたるへのらを貫之一人のこゝろと見るへし康秀黑主等の歌といやしとせは古の八麻呂とはしめ黑人億良金村家持なとも其体いやしといひてのふへしとといひまたさのしかろの也としろしめしけんとある所ゐ云遍昭の歌は誠すくなしといひ業平は情餘りてあるといへり遍昭は先帝の御爲に出家してつひゐ僧正位ゐ昇るまてめてたく終りと見し其人の歌は誠すくなし業平のいのゐも放蕩おはするゐ實情もあまれるものにいへるは此人々はよむうたと心さまの表裏なるといひなのら賢愚と歌もてわのちたまはん事かはつのなき事也とへり此論そへて非也まつ延喜四五代の前也とは大同弘仁の頃とさせるにや僧正の歌此世の風体ならん事甚かはつのなし又黑主の歌は其さまいやしきゐもゐおいやしとはれたる事論なし此集にはいやしのらぬ限りと擇み入られたるならめとそれなは見やひたるすのたとは見えすまた其さまいやしとへいへるは黑主の歌のみゐるとと今康秀とも併せたるはわき人のたとへになつみたる舊來の誤謬とうけていへるは六人の中に採たる上の論にやしとといへるのみ自餘の評にも誠そくなし詞たらすろのさま身におはすはしめ終りたしかとならそゐといへるならすやしのるといやしのかこのむのたふなつみて紀氏のかはやけなる心とも見しらぬわさ也又たとひ古風なのりともいやしくはいのていやしといはさらん飛鳥藤原の大宮にふとしきいます天皇の大御手ふりと平安の大内裏ゐ坐します天皇の大御よろひとくらへ見んにはたれもいまとたふとしとしていにしへといやしといはんこれいわしへは質素にして今は華美なるゐゆゑゐりものみなは是に準そへし風俗のしのるときはうたもまたしのらん事何の論とのまたんその質朴なるところよりのれの所謂太くたくましき体はいてくる也その太く逞しき体とねのひてこのいやしといへるとにくむは花とめてゝ枝と拂ふにひとしき解事也また人丸黑人等のうたと康秀黑主に比して同し体ゐ思へるもいたくたのへる事也くわしくは別にいへり畢竟意のみ高きゐきゐはせてうたと心さまとうらうへに思ひゐしたるもしのたし遍昭と業平とのの評ととのめてよむうたよりはしらすやのゝみ山いさ立よりてみて

たのへりたとひ官僧正にすゝみて終りめてたのらん人なりとも其うた輕便ならはいのてなとすくなしといはさらん又放縱にして世ふ拘はらぬ人ありともそのうた餘韻あちは何ろてゝろあまれりといふにはゝのらん其おこなひまめ也とて實すくなき人なのる情かならす薄のるへけんや行履は世中の道にしへけんやろのおこなひまめならそとて情かのしゝうまれえたらんまこゝろのまゝうたうひて勉るのきりのもの也うたはかのつのらあらはるめりわたくしたひいつるものありさる中に情の厚薄も体の雅俗もおのつのらあらはいのて賢愚としるのたよりともならにいかんともすへきものにはあらさるなりさらはいのて賢愚としるのたよりともならさらんよめるうたしはらく行狀とたのへるとはいひもしつへしこゝろさまとうらうへ也とはいのに見ていへるにのあらん此序の六人の評は尤天下の公論ふして千歳の龜鑑なりのやうのひの言ふ惑ひて世人うたのふ事なのれもとより實すくなき人はなこりのにて情ふのき人はなよひのあるは世中の常なり僧正は其驕傲なるのたより道ふ進て遂ふ高位とふみ中將はその柔順なるかたより世におされてのちの寃名ともうけられたる也猶かの〳〵生涯の行實につきて情態とうのゝひ見はろの隈さそのにあらはれてのくるゝところなのるへし

さて近世わつのに彼うたのさまとしれる人この六人にとゝまれりとはいへるもののらろれなはあのぬとところあるより得失と擧られたるは論ふしおよそこの得と先擧るはのの失といはんのためのの失と先擧るはこの得といはん爲なるは定れる褒貶の格也たとへは遍昭は誠すくふしといへともうたのさまと得たり業平は詞たらてろのこゝろあまり有なとあらんには得の方主となりて失ののた尤輕し今はえたるのたとまついひて得さるのたと後にいへるは失のれもき也適一均の評ときくはたのへりされと一たひうたの心としれりとゆるしてのち

得失といへるなれは上とうけて失と主にいひ出ん事語勢自然にしのるへきもさるものの ら全体おとしめたるろの微意としるへき也

此はのの人々その名きこゆる野へおふふるのつらのはひゝろこりはやしふしけきこの樂のとくにおはのれと歌とのみ思ひてろのさましらぬなるへし

此外も世にきこえたる人その數のきりなく多しといへとものうたのこゝろと得たるとい ふまての人はあらす只歌はのりのものとれもひてのの沃地うこき鬼神あはれむのときの功驗ある事とはしらぬあるへしといへり歌よむとは大和魂大和言のなしのまゝふして自然の道の華なる事とわそれのつ學て得るの道ならねはいはんとしていはぬ人なくやまんとすとも止事とえす爲ナす事なうして常ふ爲その業なる事としらされは凡ろのの み人とあるのきり朝となく野となくたゝ天の下には詩ころあれと倚みて歌は無益のたは業也とのたはらに輕んして色に耽るの媒とのみ思ひ落せる俗弊と下にふつくみて書給へる文也すへて道によりては威稜嫌疑も憚らさる豪放の志と見るへし其さまとはすあはち歌のこゝろといふ末ふ歌のさまともしり事の心とえたらん人はといへるさまと

かゝしく上ふ歌の心をしろしめしたりけんといへる心にあたれるさまゝで歌の歌たる心さまといふ也其さまは得たれとも其さま身におはせ其さまいやしなと一ひきにいへる体裁のさまとはたゝのへり此所と眞字序に大底以範爲基不知歌之趣者也とゝのけるはたゝまゝゝのなへるに似たり

ゝゝるに今すへらきのあめのしたしろしめす事よつの時こゝのゝへりゝゝゝんなりぬる是より今上帝の御事と申出て撰集のおはせとうけたまはりし事といふ四つの時九ゝのへりは九年といふ也今上の御世しろしめしゝ昌泰元年より延喜六年まて九年也是によりても奏覽は延喜六年にて五年にあらさるとしるへし諸説のとく五年と奏覽とする時は八年なれは九返りとゝのくへゝのらゝ次の文ふ延喜五年四月十八日に大内記紀友則云々とあるはそなはち勅と承し日也上ふ年は百年あまり云々といへるとましへ見るへし諸註昌泰四年延喜五年并せて九年也といへるは昌泰の四年は卽延喜元年なるとゝのろへあやまてる也（顯註に是と扶て云延喜帝卽位已來昌泰三年延喜五年并八年也寛平九年受禪仍稱二九廻一也加二受禪年一也以二受禪年一付二新帝一文武十一年也付二先帝一元明七年也桓武嵯峨皆如レ此其以下近來皆付二先帝一也といへるは非也受禪の年とは先帝に付そる事もとより常例也たゝ〳〵孝德文武元正聖武孝謙光仁平城の數代卽位同年に元と改めたまひしとも後世二年ともて新帝の初年とそる例也況や今上先帝の御字とゝのさそ年とこえて改元ありしと猶前年受禪の年と加へてゝのそふへけんやかもふへし）

また眞字序の終ふ于時延喜五年歲次乙丑四月十八日臣貫之等謹序と書たるは此序の文と誤解して是と奏覽の日とてゝろえ違ひたる例の僻事也古來此眞字序と紀淑望の作とせる其ひゝとはゝつ〳〵上にもいへりまつ淑望は長谷雄の男紀氏の猶子にして同しく此集秋部の作者なるふ其奏覽の年月と思ひたゝへて書へきものならんや又假字序の趣意と解せすしてひゝの事のみ書つらぬへきものならんや按そるにては此序と摸して後人の作り試みたると又後の好事のさゝのしらに淑望は當時の文人ゝつ親族のちなみあるゝゝ故にさる事におもひてしゝいひなしけんさると康平の頃に至て學士明衡つひに淑望と推定めて本朝文粹に載しよりいよ〳〵世人此集同時に出來のものと思ひて集跋にさへくはへたゝゝるへしゝゝるゝと先哲其眞僞とも糺さそ妄に彼序ふよりて此序とゝけるゝゝ故にこと〳〵たゝのはさる事なきに至れりたゝひ眞字序の文此序と摸し得たりとも和漢の語勢氷炭の違ひあれは更ふひとしゝるへき者に非そ況や其意と得ずして推あてに書るものとや假字序は仮字序にて解へき事論なきとひたそら眞字序にのみよるゝゝのに

といふ眞字序は解し難きこと無く仮字序は解し難きの故也譬へは和語は泉の如く漢文は巖に似たり泉の流るゝや古今おわたりて絶そといへともしはらくも本の水にあらす言語の移りくたれる恰もこれに同しやゝ水上遠白くして其水脉と探るふよしなく遂に源と失ふにいたる漢字のこゝにあるや其一物と取こして引そゑたるものゑれはかの巖の苦むしてのたく動さるの如く昔も今も變態なし其のはる事なきの故ゐ昔とみる事今のとし和言のうつりゆくや更に今のむのしにあらねは其跡甚見やすのらすされはなつ其見やそき方によりて後見難き方と伺ひしらんとそいきはひおのつのら然るへきものゝこれ後人眞字序と離れて此序と說事あたはさる所也されと此兩序和漢死活の違ひあるはさらにもいはそ大略その心はへさゝ違へると辨せさるはいみしき謬也後に五條三位の此眞字序なきと證本にとられたるは識あるゐ似たりさて紀氏の長歌にもいせの海の浦の汐貝拾ひあつめとれりとすれと玉の緒のみしのきこゝろおもひあへす猶ゐら玉の年とへて大宮にのみ久のたのひるよるゐのす云々といへるこは五年四月より承香殿にまゐりて集め撰ふとすれと短慮不才の身はは〻〻しく事竟もしておもはえす

年とさへこえてなほ晝夜といはすものしつのへまつるといふこゝろなれは是も六年に越たる證也こは舊歌奉し時の目錄の序の長歌とあれは此集奏進の時忠岑の長歌と共に相ろへて奉れるとやのて集中にくはへさせ給ひしゐるへし然るへき事也此長歌は例のこゝはらすして心のゆくにまのせたる獨立の調なれは古格にのみよれる人まさにとき得る事ゐたはを終ゐ筋なき歌なりとしてゐさみゐとせるもすくなのらすいとのしてのらすや今引たる數句も其意注家の說ゐたのへるともてあやしむ事なのれ委くは歌ゐ付て辨せり又この長歌の結句に我宿のしのふ草ゐふる板間あらみふる春雨のもりやしぬらんとあるによれは大躰撰定の功は六年の春二三月の頃にろ卒ぬらんさて奏覽の日はやのてろの四月の十五日なりけん然ゐもふゆゑは本朝世記扶桑略記日本紀略拾芥抄等みな延喜五年四月十五日と撰進の日とし顯注にも國俊抄また敦光朝臣の本朝帝紀等に五年四月十五日撰進とあるよししるされたり斯のこく諸史皆十五日とあるろ本のつたへの正しきなるへき又五年とあるは六年のあやまちなる事上に委しく辨せるの如し決めて原本ゐは是も六年とそ有つらんさると諸史の撰者たち後人摸作の眞字序と淑望の

撰と意得つめて明證也と思はれしより此序の五年は奉詔の年なる事いと明らかなるとさへ竟に誤解して五年と直して記されたるもの也さらは十五日ともかゝしく此序につきて十八日となはすへきと只三日の差ひにていさゝかの事なれはさる故も有へき事に思ひて是はかりはもとのまゝにろ記し置れけんされはころこと〳〵十五日とはあんめれ果して近ころの大日本史には十八日と改め記されたりこはたま〳〵五年の奉詔も六年の奏上もともに四月中旬に當りたるよりまこのへるもの也

あまねきかはんうつくしみの波やしまのはかまてなかれひろきにはんめくみのかけつくは山のふもとよりもしけくかはしましてよろつのまつりとときこしめすいとまもろ〳〵のとすて給はぬあまりにいかしへの事ともわそれしふりにしとともかこし給ふとていまも見そなはし後の世にもつたはれとて

大御世しろしめしていくはくならぬに大御めくみ大御國の外までもかよひけるといふ也實かいはもるひしりの君かてそまし〳〵けんさてころ大御よはひいとわかくれはしましてかくすたれる道ともかこし給ひ紀氏の和歌にすくれたる事ともしろしめし給ひ

つれさるは院の御うしろみかろかならすといへとももとよりの大みこゝろはせ秀させかはし給はすはよろつの上いかてこの然るへからん偖しの大御政聞しめす事の繁き中にも諸の事とも弄給はてと也古の事ともわすれしはこゝかいにしへのことも歌のこゝろともといへるにかなしく彼古の世々のみかと春の花のあした秋の月の夜とに云々とあるとさせりさるいにしへの盛事とも忘れ給はしとて也ふりかし事ともかこし給ふとては萬葉の後久しく撰集の事絶たると此たひ思しかこさせ給ふといふさて此文あまねき御うつくしみ云々とひろき御めくみ云々と對しよろつのまつりと云々とも〳〵の事と云々と對しいにしへ云々とふりにし云々と對しいまも云々と後の世云々と對したりさるに其きはあらはれそかたちのなるかめてたき也そへてもあれとかく義理とはかれていかにも書へき處にたへなる調はきゝしらるゝ事そ此わたりの文あるは重ねあるはは〻きて思ふまゝかるこの世かかよひなきさのひ也（千載集の序にみろちまり三のへりの春秋かかんなりにけるあまねき御うつくしみ秋つしまの外までかよひゝろき御めくみ春の闇の花よりもうはし云々源氏明石の卷に深き御うつくしみ大やしまかかねく云々かとのけるもみな此文とし たへるなりすへていさゝかにても此かもかけによれるはかのつからけたかくさかえたる方にきこもらんかしされは昔より此みふての林にかくれさる人誰かはある仰きても

猶玩味すへし）

延喜五年四月十八日ゐ大内記きのとものり御書のところのあつこのりきのつらもきさきのこのひのさう官ゐふしこのふちのみつね右衛門の府生みぶのたゝみねらにおほせられて萬えふしふにいらぬふるき歌みつこのらのことも奉らしめ給ひてなん

延喜五年四月十八日ゐ撰集の勅と蒙りしと也四月十八日ゐ云々仰せられてと承たる文也さると奉らしめ給ひてなんといふまてゐ引およはしてこれと奏進の日也とおもひとりしは眞字序の作者語調ゐくらきのあやまちなる事既にいへりよし奏進の日ゐれもひとれりともうれと序末に書へき事このは奏日と序書し日と同日ならんいはれなきとやこのくも筋なき此序としも證として五年四月十八日と奏進の日とおもはれたるはいふこのしきと也また家集に延喜の御時やまとうたしれる人とめしてむこのし今の人のうた奉らせ給ひしに承香殿のひんこのしなるところにて歌えらせ給ふ夜のふくるまてとこのういふはとゐ仁壽殿のもとの櫻木にはとゝきすのなくと聞しめして四月六日の夜ありけれはめつらしこのりゐこのしこのらせたまひてめしいてゝよませ給ふゐ奉ることと夏はいこのゝ鳴けんはゝきすことしはこのりはあらしとろゐもふとあり袋草子ゐこの六日は十八日の寫誤ならんといはれたるしこのるへき事也六日はいまた大みとものくたらぬさきなれは論なくあやまり也翌年の四月六日とせんにはうたふとなつはいこのゝ鳴けん云々といへるにこのなはすなは五年四月十八日と見るへき也大鏡ゐこれと四月二日とこのけるは又六日の寫誤なるへし十八日と六日とあやまり六日と二日とあやまれるはつき〳〵みな字形の似たるにくつれし也袋草子顯注また一本ゐはうたえらはしめたまふはしめの日夜更るまて云々とありさてはいよ〳〵十八日なる事明らけし今の刊本いはしめの日の一句脱たる也されは此家集の詞書も五年四月十八日ゐはせとうけ給はりし證明とすへき也さてこゝの列は官位の次第によりてこゝれたり實は紀氏棟梁にて其事とはすへうけ給はりて自餘の撰者はたすけなせるのみといへり按するに集中にある歌の端書など皆紀氏の語調ゐして外の手に出るゐあらされはまとに一人のちこのら成へし又古傳に紀氏古今集撰の時は齡二十三歳也といへるは何ゐよりたるにやいとものあたらぬ事也（一説三十二歳也ともいへり）いこのに此ぬし絶世の才ありともさはこのり弱年にて此度の魁首たらん事いこのゝなる

に殊ゐ餘の撰者みな老耄なるとやのつ此序文の躰の老成したるゐもさはのり若のらさる事しらる大より貞觀の始に生れて天慶の末に終られたりとみえたり寛平后宮歌合に此撰者たち皆其人數ゐりし事此集にみも此歌合寛平のいつにの有けんしられねと此時の歌と採れたる菅家萬葉は寛平五年九月廿五日に物し給へるよし彼序ゐしるし給へれは此時よりゐたなる事はしるし此集は人口にあるところの古歌また是貞親王家の歌合の歌なともあつめられたれともはらは此后宮の歌合の宴にもよはされてれもひかてし給ひしふもむきゐ見もれはやのて歌合も同年の春夏のうちなるへくかはゆされはしはらく彼歌合とも寛平五年と定めれきて此延喜六年より逆にがそふれは十四年前なり當時二十三歳ゐらんには彼寛平五年は未八九歳の幼童なるとや是にて此傳説の浮たると識破すへしさてまことはいのにと考るに集中歳暮の歌に行としのとしくもゐるのなまそかゝみみる影さへにくれぬとれもへはとあるにもしの若のらさる事いちしるし此端詞ゐ歌奉れと仰られし時ゐよみて奉れるとゐれは猶さきの何れの年にの有けんはのりのたけれは餘の撰者たちと同しく老たけたる齢にやとも云へけれと猶さはのりはあ

らて大凡四十五六歳はのりにやあらん見る影さへに暮ぬといへる語調とみるに限りあれはやう〳〵老の堺ゐ立入ていつのは紅顔の焦衰せると歎したるゐやと聞えて雪と浪ととなけきたるまてのしらへにはあらぬこゝちす集中物名ゐぬは玉のゐの黒髪やのはるらんのゝみののけにふれるしら雪とゐるは紙屋川とのくしてよまれたるなれは歳暮の歌の打むのひてなけきたるとは同日の論ならすさりとて老ならぬ人ののくはよむへきならぬと齢としるの證とまてはなしのたし又家集ゐ天慶八年までの歌見えたり此延喜六年よりは天慶の八年は四十年の後なれは當時と暫く四十五歳と定めても八十四歳の時にあたる況や今と古稀耳順の齢とせんゐは百歳にも及ふへけれは猶此時さはのり老給へるにもあらぬとしるへき也又江州大嵩の神社の梁なる簡銘ゐも天慶八年乙巳八月二日從四位下行木工頭紀朝臣貫之謹誌とゐれは此八年まて世ゐ在られし事家集と符合せりさて世に天慶九年六十三歳にて卒せられたりといひ傳ふるは撰集の時と廿三歳として家集に天慶八年までの歌有によりて推あてにのろへ合せたる也されとも家集の終りに八年二月の歌見え右の簡文に八年八月なと見もれは卒去は世ゐいふ如く九年に

ても有ぬへし又洛南千本の東ある中堂寺村に紀氏の墓所也と云傳て舊〳〵より福大明神と申て近村の産靈神とあゐめて年のはに是と祭れり今は其いにしへとしる人なく稲荷の社として幣帛ともて形代とす元有し木像は本國寺塔中勸持院にいはへり已れ近き年此像と摸し刻ませける時門人含光院日辨其餘材もて小像とつくり勸文と添て彼中堂寺村の小祠ゐとさめたれは今は紀氏の神靈ゐる事のつ〳〵人もしりぬへし又菱屋町一條の南に同く福大明神の社有是は紀氏の神主と丶さめし所といへれと然らさる事なとすへての委き事は別記に遺せり又勸持院の傳記に十月九日と祭日とすれきはめて古傳なるへし菱屋町なるは四月一日ともて祭日とそれと據のたし其故は後撰集ゐ紀氏の三月つこもりの歌に又もこん時ろと思へとたのまれぬ我身にしあれはとしき春哉とある左注ゐ貫之のくて同し年ゐなん身まのりにけるとありこは何心なくよまれたるのはたして思ひあはせられたる意なれはいまた病につのれぬほとなる事論なしされは四月一日は此歌よまれたる翌日なれはのなはさる事明らけし又家集云世中心はろく常のこ丶ちもせさりけれは源公忠朝臣のもとに此歌とやりけるこのあひた病ゐもく成にけり手

に結ふ水ゐやとれる月影のあるのなきのの世にこそ有けれとあり按そるにもはら納涼して水なとむすふは大のた六七月より八月に及ふへし必さるへき時にあたりてよまれたらんゐれはろれより病れもく成て身まのられたるには十月九日といへるにゐみへるで丶ちそのゝれはしはらく天慶九年十月九日八十五歳從四位上下のあひたゐて率去せられたりと定むへきものの此考よしあたらすとも遠くはたのふへのらす（ゐのれ彼神像とうつさせたる佛師如水云すへて木像とささむの法ゐよそ惠心僧都より定朝法印に定れり此紀氏の像は其規矩さたまらさる以前の作にして摸しのたしといへりもし此說たのはそは沒後百年とまたすして世にはやく神とは仰きまつりけんされは彼座像の膝の方他木と用ひたるは虫はみ朽たるとつくろへる也といひつたへたるにも實ゐ古きとしるにたれりいたゝき祭らさるへけんや）

ろれの中にも梅とのさそよりはしめてはとゝきすとき丶もみちとゝり雪と見るにいたるまてつるのめにつけて君とふもひ人ともいはひあきはきゐつくさと見てつまとこひあふさの山にいたりてたむけといのりあるは春夏秋冬にもいちぬくさ〳〵の歌となんえらはせ給ひけるすへて千うたはたまき名つけて古今和歌集といふ

ろれの中にもとはのく奉らしめ給ひつる中ゐて又其卷々と取わけていへはといふ梅と

のさそといふより雪とみるといふまでは四季也鶴亀といふよりくさ〳〵の歌といふまでは賀戀旅雜也集中紀氏の長歌につらねられたる次第も此序と同し今本の部立はいたく亂れたり彼長歌は目錄の序とあれはみたりなるへのらす證とすへしなほ委くは長歌の所に辨せり雪とみるにいたるまてはいたりといへる心に同しいひのこしたるにはあらすひとともいはひと顯本難波本ともゐ友といはひとありこれそ正しのるへき臣ともいはひといはへ君よりいはひ給ふことにのみ聞えてことわりあたらさる也上ゐ君もひともとあるは外より君臣とあはせてさすゐてよくのなへり今はこの君もひともとあるによれる後人のさのしらなるへし又相坂山の句も顯本難波本に相坂ゐいたりてとありて山の字なしさるのた調もとねりもあしのちねは又したのふへしたむけといのりはたむけの神といのり也山上とたむけといふも旅人道祖神に手向となよりしのいへる事代匠記ゐ辯せりたむけは今云たうけ也今は其神といつきたる坂の上とさして直に手向といのりといふ祈年祭の祝詞ゐ水分坐皇神等とあるも水分の神のいまそ所とさしてやのて水分といへるなと打のへして同し意はへ也兼昌の伊駒山たむけはこれの木のもとに岩くら打て榊たてたりとよみ俊成卿の足のらの山のたむけゐ祈れともぬさと散のふ花さくらのゐとよまれたるなと引ゐはせて思ふへし餘材ゐ新撰和歌集序にも一千篇と首或は十首廿首はのりまてそあらめ百首有餘あらんと弄て成數ならんのらに只千首とのみは云難きこゝちすめりやのて上に百一年と百とせにあまりとも書れたれは此も千うたまりはたまきとあらんゐ何事の侍らんよりて按るゐ延喜六年奏進の時は千首ゐ限れりしと其後又さらにさた有て彼新撰なと仰付られし延長の頃はひなとゐ再ひ追加せられしゐや侍らんさるはゐは漏たる古歌とも入られ或は然るへのらぬとは扳去なと竟ゐ百首餘に及ひたると改たむへきはのりの事ならねは序はもとのまゝに有けるならしされはろ奏進後の歌もあまた入り又後ゐえりすてられたると墨もてけちたる本のさて傳寫せるの彼墨滅の歌ゐるへきの後の撰集なとも奏覽の後久しく内にとゝめて精撰し給ひまた勅して撰みのへさせられし類ひゐんなるにも事情さるへのらんとゐもひはのるへし（餘材にろれこの中は續萬葉の中也といへるは非也こは眞字序に各獻二家集幷古來舊歌一曰二續萬葉集一於レ是重有レ詔部一類所レ奉歌勒爲二二十卷一名曰二古今

和歌集とあるによりて此文の萬葉集にいらぬふるきうたみつのらのとも奉らしめ給ひてなんとあるは彼續萬葉の事ゐて其中より再ひえらみのへしてゐらためて又古今集と云也と心得たる也此假字序のおもむきは只去年の四月十八日に四人に勅ありていにしへ今の歌と集めさせ給へると此度撰みあけて奉り名つけて古今和歌集といふといへるのみにてのさねて詔有しゐと異義ある事なし按するに眞字序の作者とるにたらそといへともまた世になき書名と設出てのくへきいはれもなけれはのたはら續萬葉ともいひそれゐつきてさる浮たる說も世にありしとのきしにもや有けん此名は承香殿ゐしてこの集撰ひ物せられける間のりにつけられたる草稿の名なるへしもしさらはその撰錄中おはやけわたくしゐよひなれてゐは後までもうち〳〵はしのもいひつるならんされと一たひ古今集と名つけて奏覽ゐろなへし上は續萬葉の號再ひとゐふへきゐあらそ

今はあすの川のせにゐるうらみもきこえすさゝれ石のいはほとなるよろこひのみそあるへき

此集のく一度撰はれては二度よにたゆる事なく數さへ〻はく集められたれはまた彼人しれぬ事と變りゆくへき恨もなくいや遠永く榮えゆるむ歡ひのみそきこゆへきと也眞字序にこれとうつして淵變爲瀨之聲寂〻々閉口砂長爲巖之頌洋〻々滿耳といへるは此集の祝言ゐはあらて大御世とたゝへたる也こは作者の意今はあすの川と云よりはひろく大御世にのけたる文也とおもひ謬たる也例の混すへのらす

ろれ枕冒葉は春の花にはひをくなくしてむなしき名のみ秋のよのゐのきとのこてれは此まくら詞と眞字序に臣等詞とのけるによりて臣とまくといふゐといへる說はいふにたらすたまく〳〵古事記或は文選なとの古き假字つけに見えたれともそは却て此序より移りたるなれは論なし顯註に某丸等とろれまくらと云憶の眞字序に臣等とのける同心也といはれたり近世多くこれによれるは共に非也ろのゐみまろといふはかこれる自稱にて多分高貴の人つのへり俗ゐおれといひ或は此方（ゴノハウ）なと云に似て不遜の語なれは此序ゐとにはさらゐ書へき語ゐあらすたまく〳〵さらぬきはゐては或はなれたる中らひ或は兒童の詞にいへるのみ枕双帋にゐくきものといへる所ゐ御前にて物といふともきこしめさんにはなとてのはまろのゐといはんとあるとも思ふへしさると後世まろはのと〳〵しきのうらなれい不才の意ゐてひたすら臣下の語也とのみおもひとれるい謬也夫と某の意とせるなともとよりこととわりもなし餘材に云むなしき名のみといふに對すれは詞は云々の上にはのゐきつたなきゐといふやうの詞のゐへきと脫たるにやといへりこは決めて然るへき事也大井川行幸の序に拙き言の葉云々とあれはこゝもわれら拙

き詞と有しゐるへくおはゆさては句調もとゝのひむなしき名のみといへる對にものなふへし門人小林良典云古今集數本と合せ考るに古寫本はさら也天和延享寶暦等の刊本いつれもろれ枕言葉とのみ書てまくら詞と假字にて書るは未見あたらもされは枕は拙の寫誤なるへく上なるろれはわれらとなはせるさのしらなるへし後拾遺の序にもわれらあしたにみとのりとうけ給りと書れたりといへりさる事にもや侍らんいつれそれわれらと有へき所ならすわれら云々と打とさまり畏みていひ出へき也難波本にはつらもきとのは云々とあり此つらゆき言のはい決めてつたなきことはの寫誤なるへし顯註にも江本にはつらゆきらと書り或本にはつらもき丸と書りといへりのれてれとのよはして考るゐわれらつたゐきと有けるこのわれらつらもきとゐりさてはとわり立ねはろれまくらゐとやうやくゐ轉せる也彼行幸の序のわれらみしかき心のこのものもにまとひつたなき言の葉吹風のろらに亂れつゝとあるに文勢語脈のはる事ゐけれは今も我等といふと一句として拙き詞は春の花云々虚き名のみ秋の夜の云々とむこのへて書るなるへし眞字序に臣等といふと句として詞少春花之艶名竊秋夜之長と對句にせるも今の語調

とうつせるなれはこれとも證とすへきものゐさて名の長きといふ事いこのゝ也後世に長く傳はらん名といふ意也ともたすくへきなれとさは詞もたちはすもとより作者の意然にはあらしこは此道ゐ長せる名といへるなるへしそは音にて長せるとはいふへく訓にてなゐしといふへきにあらす只物のうへにつきてはいへと才藝の優長となゐしともゐゐくなるともいはん事たえて有ましき也漢文の弊へよりしらそ〳〵こゝゐいたれるものそ此序文大ゐた漢文によりてゐゝれたれはいとゝゐゝる事もましれる也いゐて漢文ゐはよれるといふゐまつ當時漢字にうとき人は更ゐ出身もなりゐたき事國史學令なとによりてしるへしもとよりろのゐみよりとりわきて皇國の學といふものなけれはやう〳〵往古の事ともしる人ゐくなり中にも歌の廢れたる事は上文に見えたるゐ如しさて其歌の道とゐゝけんゐは漢才の力もなくては又さる方のゐなとりありてゐの詩文とのみむねとせる世に更にうけひくましけれはゐほくは其跡とふみて書れたる也さるは例の火とゐて火と消そのたはゐりにて彼六義と擧られたるこゝろはへともゐはせてしるへしたゝ發端の三節のみそましりもゐき紀氏の眞心なりけるゐこつはゐりことを也ゐ

りのりとはふきとそとつゝめてつと云ひとり言すとひとりこつはのりことそとはのり
こつといふゐなしされはのこてれはゝのりとすれはの約也ふるく托の字とよませた
るはのなはさるゐわらを何ゐまれひそのゐろれによりてものするといふ（餘材ゐ和歌
の名と秋の夜にことよせて人にいはるれはの意ゐるへしといへるは非也春の花秋の夜
のは匂ひといひ長きといはん枕のみ秋のよにとよせたるゐわらを打聞ゐのこてれはゝ
ゐこつけれはといふ語也と
いへるは何事ともきこえす）

ゐつは人のみゝゐおろりのつは歌の心にはちれもへとたなひく雲のたちゐ鳴しのゐふきふ
しはつちもきちこの此世にゐなしくうまれてこのことの時にゐへるとなんよろこひぬる人ま
ろなくなりにたれとうたの事とゝまれるのゐ

人の耳にゐそりは拙き詞云々とうけ歌の心にはちゐもへとはひなしき名のみ云々とう
けたりさてたちゐれきふしには此聖代にもろ〳〵の人とれなしく生れてあまねき大御
めくみとのうふり殊さら此集の事れはしふこされし時ゐ逢ひ奉れるとよろこひぬると
いふ也れきふしにはといふへきとれきふしはとに文字といはぬはゐにしへの常語也何
はあれと鹿のさまはともすれは膝とり ふせて起臥しけきものなれはことさらに枕とれ

ゐれたり貫之等のといへるは此序紀氏のゐけれはれのゐ名と擧て餘の撰者とゐぬ眞字
序の末ゐ臣貫之等謹序とゐけるは彼奉詔の日と奏進の日也とれもひたゐへる例のひゐ
わさなる事既ゐいへり同義と思ふへゐらす又此假字序はれのゐゝけれは己ゐ名とあけ
ん事論なし眞字序は淑望ならんに貫之と書るいゐゝ是はゐりゐも後人の譯文ゐるとは
知へき也（餘材に或曰以二貫之爲一猶子一私一命令一草レ之未レ知二其所一據蒙窮案既是四一傑
奉レ勅撰レ之貫之何敢有二私命一然則此序亦淑望奉二綸綍一撰也といへるは非也
さらは淑望謹序と書へき事也何と憚て他の名とゐるへけんまた勅と奉して撰ひたちん
に遍昭と花山僧正業平と在原中將康秀と文琳なとゐめしく書出へきものならんや舊說
はゐゝるたゐひのいてくるとゐへりみて紀氏私に草せし
めたりなといひなせるものゐいつれ無稽の說といふへし）さてうたの事とゝまれると
は勅撰の事也平城の御時勅と蒙て萬葉と撰みし人丸はゐくなりにたれと其例によりて
そ又此度此事ありきといふ也欠王既沒文不在茲乎といふによれりといへるはさも有へ
し

たとひ時うつりことさりたのしひゐなしひゆきゐふとも此歌のもしあるとやあとやきのい
とたえそ松のはのちりうせすしてまさきのゐつらなかくつたはりとりのあとひさしくとゝ
まれらは

是も陳鴻長恨歌傳ゐ時移事去樂盡悲來と有ゐよるといふ是より此集の末長く傳はらん祝言なれは其文れのつゐらゐみ榮えてめてたしともめてたきと味ふへしさて此歌のもしあるとやといふとやの言は強くあたりていひはなつ不遜の語也されは上ふ人の耳ゐれろり歌の心ゐ恥るなと謙退せるにも又次ゐひさしくとゝまれらはとたはめきて承たるにも文勢悉くゐなはを此所難波本には此歌もし青柳の糸たえそとありこれろ正しゐりけるゐくてろ始て文理もとゝのひ語調もめてたきもの也按るゐ後人もしの語と文字の事と意得しよりのとくはへて歌の文字とし青柳の語亂れて重ゐれりしとあるとやとよみなしたるやうのゐやまちなるへし文字と見る時はやゐて次なる鳥の跡久しくとゝまれらはと有にもことわり重ゐれり彼大井川の序ゐもゝし此言の葉末の世まて云々と有と證とをへしもとより此集のゐく世に行はれん事は當時撰者のゐけて思はれたるゐらましゐらんや此歌もし青柳のいと絶す鳥の跡久しくとゝまれらはともしや傳りぬへき萬の一とたのみ又長歌の内に此撰集の一舉ゐよりてゐたはら出身の事とねゐはれたる下心みゆめりゐく此集萬葉の上に出て千載の遠きと亘り寶ゐ大空の月とみるゐ如く

に仰くへきとたしゐに測りしられたらんゐはさるゐましひなる事とは云も出られしと當時今上といひ上皇と申暦朝の余波と受給ひて詩のみ倘み玩はれ歌は大やうめゝしき方にれとしめて事ゐも數まへ給はねは奉るやうてにすさめられんも論なく量り難きとゐやふまれたる也尤往昔よりれてろゐなる勅命と蒙りいゐめしき姓名と列ねて撰進せられし若干の書も墨いまたゐわかをして其名たに遺らぬ類ひ少しとせを況やこれはもろ〳〵の事と弄給はぬ余りに仰せられたるはゐりの歌集なるとやされは今幸ひゐさゐえたる此集にむゐひて撰者の心と說にはその用捨の意得有とひろゐゐ辨すへしさて青柳の糸松の葉の正木のゐつらはたえすといひちりうせすといひなゐくといはん枕也れよろ枕詞は調とゝのふるの具のみされは集中の枕其數れはしといへともみな其調と得ていたつらゐらぬと見るへし後世文とたゐいへは只書へき事としてみたりにものせるより調も詞もたしろきてゐゐ〳〵是なくはと思はるゝ也されは是はゐりも此序と規則として學ふへきものゐゐは枕詞の事いさる歌のところ〳〵に解り

うたのさまともしりとの心と得たらん人は大ろちの月と見るゐ如くにいゐしへとゐふきて

いまとこひさらめのも

歌のさま云々は歌の心さまとしれる人也事のこゝろ云々は古の事とわきまへしれる人也門人菊岡言興云このいゐしへと仰きて云々は彼いにしへの世々のみのとゝ云るいにしへ也註家此いにしへはそゐはち今の延喜の御世と後のこゝろゐなりていべりと思へるはひの事なるへしといへるに從ふへし今とめくらしていゐしへと云んも今めのしくゐつ今と戀さらめのもと同し言と打重ぬへきゐもあちしみな此序の躰一裁に非すこは後世心あらん人此集と見は大同弘仁の古と仰きたふとみ寛平延喜の今と戀慕はさらんやと云也其年間の玉詞金聲この卷中ゐ盡せれは也此古と仰きといひ今と戀といへるはすなはち紀氏の集に昔今の人の歌奉らせ給ひし云々とある昔今ゐあたれり大炊行幸の序に此ことの葉末の世まて殘り今と昔にくらへて後のけふときのん人云々とある此今も延喜の今といへりこれとも後の世とさせりと思へるは併て謬也さては通せさる事彼解に辨しおけりろも〳〵古今和歌集の標題は此大尾の言とうけたる名義也とし〻るへし按るゐさらめのもはさらめのといふゐもの言とそへたる也常にさちめやとはいへとさらめのといひし事ゐけれは今も戀さらめやもとのもとあやまてるにやふはつのなし集中戀三に山科の音羽の山のれとにたゐ人のしるへく我こひめのもとある歌も墨滅には戀めやもとあり此外には萬葉の東歌ゐ一二首侍るのみにや後に後賴のしつのみきりに逢さらめのはとよまれたるあれとものとより此集後のものは此序とまなひたるなれはいふにたらすいつれ後勘あるへし

古今和歌集正義卷第一

春歌上

ふるとしに春たちける日よめる　　在原元方

年のうちに春は來にけり一とせをあぞとやいはん今年とやいはむ

ふる年は舊年也されはこゝ新年ゐありていふへき語なると後ゐ惠慶法師白雪のふるとしなゐら庭の梅は花とゐのこちて匂ひやはせぬなと年内にいへる有なしき事也冬なゐら春來たりなといふは似てと也混すへゐらと歌の意はや春はきゐけりゐさらはことしの一年とはもはや去年といふへきやされと又年のうちゐしゐれはやはり今年といはんゐとまとへる也正月一日と春たつ日とならひたる心より春來たりといへは共ゐ年も立ゐはるへうふとは思ひなされて去年とやいはんといひ再ひゐもひゐへしていやもとの今年とやといふ也

○打聞ゐ春立てよりはすてゐ明る年の春ゐなれり然れは同し年の内ゐると今は去年と

やいはんといへるは非也春立てよりは既に明年の春ゐなれりといへるは道理とかしの
へしていへるものゐてそへてのとさゐきしらへゐのなはそこは春たつといふとやのて
年たつやうゐおはえてとりゐへす去年とやいはんといへる意也味ふへし

春たちける日よめる　紀貫之

袖ひちて結ひし水のこおれるを春たつけふの風やとくらん

水遊ゐ立出てなつさひ結ひし水の程なく冬ゐこはれるとやのて又けふたつ春のゐせやと
のんすちむといふよとみなくめくゆく月日と年立のはるけふしも立のへりてつらく
感したる也

○餘樣抄ゐ或説ゐ夏よりの事とのけていへるはゐまりゐ深き心といひつけんとて後の
人のしわさ也顔と洗ひ手とすゝくゐは冬も水と結はぬ事のはといへり遠鏡も是ゐよれ
る共ゐ非也袖ひちて結ひし水と過去にいひふろして風やとくらんと思ひやりたるしら
へ朝夕ゐゐつさふ水のさまゐらんや又常ゐ水瓶なとゐ向ひて顔あらひ手すゝきなとせ
んと打まのせて結ふといふへけんやさるはひさこゐともてころ物そへけれ掬ふは兩手

とのへて挹の名也さらんゐはおのつのら水面ゐ袖のつくへき納涼のさま思ふへし
○打聞ゐむすふは夏こはるは冬其ゐひたゐ秋とはふけりといへるは非也水むすふは六
七月もはらゐして八月ゐも及ふへしゝのしたしみし水のほとりも更に氣疎く氷たらん
寒景とのへたるのみゐて結ふは夏氷るは冬ゐとわくるに心なけれは秋と省くなと思ふ
ゐいとまなき事也又のならそ立春の日ゐ其こはりのことく〳〵く解わたるは見ねと孟一
春之月東一風解レ氷ゐといへる公界の理りゐまのせてしはらく今日にさし定て吹風にと
けんそらんといひやりたる也

題しらそ　よみ人しらそ

春かすみたてるやいつこみよし野のたゝの〳〵やまに雪はふりつゝ

二句風躰抄ゐ此歌はたてるこ書たる本も侍れとよき本ゐはみなたゝるやと書りといはれ
たり隨ふへし千五百番歌合に是と本歌ゐとられたる慈鎮和尚の歌もたゝるやいつことあ
りこは春來たりとてきのふけふしのも長閑に打霞みたるいいつこいのなるろろろ打わた
せる芳野の山にはいまた雪のふれるとと雪ふる方と地ゐ見て霞める空とめつらしみいふ

のりたる也降つゝは春來ても猶ふりつくといふ紀氏の歌に山見れは雪ゐまたふる春のすみいつとさためてたちわたるらんゐとある同しおもむき也

○餘材ゐ春の來て霞の立たるといふはいつころ吉野の山ゐい雪のふるものと云々打聞に今は春へゐれと霞ゐいつこゐの立たらん云々遠鏡ゐ春カ來テ霞ノタツカハトレトコチヤツといへる皆非也こゐ霞める空と見とゝめたる調ゐらん事まのふへゝのらすしゐ餘寒のさまならんやゐ前後春めきて長閑けき歌の中ゐいれると見るへし古來此春霞たゝるやいつこと春霞いつこ立らんと云意ゐ聞なせるは語脈ゐ疎き也萬葉卷五太宰師旅人卿の庭の梅とめてゝ大伴百代のよめる歌に烏梅能波奈知良久波伊豆久志可須我爾許能紀能夜麻爾由企波布理都々とあるもまのあたり其梅と見つゝよめるにてかく散のふはいのなる處そとゐやしむ方に成ていへるは今と同しきしらへ也

二條の后の春のはしめの御歌

雪のうちゝ春もきにけりうくひすのこゝろもとる涙いまやとくらん

此延喜の頃は二條の后は后位と止られたるなれは此集ゐしの書へゝのらすと餘材抄ゐ事實と論して委しく云るはあたれる事也按するゐ新撰和歌集ゐは此歌よみ人しらすとあり新撰ゐいまた復位の前なれは猶しゝるへき也さるは前の春のすみたゝるやの歌次の梅の枝ゐ來ゐるの歌此雪の中ゐ云々の御歌と三首つらねて題しらすよみ人しらすゐて有けんさて天慶六年復位の後しられたる后の御歌なれは今の詞書と加へられて前後のよみひとしらすゐわのたれ次々二條の后とある所もいのゐそ程よく書なしたりけんとも更ゐ今のことくゝ改められたるなるへきの考ふへし新撰ゐ結句けふや解らんとあるろ正しさのゝるゝ雪の中と凌てもはるはさそのゐ來たりけり冬より來鳴うくひすの涙の氷もけふろとけんすらむと也寒中ゐなく聲の結ほれたるもけふよりは誠ゐ春めきても聞なさるゝとこほれる涙とくらんなと面白くよみなし給へり

○餘材ゐふる年の雪ゐいまた消ぬゐ日數ゐ春ゐ成けれゐ泪も氷ゝ雪ゐとちられて過つる鶯も今は已ゐ時待いてゝはなゐ木傳ふ心も付ぬらんのよしとそ聞侍しと定家卿釋し給へり云々遠鏡ゐもコレテハ鶯ノ氷ツク涙モモウトケルテ有ウカといへる共に非也こは定家卿の筆のそゝむゐまのせ給ひて面白く書つゝけられたるゐまとひたる也更ゐさ

る事には侍らしこゝ次に來ゐる鶯春のけてとある等類のつちにて冬より鳴といへり其なくよりこゝゝ泪ともいひさて氷るとさへいひなしてけふやとぐらんの實景とものへ給へるなれ谷などに籠りたるらんと思ひやらんに突つけに氷れる泪といへるけうとのらすやゝしの見たるようけふやとくらんは余りふさし定めたれは今やとゐはせるもの也

題しらす　　よみ人しらす

梅か枝に來ゐるうくひすはるかけてふけとゆいまた雪は降つゝ

梅の枝に冬より來ゐる鶯のけふは春にのゝりてさへなくにいまた雪は降つゝと雪の春色と妨るといとへる歌也

○餘材に梅の枝に來ゐる鶯なけとも春のけていまた雪は降つゝとよめるの云々と春のけてと雪の上とせり打聞遠鏡も全く是ゐ隨へる共ゐ非也來ゐる鶯春のけてなけともいまたといふまていたゝちにいひくたしたる一つらの語也しか漫りに引はなちてましへ聞べき句調ならんや餘材ゐは又其しらへくたくるとさすのに聞しりてこれは春のけて

の詞の置所ゐはつこのなきやうゐれと例もあなりといひて拾遺の物名の四十九日といふ事とのくしたる異さまなる歌と求め出て證とせれと猶いふにたらす其譯れるもとと尋ぬれゝ顯註密勘共にこの語と解まとはれしより然ことくしくいひさわける物也年内より鳴鶯の元日にのゝりて鳴と春のけて鳴といはん何の異論の侍らん冬鳴し日數は深くして春の日數の淺きにゝのけてといはむ外なき也こは鶯は春の物雪ゝ冬の物と推定めたる世中の規格ゐもたれて眞景とは忘れたるのゐやまち也又諸註の如く見る時は來ゐるの詞有ていたつら也おもふへし

雪の木ゐ降のゝれるとよめる　　素性法師

はるたてはは花とや見らむーらもきのかゝれる枝にうくひすのなく

こゝく春たちての雪は鶯も花とやみらむ其降てのゝれる木のくれに鳴聲すと也こは初春のゐした夜の間の雪なとの梢しろくふれると花よりけゐ面しろう打見るゐ折しも鶯の鳴となれも我と愛らんの心よりよめるなるへしよりて詞書も雪ともとゝして書りこゝの三首は雪中の鶯ゐて打まのせたる鶯は改めて次に出せり

○餘材ふ此歌菅家萬葉に載させ給へり彼序の心寛平御時后宮歌合の歌とも也今のことのきと引合せて會釋せゝ木に春の雪の降のゝれると見てよまれたると彼歌合の時出されけるにやといへるは非也こは彼序の文意と解し得さるの誤也彼集は寛平后宮の歌合の歌のみにゝあらす是貞のみこの家の歌合或は世人の口碑にある所の歌とも採交へ左右と番ひ給ひしにて甚た古風なるもあり俳諧めきたるも少なからす其躰定らさるは今古と擇はすよるにまかせたるものなれは也されゝ此歌も端書のまゝにてのみらす寛平歌合の歌にはあらそと知へし

○打聞に是はたゝ雪の木ふ降のゝれると見て鶯はまうけてよめる故ふ其本ふつきて端かきゝせし成へし此集の端詞とたやすくみすくそへのらすといへるゝ非也事ふころゝよるべけれさる實景ふあたりてよめる歌ふ鶯と設出てのゝれる枝ふ鶯のなくなとさたくしくいつはるべきものならむや近世といへとも少し心あらん限りゝさはのりの眞心は失ふへのらす況や古人ふおきてとや

題しらす

讀人しらす

こゝろさし深くそめてーをりけれは消あへぬ雪の花とみゆらん

ある人のいはくさきのふはきおはいまうちきみの歌也

結句與義抄顯本等みもるのと有ろ正しのりける密勘にも異義といはれぬゝ古本ゝふへて然りし也又見ゆらんとありてゝにとは差ひて本の句のとりけれゝといふにとりあはそこれ後撰に躬恒の春立と聞つるのらに春日山消あへぬ雪の花と見もらんと云る末句とまきれたるなるべしいつしのとのみ咲らむ花ふ其心さし深くてあれゝのの山の端に殘れる雪もろれのと見もる心ちそと打なのめたる也消あへぬは消んとして消さるにて村々なるといふ染てしそりけれはゝ染て居れはにて心ふかけてあるといへりてしのしゝさる心とつよむる語ふて末の花とみもるのといへる調ふのふへるもの也密勘に折とりて見れはの意ふ見られたるゝあやまり也折けれゝみもるといふことわりあらんやゝさらぬ程こそゝさも見まのふへけれ

○餘材云花に深く志のしみていつの咲んと思ひゐたれゝ消あへぬまてはのなき雪も我心のらや花と見もらむと也云々右のつゝきなれはこれも雪の木に降のゝれるとよめる

なるへきといへるゝ非也是は題しらすとしてゐのちたるゐ右の歌の端のきとのけて聞へき事有へきゐらんやしの庭わたりの梢に今ふりたる雪と思へるよりしはしの間と見て消ゐへぬまてはのゐき雪も云々なといへるさる意歌の上に有事なし又消ゐへぬは消のてなる事論なきと降ゐへぬ事にとりてはのなしとまて思へるなと云ゐたちすこはいさゝゐの霞めらむ山邊わたりの初春のけしきにて心さしふのくなと大らのにいへる語調目近き前栽なと打みたるならんや聞知へし

○遠鏡に雪サヘマタロクニ消ヌノニ其殘テアル木ノ枝ノ雪カハヤ花ニ見エルといへるは非也これも舊説ふはのられて前栽の梢とみたるよりのくゝたくしう聞ときのたき説も出くる也こゝたゝ消果ぬ雪の花とまのふにて何事もなきとや又同背に此歌古く聞ゆれは三の句とりけれのなるへしとりけれゝにやの意なり此格萬葉に多しといへるも非也そめてしなとしにていひつめたるはゝとうけてひらくの大やう語勢の定りにて自然歌となれるのしらへ也染てしとりけれのといへる口調は世に有へきならす萬葉に多しといへる甚おはつのなし

二條の后の春宮のみやすむ所と聞えける時正月三日おまへにめしておはせとあるあひたに日はてりなのら雪ののしらふふりのゝりたるとよませ給ひける

文屋康秀

春の日乃ひかりにあたるとけなれとかーらの雪と成そわひしき

餘材に東宮の御めくみと蒙ると春の日の光ふあたるとは添たり猶行末も御めくみに逢へきと頭の雪と白く成たれは久しく恩光ふあたるほとも有ましき事と佗る也といへり

雪の降けるとよめる

紀貫之

霞たちこのめも春のゆきふれはてふゝき里ふはなそちりける

春のはしめによめる

藤原言直

はるやとき花やおそきと聞わかん鶯たにもおかすもあるかな

いのてのく花のおそきと思ふよりもし春の來たるの常よりやときとしいらく疑ふさまにいひてさて鶯たにもなのはいつれと聞わくへきとよみなせり鳴たはろなう花のおそきふ定まらんとわさとしいらく兩端にのけて聞わのひといふさらは今いなのさるにつき

て春のはやきを定れるとなといはむ理りとこゝろえてのくとさなくよみなすこの歌となれるのこゝろ也畢竟春さむくして梅もさのぬに鶯たゝもなのはなくさむへきとと佗たる心とのくゝやとりてよみなせりしのことわりの打あはぬところにのへりても實情こもりて感あるもの也

春のはしめの歌。

春きぬとひとはいへとも鶯のなかぬかきりはあらしとそおもふ

壬生忠岑

寛平御時きさいの宮の歌合の歌

谷かせにとくる氷のひまをにうちいつるなみやはるのたつ花

源まさすみ

餘材云后の宮は七條后温子也昭宣公女袋草子云仁和四年十月六日入内菅家萬葉集序ゐ寛平五年とあれは歌合いろれよりさきなるへし立后い九年なれは初めゐ廻らして后の宮といへりといふ歌の意明らけし

○打聞に此宮の歌合のうたともい新撰萬葉集ゐ有と此集ゐい採られし也といへるは非也按そるゐ新撰萬葉の歌の此集ゐ入たる凡八十首餘りあるの中に寛平御時后宮の歌合

の歌といへる五十首餘り是貞親王の家の歌合の歌といへる十首はのり殘り二十首はのりは或は題あり或は題しらす也されは新撰より採られしにあらさる事明らけし又新撰にはおしるへて作者としるされさるに此集にい其名と舉られたるにもいよ〳〵然らさると知へしやのて此撰者達も彼歌合の人數なれは其本ゐ就てとられん事論なし後なる新撰と待へきに非そこい後世の意ともて古とはのれるの誤也

紀とものり

花のかをかせのたよりにたくへてそ鶯さそふ〜るへにいやる

世に來へき人と待のねては案内人とやりて是に付て來ませといふ事のあるに思ひよせてこの鶯といさなひくるしるへにはもとより吹通ふ風のついてに此梅のゝとそへてやる也といへり花は鶯の心あひなれはいのてのはさろはれさらんの意也鶯のまたるゝ時しも梅は咲出て打匂へるけしきによりのくはとさなきことさまともいはれたるものゐてものりなき事とそちゐ設ていへるゐあらす心と付てさる春景と思ひやるへし

大江千里

鶯のたによりいつることゝなくは春くるとをたれかしらまし

新撰萬葉ゐは末句春はくるとも誰の告まましと有此新撰の意はけふ鶯の谷より出くる聲せすは春來たりとも誰のは告むなる聲はのりゐよりてこそ世中のはるともしれと山家のさまといへるにて次に春たてと花も匂はぬといへるに同し趣也今の如きは誰の詞きく人の上ゐ成てうくひすの聲なくは世に誰のはしらんと世中の大よろの春といへるゐてもとより山居幽栖のさまゐは非そしのきのむも筋ゐきにあらねと谷より出るこゑなくは丶今幽谷より啼出て喬木ゐ遷るの語勢ゐれはやゐて其谷わたりゐて打つけゐきくげしきならてはかなはぬこ丶ちするゐは新撰の末句そてゐたし同しとも谷と出て鳴鶯の聲なくいなとやう大やうゐいは丶只鶯は谷より出る物ゐして形容せるなれはひろく世中ゐの丶りて今のはるくる事と誰のしらましといふにとわり叶ふへき也聞わくへしされと本句ゐ調のおくれたるといたみてろ今の優なる方ゐい直されけん集中此例おはし

在原棟梁

春たてゝとそなる匂はぬやまさとはものうかる音に鶯そなく

題しらず

のへちかく家居しをれはうくひすの啼なる聲は朝なく〳〵きく

よみ人しらず

里はなれゐ家としめたるとりへゐは皆人の願ふ鶯のこゑとまつあさとゐきくはと也下の意佗しきすまひはさるものゝのら鶯の聲のみは乏しき事なしといふ家居しとれは丶萬葉ゐ家とれい家やとるへきなと丶いひて家ゐ住居るといへり今は家居の居ゐ重なるゐと思ふへのらを家居は一つの躰なれは再ひとれはといはん事何事のあらん一本家居しせれはといふも聞えぬゐあらねと調もとわりもおくるゝゐ似たり恐らくは居れはの詞のさなれり

として後よりなはしたる成へし

○餘材云朝なく〳〵きくと顯昭い聲も夕にも鶯はなけと曉鶯とて朝にはめつらしくとくなけはつとめて毎ゐゐくとよろこひてよめる也と註せられたれと只日とにといふ心也萬葉十ゐ梓弓はる山近く家居してつきて聞ちん鶯の聲梅のはなさけるとのへゐ家居せは乏しくもあらし鶯のこゑこれらゐて意得あいそへしといへるい非也引たる萬葉の歌いもとより朝なく〳〵とも朝毎にともよまねい日毎ゐもあるへし今は朝なく〳〵きくと

あるゝ朝ならもといへるはいこの〻然いへる本の意と按するゐ萬葉中ゐ朝な〳〵と日毎と見てよろしきに似たるあるゐよりて今ともしの思へるなるへし其日毎ゐとのみ聞も る歌も實は朝な〳〵といふへきの謂れある事なと萬葉に辨せりさいさて鶯のさま朝の ものならもいこそあらめまつ聞初る朝聲の殊さらならんい論と待へこのらも全く顯註ゐ 隨ふへし

春日野はけふはなやきそ若草のつまも籠れりわれも籠れり

こは奈良人のたま〳〵妻なと引ゐて野遊ゐ出たるのよめりしゐてけふはこのりい野燒わさ せてもあれと願へるならんさて女のさまは今もさる物のら往古は殊更ゐつ〻ましうみた りゐ人なとゐ見ゆへきものならぬは野ゐ遊ふといへとも木のくれ或は岡遊なとゐ引入て ひろこのゐ物もへけれは妻も籠れりといへりさるゐそへて吾も籠れりとはいへるのみされ はこもれるは專ら妻ゐの〻れる詞と思ふへした〻野ゐ遊ふと打まこのせてこもるとはいふ へこのらす山ゐ遊はんたゐこもるとはいひのたし紀氏の歌ゐ若菜つむわれと人見は淺みと りのへの岡も立のくさなんなと此外も女のさまとよめる古歌猶多し若草は妻の枕なのら

一首のけしきとそふるゐ似たり

春日の〻とふひの野もりいて〻見よ今いくかありて若菜摘てん

みやまにはまつの雪たに消なくに都はのへのもかなつみけり

吾みやまゐは松ゐこほれる雪さへもいまたのく消さるゐ都人いはや野ゐ出て若菜つみは やもとはと山さとゐ引のへて春めきたる都のさまと打見やりて歎したる也

○餘材云今按源氏末摘花ゐ雪のふれる朝といへるゐ松ひとり暖のけゐてとのけれはこ 〻ゐ松の雪たゐといへるは少しは心あるべきゐやといへるは非也こはさる暖けき方の 松の雪たゐも未消ぬゐと寒景とつよめたる意なるへけれと尤俗意ゐしてのつ後なる源 氏と引たるいふゐもたらす

○遠鏡ゐ山ニハアレ雪サヘマタキエスニアッテ松ナトモ白ウ見エルニ云々といへるは 非也これも舊說ゐよりて都より山の雪と望み見たる意とせりされと都人の都は野への といふへき語勢ならぬと思ふへし又松の雪たゐとあるたゐと雪のみゐのけて松とのた へゐせるなと更ゐ語意と得さる也歌のま〻ゐ松の雪と見て事もなきとやこは遊望と見

たる心よりあやまてるさのしら也顯註ゐ木ゐ降のゝりたる雪は土ゐたまれるよりもと
く消れは松の雪たゐとはよめる也といはれたり

梓弓れして春雨けふふりぬあすさへふらはわかおつみてん

若菜つまんと思ふ日しもあやゐくゐ降くらしぬさていまた晴へうも見えそのくて明日さ
へなはふらはよし今はぬるとも出て摘てんと也押ては萬葉卷三ゐ大御馬之口抑駐同卷六
ゐ馬之歩押止駐余なとある押てゐ同し歩み行んとすると強て引とゝめたると押てとゝむ
といへり今も晴よと願ふ雨のしひてひねもそ降くらせると押てけふ降ぬといふ梓弓は押
てはると云んの枕也

○打聞ゐ推なへてうるはふ春雨けふ降ぬ明日もものくふらは若菜なともよく生出んさら
は近き程ゐ野ゐ出て摘たらん云々といへり遠鏡も是ゐ隨へる共ゐ非也けふふりぬ明日
さへふらはつみてんといへる語勢さるもるやのなる調ならむやさては詞もいひたらぬ
と聞知へし又推なへての詞はなへてといふこそ詮なるへけれ只れしてとのみいひてゐ
しなへてとさこえんやはされはもとよりさる例もなき事也さるゐ妄りゐ萬葉と引て春

日山月れしてれりとよむも月の押ゐへて照といふと也といへりこは萬葉卷七ゐ春日山
押而照有此月者妹之庭母清有家里この歌と月押てれりと晴ゐれはえ違へる也この意は
春日山より出て我庭ゐ押のろみて照せる此月影はといふ心ゐて臨照するをいふ同卷
十一ゐは窓越爾月臨照而と即ち臨照の文字とのけり窓越ゐ押なへてといふ事あるへ
くもあらそ皆れし凌く意はへ也同卷八ゐも我屋戸爾月押照有ともいへりやゐて枕詞の
れしてるも臨照とのけるとれもふへし又同書ゐ云梓弓は冠辭ゐてはるといふ詞ゐ隔
てのけし也押てはるとこゝはのけたりといふもあれと古へ弓とおそといふ事は見えす
といへるも非也こは武藏ゐふみさそのゐかけてなとの格ゐて押て張とのゝりて隔句ゐ
はゐちす古の弦はくゐさは今と異なりといへれと又木弓ならんのちゐ押たわめて物す
ましきゐあらねは押て張ともいのて云さらむたゝ弓と押とのみは今たゐいはす古へと
またんや

仁和のみこのとみこゐおましくける時ゐ人ゐわのなたまひける御歌

君かため春の野にいでゝとかなつむわか衣手にゆきはふりつゝ

君の爲ゐとてけふしも野ゐ出て若菜つむわの袖ゐ雪のふりのるゝと也實は御自ら出て摘たまひしゐ非そかくり給ふ日しも雪の降ぬれは也さるとのくよみなし給へるの却て情とつくそのみやひ也諸註菜つみ給ひし野へのさまと後ゐよみて給ひしやうゐ思へるは差へりわのなつむ吾ころも手に云々とあるは今つみ給へる也過去のてにはゐはあらそ

歌たてまつれとれはせられし時よみて奉れる　つらゆき

春日野のをゝなつみにやしろたへの袖ふりてゝて人のもくらむ

これは春日野の若菜つみゐやふりはへて人のもくらむといへる也野遊のさまのよろめゐもしるきといふ白妙の袖はふりといはん枕也其ゐるけしきとりて序とせる當時のふり也袖とふるといへるは古の袖はいとも長のりし事は論なしさるのらに忍ひに物せるの或は遠き限りゐは必袖の末としほりて打ふりて招ける也よりて袖ふるといへは打まのせて人招く事也さるは言に出すして物するわさなれは女のなまめきけさうふる方につき〳〵しけれはもはら婦女のしわさに見なれて處女子の袖ふるゐと多くいへり今小手まねきなといへは兒女のわさなるに同し後に至て舞ふ事と袖ふるともいへり混すへのらすさて萬葉卷四未處女等之袖振山乃水垣之云々とあるゐ全く同し調への序なのら古のは布留山にのけたれはまのふ筋なく今はわのな摘にと行人のれくれ先たちてのたみゐ招きのはすやうのさまと含めたれは聞まとへりふりはへはわさ〳〵といはんゐ同しはへは引延たる意ゐて其のたさまに一筋なる趣きより用ひなれたるなるへしふりは振さけふり出ゐとのふりにて其事と一むきにそる詞也顯註密勘共ゐ袖ふりはへてとは袖打ふりてといふ事也といはれたるは謬也人のあるくに袖の搖くと袖と打ふる也と思へるは俗意ゐてのつ語意も通せさる事也今の世の兒女の振袖も古のれものけとふみて振へき袖といふ也ゐもむにおのつのちふちめくといふならんや思ふへし

○餘材云今按下ゐふりはへていさふるさとの花見んと云々土佐日記にくすし振はへて屠蘇白散酒くはへてもて來たり六帖に春雨のふりはへ行て云々源氏若菜にゆくての事はゞてゝ侍るとのくふりはへさせ給へる云々これらは袖ふりはへてといはされはもとよりふりはへてと云詞に今は袖と打ふるとそへてつゝけたり源氏の心ふりはへはわさとの心ときこゆれは今も此意ともて見るへしといへるは非也ゝゐ引たるふりはへの

詞みなわさとの意ゐて異義なきと源氏のふりはへはこのりとわさとの心と聞ゆと取わきいへるこはふりはへの意とよくも會得せさるもの也さて此わさとの意ともて今とも見るへしといへるは暗にこのゐへる物のち又袖と打ふるとそへてつゝけたりといへる袖の搖くとわさとの心とのねたりといふにや更ゐ何の事ともなし

○打聞云ふりはへては打はへてといふに同しくふりはろへし詞也はへは延の字とのく彼と是とはへゐふ事にて共ゐ袖とつらねてと云んこの如しといへるは非也ふりはへと打はへは更ゐ同しこのちさる事古語ゐて見るへしふりはろへし詞也といへる其そへる詞によりて本の意の變りゆくこのやこのて言語の樞機なるとしちさる也すなはち遠鏡にも此師說と破して延とはえゐふのはえは假字さへ異なるものとやといへり又云心高くやさしき歌也詞は句毎にうるはしくてあらそめてたし歌奉れと仰事あるゐは皆このくやうゐるとえり出て奉られし是にて此人の心として詠るともれしはこのちるゝ也今一ふりてまのゐ心とやりてよまれしは戯の意にやといへるも非也もとより奉れるうたは心も詞もえちふへけれはうるはしこのちんも論ゐしてまのゐ心とやれりしは戯の心にやといへるは

何の心ろ上の袖ひちての歌なとてまの也と落しめたるも戯の方ゐ思へるゐやれはつのなしもとより戯の歌なきにあらす戯の心より戯の歌とよまはろれやこのて戯の眞心也何とこの憚るへけん萬葉にも穂積乃阿曾我腋草乎可禮然言君之鬚無如之なと此外衆るにたへす此集にも俳諧の部は大やうしこのりてまのにも大らこのにも有へき也

○遠鏡にアレ白妙ノ袖ヲフツテツレタツテ人カユクハといへるは非也これも古說ゐよりて袖とふりゆく事と思へる也凡袖とふるといふは招くと舞との外ゐはなき事也より袖ふる袖はへてといふ語はあれと袖ふりはへてといひつゝけたる例なしもとより其とわりなけれは也これと袖ふりはへてと意得たるは布留山と袖ふる山と思ひたこのへるとの同し謬也

題しらず　　在原行平朝臣

春のきるかすみのころもぬきをうすみ山風にこそ見たるへらなれ

こは山方ゐつける霞の風のまに〳〵たゝよはれもくと打見やりてよめる成へし萬葉卷二秋之田穂上爾霧相朝霞なといへるを見れは昔は霞も霧もさはこのりのけちめはなこのりし也

今もむら〳〵霧たちたると春ふてあれは霞といへるにて霞立春之長日ふといへるのとや
のなるけしきにはあらすさて亂るゝといふより衣のはつるゝになし其衣のはつるゝは必
薄きによりてしのるものなれは緯と薄みといひくたせり衣は經緯(タテヌキ)あひ待て厚薄あるへき
ものなれと緯は後にありてあやとるなれはもはらは緯のなしによるへけれはしはらく一
方につきていふ春のきるは春きて必なひく物なれは打まのせて春の料としていへりさて
霞なとは衣に似たりともなけれと萬葉ふとふ雲の白きの打ふひくと見たてゝ七夕棚機の
料ふ雲の衣天つ領巾(ヒレ)なといへるより霞なとにも引及ほしてよめるもの也此歌なとより後
世さるけしきもわきまへす霞は衣といふへきものゝやうによみなせるはあらぬ事ふのち
さもさて有なん別ふ論あり

○餘材ふへらなれはへきなれ也云々打聞ふへくへきなといひて語の定れるとへらとは
少しなたらのに聞もるとていふにやといへる共に非也へらはへきふあらすへらは其さ
まと含むの意ありて俗にさうなやうもしやなといふに似たり少しふたらのに聞ゆるの
みならんやもとへの一言とへきともへらとも猶いのにもいふ也委くはこゝに辨せす

○遠鏡ふミタレルテアラウザウミエルといへるは非也ミタレルヤウスシヤとのミタレ
ルヤウニ見ニルとのミタルゝサウナとの何とのいふへしアラウといへるはこれもへき
と同意ふ見たる也餘意ふそへたるサウミエルの心はへと本文とすへき也

寛平御時きさいの宮の歌合ふよめる　源むねゆきの朝臣

ときはなる松のみとりふ春くれはいま一しほのいろまさりけり

歌たてまつれとかはせられし時よみて奉れる　つらゆき

我せとか衣はるさめふるてに野邊のみどりそいろまさりける

青柳のいとよりかくるてふ心そみたれて花のほころひにける

糸は綻ひと縫とつるものふるふ柳の糸とよりのくる春ふなれは却てはなは亂れはころふ
めりいのてのとあやしむ方ふなりていへりよりのくるは只よるといふ事にてのくるふこ
ゝろはなき也のくるの事は冬部龍田川にしきれりかくのとこころふいへりさて春ろといふ
としもそといへるしは物と强むる語もは歎きの語なるの打たゝめる方より反てといふ語
勢うちに出くる也委しくは外に辨せり或説ふしもの語ふ反ての心と含めりと説るは非也

しもと強むる語中に或は其意生するのみもとより其意あるにあらそされはしもと強めても反ての意と生せさるもの多しこは水面ゐ石と投するに激して涙と生そると見て猶石中に涙ありとおもへる惑ひ也

西大寺のほとりの柳とよめる　　僧正遍昭

あさみとりいとよりかけてしら露を玉よりぬけるはるの柳（青）

よりのけては只よりてといふにのはらさる事上にいへり顕本には玉にもぬける春の青柳とあり又顕本の古異本に玉にもぬくの春の青柳ともあり此玉ゐもぬくのとの歎辭ある方まさりぬへし密勘にも論なけれはそのゝみは皆しの有けん今は青柳の青の詞初句の淺みとりと同意なるといたみて柳のとなはしさていの文字重れはぬくのとぬけるとせるなるへし

題しらず　　よみ人しらす

もゝちどりさへつる春は物とにあらたまれとも我そふりゆく

百千鳥さへつるといへるにうきたてる春景見えて物とにわのやき改りゆく中に獨ふりゆ

くらん老人の述懐感哀ふのきにや

遠近のたつきもしらぬ山中におほつかなくもよふことりかな

こは山陰なと行に深く奥まりたらんしけみよりさる鳥のうち鳴ときゝてそこはのとなき山中にこよとも呼たつる哉いとゝもおほつのなきわさ也といへりおほつのなきは物のおはゝしくてつきなき意なるの一つの詞となれる也たつきはたよりといはむに同し

○打聞に深き山に入て見れは云々遠鏡に此山中ニ云々といへる共に非也此三句は鳴方とさしてあの山中ゐしてといふにてたよりのたき山奥によふとおほつのなみたる也今ふむ所と山中とみては意も詞も通らさる事吟して知へし

のりの聲ときゝてこしへまのりける人と思ひてよめる　　凡河内躬恒

春くれは鴈かへるなりしらくもの道ゆきふりにとゝやつてまし

今は春來たれはのりものへりもくてゐる也彼は越の空へのへるといへはのゐらす思ふ人のあたりとよきるへしさらは其行ふりに言傳やせましと也鴈の聲に思ひいてゝなつのしき心としのよめり白雲のみちは雲路といはんに同し雲井のよろふことつてやらんの心な

れは白雲の道行ふりといへる也行ふりは行觸るにて道のついてとしのいひならへり

○遠鏡に是ハヨイ所テ行アフタ言ツケナシテヤロウカと舊說ゐつきていへるは非也此道行ふりといへるは越なる人のわたりへ行ふるゝといふ鴈の聲ときゝてとあると鴈にゆきあへりと解てのゐふへけんやさては白雲の道といへるにも更にのなはぬ事也

歸雁とよめる　　伊勢

春霞たつを見そてゝゆくかりは花なきさとにすみやならへる

題しらす　　よみひとしらそ

をりつれは袖こそあはれとおもはもれたか袖ふれしやとの梅そも

色よりも香こそあはれとおもはもれたか袖ふれしやとの梅そも

やとちかく梅のはなうゑしあちきなくまつ人のかにあやまたれけり

今よりはのく家近くは梅花とは植し打匂へるたひに待とる人の入來たるのとりゐやと驚るゝもいとはのなくのひゐきとと打歎きたる也梅とは植しなと有へきと梅花植しといへるとさなくてしらへめてたしては聳そみしたらん家の女なとの詠りし成へしやとは其

本家の門といふにて今の戸口也のとは墻の門なるに同し今は多分打まのせて居宅といへれと古は家門すなはち庭ゐれは宿の庭なとつらねいへる事なし萬葉ゐやとは多く屋前と書るも意と得たる也されと上ゐ宿の梅ろも下にも宿ゐまつ咲梅の花或は我やとの花見のてら我やとに咲る藤浪なとよめるは自然庭と見てものなへれとなは是も家といふ心にて次の詞書に家ゐ有ける梅花人の家の梅花とみて人の家に植たりける櫻の花なとあるにのはらぬ也なは佗人の住へき宿もきとまるとそ宿とさたむるなと又上ゐ哀いく世の宿なれやといひて下に庭も離もといひ詞に家とうりてといひて歌ゐは我宿もせにのはりゆくといへるなとみな宿は家の意にせる證也さるは奈良の末よりのつ〳〵移りて今の京ゐ至りてはもはら宿の庭宿の軒なとさへいひならせりされは今も家近くと宿近くとよめる也

○打聞ゐ植しは植そあれと約めたる言也あちきなくは心にもあらて物の味はひなきといふといへる皆非也更ゐさる意ならんやはうゑしもあちきなきも今俗にいふふたのふ事なけれは辨と待へのらす

○遠鏡ゐ庭ノ近イ所ニ梅ハウエマイッといへるは非也こは古きによりてやとと庭と見

たるなれと此歌はしのらさる事本註お辨せるの如し只家近くの道とそへしの つ庭近くうゑしと云ん事有へきならす庭にうゑしところいふへけれ又梅うゑし花のおちきなくと心得へしといへるも非也しの梅花と兩段に裂て聞なす事有へきならんやいふにたらす

梅のはなたちよるはかりありしより人のとかむるかよそ一みける

あはれ立よらんとせしのみなりしとろれより人も咎むるはのり香にしみて打匂へる哉立よりて馴たらんにこうさはあらめとあやしむ方にいへる也其實はとはのり立よりたるとわさとれはめきていへるは其しはらくの程に過て餘りしく匂ひの殘れるとつよくいはむとて也立よるはのりは立よらまくせし程の事お てなはいまた立よらぬ詞也古歌に謠ふむはのり近けれとなといへるも裕ふむはとのといへるにて其實はふむおてはなきとしるへし死ぬはのり身とやくはのりの類みな然り見すもあらすみもせぬ人の戀しくはなとよめるも似たる意はへ也俗にもあまりはつ〳〵にて見も遂やらす聞も果さる事とは見んとせしまに聞んとする程おなといへるに同し見ん聞んはいまた見そいまた聞さるさきの語なるとや是れのつのらなる語勢也人の咎るは人香にや觸たらんと疑ふ也

○餘材に立よるはのり有しよりは立よるとそる程の間のしはしの心也といへるは非也立よらんとそるはとの間はまた立よらぬ間也さるに又しはしの心也といへるは立よりたる上の意なれは本末の語意おはさる也こはまた立よらぬの歌のれもてなると強て立よりし方おとのむとせるの謬也されは立よるとするはとの間といふ語はなき事也立よらんとそるはとゝこそいふへけれ皆立よらんとそると立よりしにせんとせるよりしらす〳〵のく無理なる語さへいてくる也

○遠鏡に梅ノ花ノ下ヘチヨツト立ヨツタト云ホトノ事カアツタカといへるは非也是も立ヨロウトシタホトノ事カアツタといはては立よるはのり有しといふおはのなはさる也さては立よらぬなれは匂ひのうつるへきいはれなしなと思はんは遲しといふへし打聞には木の下によりしとさへとけるはいよ〳〵いふにたらす

梅の花とゝりてよめる　東三條の左のおほいまうち君

うくひすのかさにぬふてふ梅のはな折てかさゝん老かくるやと

こは催馬樂に青柳と片糸によりて鶯のぬふてふ笠は梅の花笠これふよりてよみ給へる也
さて案するふこは老の述懐の御歌なのらふ其しらへはいたく花やきたると思ふにもし初
春の宴會などにこの催馬樂うたへるより其鶯の笠ふぬふといふ此梅花云々と折たる枝に
思ひよせて醉のすゝみにうけすゑてよみ出給へるにはあらさるこの又按するに此催馬樂の
歌より前に梅と鶯の笠とせる本歌などなくてはぬふてふ梅の花笠とはいひ難きふや卽ち
ふとゝの御歌は此歌ふよりて笠にぬふてふとよみ給へるに論なし恐らくはこの御歌と世
にいひなれ又催馬樂の歌もすなはち此集の大歌所の部に入て共に唱へ來たれるより紛れ
たるふやと思ひ疑ふ事久し試みふいはゝ青柳と片糸によりて鶯のぬふめる笠は梅の花笠
などゝ有つらん古本と求むへし本歌に縫てふと前と承てよめるならんと又縫てふと追つ
きてよみ給はんも穩のならぬこゝちせるふや後勘有へし

題しらす　　素性法師

よそにのみあはれとそ見しうめの花あかぬ色かはをりて成けり

大方の花は中々餘りにけちのくてはろゝけたる葉も交りよのちぬ薫りもつくめり只梅の

みは花も匂ひもいと清くよそめにのみあはれと見しより却て近まさりのせらるゝ眞景と
めてたくいひ出たるもの也

梅の花を折て人ふにたくりける　　とものり

君ならてたれにか見せん梅のはないろをも香をもしるひとそしる

くらふ山にてよめる　　つらゆき

うめのはなにほふ春へはくらふ山やみにこゆれとしるくる有けるぞ

六帖ふ二句咲ぬる時はと有そ正しきこは梅花咲ぬる時はくらき闇にこもれと咲たりとは
其匂ひふいちしるきといふ也今匂ふ春へはとあるは末にとり合のたき事となへて知へし
闇にこもともしるくや有らんなと思ひやりたるならはさても有なん今越ゆくには更にこの
なはす其しるきは匂ふふよりてなれは匂ふの言なくてはと思ひて調の上も辨せすなはし
たる後世のさのしら成へし餘材に詞書ふは夜とは見えねと夜にこゝりてこえられけるふ
やといふのりいへるはいのふ歌のうへにやみふこもれとゝあると何のは疑いんみな二句
のれはつこのなきよりこゝる惑へる言も出くる也

月夜に梅のはなを折てと人のいひけれはとてよめる　みつね

月夜にはそれとも見えすうめの花かををたつねてそしるへかりける

こは月れもしるき夜やむとなき御まへなとに侍らへるこのあのうめとりてと宣へるなるへし庭白く照わたらんにおりたてる夜のさま思ふへしけに匂ひのみそしるへ成へき

○打聞に薫る所を尋て折へしといひ遠鏡にコレテハ匂ヒヲ尋テ行テ知ヴヨリ外ハナイといへる共に非也こは花と月と同し色にまのへると見るくそれとわのれねは香によりて其梢としるの外なしといふなれは此尋てはたよりにてしるへにてといふはこのりの事ふて目のあたりたとらるゝ打つけのけしきをつよくきこのせて尋てしるといへるのみさるを尋ね行とにとれるはをさなし薫るを尋て折へし匂ヒヲ尋テ知ヴヨリ外ハナイとゝきて足ぬるをや所といひ行てといへる共ふ其意を得さる也詞にとるをとてよめるとわるふも心を付へし

はるの夜梅の花をよめる

春のよのやみはあやなしうめの花いろこそ見えぬかやはかくるゝ

春のよの暗は暗といふこのひなし梅のはなの色はこのりこそは見えね其香やは隠れたるといふ香は猶さやこのふ匂ひみちてあらはなれは暗なる詮は更になしとなしりたる也さるはいちしるき梅この香の暗にもまこのはぬをめつる余りにいはれたる趣向也あやなしは俗ふ詮ふし益なしといへるにてこのひなき事也顕註にやくなしといふ詞也といはれたるそ當れる

○餘材にあやなしは無文也梅をそねみてこのくをとすれと色とは隠せと香とはえこのくさねはわきもなき事也と云也といへるは非也あやなしは語の如く文もなく分もなき意なれは筋のたゝぬこの本なれとそのこのみいつよりこの一轉して大方は無益無詮の意となりてこのひなしといふふあたれり拾遺の同人の香をとめて誰とらさらむ梅花あやなし霞たちなこのくしそとよめる是も花とはこのくし得るとも香としるへに立よりて誰も折らんには更ふ立このくしたるこのひなしと霞の働きと無益の事にいひ落せる也次に山吹はあやなゝさきそといへるも見る人なけれは詮なしといふ也これらひとへわわきなし筋なしといひてこのなふへけんやさはいへあやのわのれぬこのもとより此語の本意なれは然きくへきこの少このふぬも論なし今は一轉せる方ふ開へきといふ又梅とそねみてこのくを心にあらす

闇ゐは物の見えさるに意とあらせてのくしのくさぬなといひなそのみ

○遠鏡に春ノ夜ノ闇ト云モノハワケノタヽヌ物シヤナセト云ニ梅ノ花カ暗ウテ色コソ見エヲ香カ隠レルカ香ハナンホクラウテモ隠レハセヌ色ハ隠レテ香ハ隠レネハ隠レルテモナシ隠レヌテモナシトチラヒワケノタヽヌ闇シヤハといへるは非也これもあやなしとのひなしとせすわけなしと見たるより一首の語勢も忘れたるもの也しの色香と二つにわけていへるに非すわつのに色はのりは隠せとも最第一の香と得のくさねは更に闇の詮なしと一むきにいへるにて其色の見えさるとも却て詮なきと強むる方にいひそへたる也そへてこそといひてねと承るは只一方と扶け強むるてにとはにて次にもめにこそみえね身とは放れす或は人こそ見えね秋は來にけりの類ひ擧るに堪す俗にも顔こそ見えね姿やは隠れたる人こそしらね神やは咎めぬなと常いふ詞也これら皆姿あらはならんゐは顔のみ隠れたるも詮なく神の咎めたまはんには人のしらぬものひなきにて顔はのりは隠し得たりひとのみには隠し遂たりと二つにいへるならんやは畢竟れしてめて其しるしなきといへり今もイロコソ見エヲ香カ隠レルカ香ハナンホクロウテモ隠レハセヌといへるはひたそら歌ゐ付て解たれはよくのなへるとわけのたヽぬといふのたに解なさんのために隠レルテモナシ隠レヌテモナシトふたヽひ蛇足とそへて兩端に解あやまてるもの也

はつせにまうつるとゐやとりける人の家に久しくやとらてほとへて後にいたれりけれはのの家のあるしのくさたのゐなんやとりはあるといひ出して侍けれはろこゐたてりける梅花と折てよめる　貫之

人ハいさ心もしらすふるさとハはなそむかしの香にほひける

歌の意明らけし此やとりはいつくにまれ長谷へゆく途中也是と彼寺の宿坊なと思ふへのらはゝ長谷にまうつるとに宿りける人の家といへるれのつのら道なる事しらる家集にはせゐゐまうつとて宿りしたりしとありさては途中なる事いよ〳〵しるし　伊勢

水のほとりゐ梅花のさけりけるとよめる

春なとになかるゝ川をハあと見てをられぬ水にそてやぬれなん

なのるゝ川と打つけゐ花とみて手もふれぬへきのなもし折んとせはとられぬのみの其水

ゐあやなく袖の濡むとゆんとといふ春とは此春も又此川と花と見てといふ意にてこりすまにはのらるゝといふこは近わたりにさる流れの有けんと年々見なれたる成へしなのるゝ水とはいはて川と花とみてといへるゐ却ていと淺らなる流れ見もめるこゝちすさる廣のらぬ河の限りにあまりて右さし左させる枝のあり〳〵とうき出たる異ゐ流るゝ川の常とは忘れてあやまつへうころ彼何のしの疎影横斜水清淺といへる一句暗に符合して同景と詠出せるの如し

○打聞ゐ花と見てさて折んとそれとむなしき影なれはとられはせてといへるは非也こは打つけのあらましゐこうあれしの實に折むとせしならんやさては袖やぬれなんともうけられぬ事也又云水のほとりと云詞きゝよのらす水と書てものはとよむへきにや日本紀に例有といへるも非也水のほとりといひて何のはきゝくるしのらん又のはといはんと何そ煩はしく水と書へけんこは詞書ゐは水のほとり歌には川と花と見てと互にいへるゐ廣のらぬ流れなるとゐのつのらしらしむる也是と詞ゐ川のほとりといひ歌ゐ水と花と見てとする時は忽ち世の常の打わたしたる川と聞えて細流のけしきは見ゆへのらも思ふへし

○遠鏡ゐアノ水ノ中ニモ花カアルト見テハイツノ春デモタヤサレテヲラレモセヌニ折ウトシテハ其水テ袖カヌレルカ今年モ又ヌレルテカナアラウといへるは非也こは其川とやのて花の梢と見て水の上とも忘れたる語勢と見しらさるより水の中にも花のあると見てなととさなき事ともいへる也川に余れる影なれは花中に川ありとはいひもしつへし川中に花ありといふけしきにあらす後に俊頼の野路の玉川萩こえてといはれたるも川ののきり萩とこゆる今と同し意はへゐて皆細流ならてはさるけしきなき事也いつの春も折んとして袖とぬらせりとする事いのゝさる事有へきあらんやは又同書に詞書に水とあるは京極院の庭の池なれは歌に流るゝ川とよめるは其池につゝきたるやり水といふなるへしといへるも非也こは伊勢家集に京極院ゐ亭子の帝れはしまして花の宴とせさせ給ひ參れと仰られしに參りて池に花なと散たると見てと書るゐよりていへるなれと此家集は後人の僞撰ゐてことゝ〳〵とるへきにあらす今とも只花の宴といひて櫻花の事となしたり此うた梅ならてはのなはぬ事しらへに見つへし又歌に河とあるとも

辨せと池の事とせるなといふにたらすこれと證としてやり水なといへる遲しといふへし又の日と次に書てけふまても流れぬる哉水上の花は昨日や散果にけんといふうたとも て付たりけふまてもなのれぬるのな水上のなといへるさらに池上のはなのけしきにあちすとへてみたりおよせ合せたるもの也委くは彼集につきて辨せり

年とへてはなのかゝ見せなる水はちりかゝるもやくもるといふらん

花影ののくさやのふうつる水の鏡は後散のゝらん時とや曇るともいひてんと也余りさやのにうつると鏡と見るよりのゝるあらましもいはるゝにて今散と見ていふにはあらそこは上の歌と同時の詠にて袖や濡なんとみまとひたるも花の鏡と見なしたるも皆底すめる水の清らなるよりうのめる趣也初句の年と經ては上の春とおといへるに同しく毎年見なれしあれは年とへてといひすゑて鏡のくもりもくよそのとせり散のゝると塵によせたるなとは此作者のよみくち也末にもせにのはり行ものにろ有けるみとはやなのら見るよしものなると此外なは多し

家に有ける梅のはなのちりけるとよめる　貫之

くるとあくとめかれぬ物を梅のはないつの人まにうつろひぬらん

くれぬとては見あけぬとては見更にめのれぬ物といつのみぬまのひまと得てのくは散ろめぬらんと也守り目のあるおはさり難き世のならひとふみていつの人目とぬそみてとやうに花に心とあらせたる也されは只いつのまおとはいはて人間にといへりさるは打驚けるしらへにて今まて盛とのみ見つるとのくはいのてといふ也人なきまと人間といふはろのおみの常言おて此後もつのふ詞也さて此集詞書おはちる事とうつるとはのゝれそ皆ちるとのみあるは詞は歌とたのひてきゝのまのはぬと本とすれは也

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　よみ人しらそ

梅かゝをそてにうつしてとゝめてい春はとくとも香たにみおらまし

こゝに讀人しらそとあるは實おしらぬにはあらて憚るへき故ありて其名としるされさる也さるは寛平の元年より延喜六年まてわつの十八年なる上撰者たちも皆其歌合の人數にて共お立ならひてよめりし人也いのて其名とたにしちさらん此歌合のよみ人しらす集中四首はのり見えたるは恐らくは同人おるへし梅のゝとのくも袖に深く移しまめて留めた

れはよし春はそくとも此香ろ花のゐたみならましといへりさきにも人の答るといひ次ゐもうたて匂ひのゐといへる如く梅のゝのいと深きほとといはんとて春はすくともなとよめる也

○餘材にとゝめてはゝとめたちはの心也打聞ゐとゝめたちはといふとつゝめてとゝめてはといへり遠鏡にトメテオイタヲハといへる共に非也てはゝたれはの約まりたるゐてとゝめたれはといふ也たちはい希ふ詞にて袖ゐうつさまく思へとまこのせさるの意となりて梅のゝの移りやそきには更にこのなはす菅萬には結句形見と思はむとありさる時はいよ〳〵たれはと見そしてはてゐとはゐはさるとや賀部ゐも留めおきては思ひてにせよとありこれも斯とゝめゐきたれは思ひてゐせられよといふ也これらたちはと見ていのゝはとこのむこは宣命萬葉等にたちはとてはともいへるに執して今はことわりのこなはさるとも忌れて強て彼意にとこのむとせるもの也もとより辭は世々に移りて今古ひとしき事ゐたはねはこく未來現在の違ひさへ出くると辨せすこのいゐてゐ思ひとれるは疎妄也

ちると見てあるへき心のをうめの花うたて匂ひの袖にとまれる　素性法師

今ハはや散たりと見果てさて有へき物と思ひの外なる匂ひのいつ袖にはこくもふこくとゝまりてさる名殘としも思はそるよとこき香のゐやゐくゐるといとへるやうにいへる也

○餘材に散と見てさてあらてしひてなつさひて世の常ならぬ香の袖にとまりて忘れ難き心也といへるは非也かれより香のどゝまれるとこそはうたてといへれ強てこなたより馴たるなちんやは又菅萬ゐは此うたてゐ別樣の字とはめたまへるゐ泥みて世の常ならぬ香とせるなれとこは殊の外ゐる心と別樣とは書給へる也

○遠鏡にヒョンナ事ヤ匂ヒカ袖ニコッタといへるは非也れよろうたては物の意外ゐ出る心ゐてさると輕くも重くもとこのくつこのひなす也其委き事は外ゐ論せり尤うたては烈しき語ゐて次にもうたてにくけれ事ころうたて古くもうたて物いふうたて此ころなと迫りていひ又はなち云時もうたてありゐと迫切につこのひゐせり今もうたて匂ひとせまりていへるとひよんな事やと歎辭とさへ加へて匂ひと放ちて釋そるは語勢と得すとい

ふへしもとよりひよんなの詞のなへりとも見えす是も別樣の字意ととりろてなへるもの也打聞ゐ物の成のさなれるにそきたると余りしき事あやゐくなれる事なと所によりてさま〳〵に用ひたりなといへるは更に何の事ともゐし皆事の跡とれひてむきのまに〳〵いへるにて其本なけれは其落所としらさるもの也

題しらそ　　讀人しらそ

ちりぬとも香をたに殘せうめの花こひしき時のかをひ出にせん

散ぬとも其香をたに殘しおけ後戀しとなのめん時にもひらのむるよすのにせんと歌也く花に打向ひていへる也殘せは其枝に殘せといふ也さき〳〵の袖なとゐうつる類ひと思ふへのらそ

人の家にうゑたりけるさくらの花の咲はしめたりけるをみてよめる　　貫之

ととーより春しりそむる櫻ハあちらるといふをハならハさらゐん

餘材云此歌より次の卷に貫之の水なき空に涙を立けるといふ歌までは櫻の歌なりよりて

歌にさくらとよめり櫻とよまぬ歌はこと書にさくらといへり其中ゐ此卷には櫻のさける程といひ次の卷はちるとよめり平城天皇の御歌より後貫之のみやまのくれの花と見ましやといふまては詞書ゐも櫻といはす歌にも只花とのみよみたれはよろつの花とよめり後に花といひては櫻そと心得る類にはのはれりといへり今年より春咲へき事とは知そめたりさてはやのて散といふ事あるとは必しもしらてあれゆめならひれはもる事なかれといへり

○遠鏡に春は咲モノチヤト云フヲ外ノ櫻ニナラフテ今年カラ始メテ知テ咲タ此サクラ花ヨトウツ散ト云フヲハ外ノ櫻ニナラハヌカヨイツといへるは非也こはならふといふ詞に泥みたる也凡ならふといふは其本並ふ馴すなと同し語にてしは〳〵度と重ぬる事也さて此ならふとまなふ事ゐもいへるは其物學ふわさはしは〳〵なすの故也まなふはまねふにて眞似する事也されは學ふと習ふはかのつのら二つゐると知へし此歌ゐとの習ふはまねふ方ゐはゐらてしるなゐはもるなゐといふ程の語なれは外の櫻ゐ學ひてならふといふ意にはゐらす世のならひ身はならはしなといふ類のならひにてゐのつのら

にしる方といふ也わきまふへしもし其おのつのらしるも外と見習てしの成行事なれは理りたのはぬなと思はんはいふふたらねは論そへのらすなは本句の春知そむるといふとさへまなひ習ふとになして春ハサクモノト云フヲ外ノ櫻ニナラヒテといへるに至りてはいよ〳〵論しかたし

題しらず

山高み人もすさめぬさくらはないたくなわひそわれ見はやさん　よみひとしらず

又は里遠み人もすさめぬ山さくら

やまさくらわかみにくれは春かすみみねにもをにもたちかくしつゝ

こは峯にさき尾にさきたる花の推なへておほろに見もるといへり峰にも尾にも花と立のくしつゝと四五の間ゐ花の言と加て意得へし

○遠鏡に山ノ櫻ヲオレガカカウ見コクレハ霞カ一面ニトコモカモ立テカクシテ花ヲ見セヌワイといへるは非也のく一めむゐ云々といへは霞の方主になりて花はいつくゐのとたとる意となれりさては峯も尾もとなくては叶はす峯ゐも尾にもと有と聞知へし

そめとのゝささきのふまへに花のめに櫻の花とさゝせ給へると見てよめる　前のゐはきおほいまうち君

年ふれはよはひは老ぬしかはあれと花をしみれは物おもひもなし

なきさの院ゐてさくらと見てよめる　在原業平朝臣

世の中にたえてさくらのなかりせは春の心はのどけからまし

櫻といふ物たえてなき世中なりせは春の人の心はいとものとやのならましとと余りゐいろのはしう浮たてる時めき心よりいへる歎息也さしあたれると置て世ゐ廣くのけていふは何の上にてものへりてせちなる思ひ也伊勢物語に昔惟喬のみこと申みこおはしましけり山崎のあなたなる水無瀬といふ所ゐ宮有けり年との櫻の花盛には其宮へなんおはしましける其時右の馬頭なりける人と常にゐて和はしましけり云々狩はねむころゐもせて酒とのみつゝ倭歌にかゝれりけり云々右馬頭なりける人のよめる世中に云々とありこは有へき限りと思ひやりて物せしものなれは其世のけしきと見るにたれり

○餘材に咲とまち散とゝしみ盛なるほとも雨と厭ひ風と恐れなと愛する余りに心のい

とまるきより云々といへるは非也しの打なのめたる一つ心といへるゐあらさる事本註にとけり水無瀬へ出うき給ふ程より御狩たゝせる前しりへの事のけてよく其世の渚の院のけしきとおもひはのるへし只御園の花などにむのへるさまに思ふへのらと長閑けのらましといへるはまちとしむやうの心盡しの反ゐあらすいそのはしきのうち也

題しらず　　よみ人しらず

いしゐしるたきおくるゐかな櫻花手折て忘とん見ぬ人のため

こゝろ明らけし

○打聞に今の本には手折てゐこんとあるわろし六帖に手折もてこんと有とよしとすといへるは非也こは取得さると手折てこん物ととなけく意なれはもの歎辭あるへき也もてこんいはつみたる調にて秋部の袖にこきれてもて出なんといへるなと丶同し語勢ゐれは然取得たらんやうの方にこそは叶ふへけれ味ひわくへし

山のさくらと見てよめる　　素性法師

見てのみや人にかたらんさくら花手をにをりて家つとにせん

山のさくらとみてよめるとあるは次ゐある春霞何のくゐらんといふ歌の詞書と同しくて山と望めるさまに聞ゆれと此歌山ゐ入て見たらんは手とゐ折てといふゐ知られて疑ひなしさらは山にして山の櫻と見てといふならめといさゝのあのぬこゝちそるはひの聞にや歌の意のはのりの花盛と只見て語るのみならんや皆手とに折取て家つとにゐせんはいのにといふ也こはとても語り得らるへきならねはいさ此けしき見するはのりしたゝか折のへらんの意はへにて手とゐといへる勢ひのすゝろきたるの面白き也

花さのりに京と見やりてよめる

みわたせはやなき櫻をとき過せてみやこゝろ春のにしきおりける

大方花紅葉と錦と見なすは山邊にいふ事ゐてまとに山こそはしの見もめれ集中にもたの爲の錦なれはこのあき霧のさはの山邊と立かくすらん霜のたて露のぬきこゝろよわのらし山のにしきのとれはこのつちるの類ひ多しさると今は山より都の方と見なして錦といへるの面白くめつらしき也さるは都は春のといはて都そ春のといへるに反ての意ありて打のへし新らしき錦と見出たるしらへ有と思ふへし植つらなれる朱雀大路の柳の中に家々の櫻

暁変りたらんけふもあやしく織出たる錦なるへし

○打聞ゐ見わたすはこゝのしこと目とやりて見わたす也といへるは非也見わたせはゝ然あまた所に目とくはるにあらす只一目に見たろしたるさま也又云こきませはのきませに同し伊勢物語ゐこけるのらとゝもいひ今も稲の穂とこきたると云如しといへるも非也こきませてはもとは手してこきおろすより出たるゐらめとしの手してこく物は木葉にまれ玉にまれ打亂るゝものなれは只亂れ合たるとこきませといひなれたる也今も只打ませて入ませてなどいふこの如く亂れ交はれるさまといへるのみにてこきといふに意はなしのく一つの言と成ては本の意は忘て見るへしのきませと云に同しなと舊説によれるは云にたらす

櫻の花のもとにて年の老ぬるとゝなけきてよめる　紀友則

色ゝ香もおなし昔にさくらめと年ふる人そあらたまりける

とれるさくらとよめる　つちゆき

たれーかもとめてをりつる春霞たちかくそらん山のさくらそ

こは其枝と見るより有けん山と思ひて其山のけしきといへるゐてさるは此日しもしのうらゝのならん空ゐしてさるへき山も見えぬらんされは此花とりつらんは彼山のとく霞めらんあたり成へしといふ意はへと下ゐもちて其情のうこへる所と思ふへし密勘云平懐に誰のとめて折つるといはんとするに文字そくなけれは誰のもといふ猶五文字有へけれは花しちらすは千世もへぬへし花とし見れは物思ひもゐしといふやうゐし文字と又そへて誰しのもとやすめ詞と多く加へてよめる也ふるき上手めきたる歌はのく徒なる文字と多くそふる也是そ受古今説之時たしのゐ聞侍しと宣るは疎漏也誰のといはんと文字のたちさるのもゐに誰しのもといへるならんやこはしとつよめてもとなけきたるにいのなる誰その人のはと其心さしのふのきと歎したる意きこもるもの也されはしもの助字は調の命なるものと上手めのして徒なる文字と多く加へたりといふへけんやは

歌奉れと仰られし時よみてたてまつれる

さくら花さきよけらしも足曳の山のかひより見ゆるーらくも

六帖顕本等二句さきにけらしあと有そよろしき古本は大方然りと見えて密勘にも異論な

く卽ち次なる櫻はな春くはゝれるの歌の所ゐ此歌と引れたるにも咲にけらしなとあり風躰抄ゐ此もの詞といたく執し給へるは尤受のたし凡なの詞は向ふへ差あてゝいひもは心にのへる詞にてゐのつこのら語勢たのへり此歌はもとよりなとゐくては打見やりたる打つけのけしきにのなふへのらす山ののひは山と山と重り逼りて籠りたる所といふ山と山と立ならひたる間とのみ思へるは泥めりさてさるあたりには必樹木生むら立るものゐれは古事記に夜麻能賀比コヤマノカヒ比爾多知ヒニタチ邪加由流ヤカユルハ波毘呂久ヒロク麻加斯マカシ云々萬葉ゐ夜麻可比ヤマカヒ爾佐家サニサケ流佐久サク良ラ乎多ヲタ太比トメ等米云々大殿祭にも今奥山イマオクヤマ乃オホカヒノ大狹小狹カヒ爾ニ立留タテトメ木乎キヲ云々なとあり又さる山間は其樹一林ゐつきて雲霧も殊ゐたな引常のけしきと含みもてのひより見もる白雲のつき〳〵しきけしきと思ふへし

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

みよし野の山邊にさけるさくら花ゆきかとのみそあやまたれける　とものり

よし野は大方雪深きわたりなれは常の目まとひに雪のとあやまたん事然るへき也六帖ゐは末句白雲とのみあやまたれつゝとありこは後撰ゐみよしのゝよしのゝ山の櫻花白雲とのみ見えまのひつゝとよめるに似たれはさる方ゐ紛れたるにもやあらん

やよひにうるふ月のありける年よみける　いせ

櫻はなゝほくゝゝれる年たにも今人のとゝろにあられやゝせぬ

三句顯本ゐことしたにと有そ正しき今の刊本にはやはり年たにもとあり謬也結句やはせぬとあらんには今年たにとなくてはゐるはす今の如く年たにもともの歎辭あらんには結句やはするとうくへき也聞わくへしさてやはせぬといへるてにとはゝいのてかくはと物ゐ向ひてもときつむる詞なるゐ中にしの押詰て向ひへゐてたると已ゐのへるとの二樣ゐり物の上のよき筋は已にのへりよのらぬ筋は向へ云つむる也今は花のいつまても人にゐのれぬはよき事の筋なれはめての余りゐいふのしみていのてのくゐのれぬ事そ大方のもの はえしのらぬとと已ゐのへりとさまる也ゐのれよのしと向ふへはゐたらぬ也集中郭公の歌の外に鳴音とてたへやはせぬなとはいのて答やはせぬはやく答へよとやうに向ふへいひのくる也今とも是と一つにてゝろえてとくは疎その也譬へていはゝ衰へてもみやひと捨ぬ人と見てはいのてかく昔とは捨やはせぬさはのり衰へては誰もみやひは捨へきと

とたちこのへりて感そる也榮えてもなは鄙ひとそてぬ人と見てはいのてのくはすてやはせぬしの榮えたちんには今はさる鄙き業は捨へき也はやく捨よとあはめなしる也打いて丶いふのるは同し事あのらよき上とあしき上ともとよりあたる所の意はへいたき違ひあれはとさまる所の余意大に異也昔よりこのさのひ事きれねは委く申侍る也顕註云此歌のとはりの句は通宗朝臣の證本にもあのれやはせぬとあり崇徳院の御證本にも同侍り第三句と年たにもと侍る詞はのりはのはりて侍れと終句は違ふ事なし而と俊頼朝臣家本にあのれやはすると有けるとて俊惠は其義と執し侍き凡世人も別ふ執しあひて侍るめり兩證本あつきては異義有へくもなし上に今年たにもといひ年たにもといひてはあのれやはそるとは云へくもなし次第相のなはぬとあのれやはせぬといふはいはれそと申人は返す〳〵口とし き事と覺え侍り春加れる年たに人の心にはあとあのれぬろあのれよのしといふ心也此集夏部に躬恒の待時鳥歌聲もきこえす云々此歌の詞つのひも同事也云々又春下の歌にことならは咲すやはあらぬ云々此さのそやはあらぬといへるもさのてあれのしと詠る詞也是にて思ひあはそへき也又十九卷にとならは思はそとやはいひはてぬ云々これも云

はてよのしと思ひたる詞也といへり密勘云年たふも今年たには同心兩說のあのれやはそると執し申されけん人返す〳〵口惜ころこれは咲にけらしな足引のなとやうの櫻花のれきやうふはあらそ此歌はさくら花とよひてたとへはいちへてきたらんに向ひていはんやうにとしへたる詞ふれはのへそ〳〵もそるとはいふへのらそあのれやはせぬころのなひて侍れと書れたりこは共にすへてひの事也既ふいへる如く三句今年たふとあちんにはやはせぬと承へき事論ふし今本の如く年たにもともしあらんにはやはそると承へき事自然の語勢也春の余りある年たにもあのれやはそる更にあのれぬはいのなる花ふのといふなれは調てそふれ其意はするせぬ同し事に落めりさると三句の異同も辨せす一むきふやはせぬといはては叶はそと思はれたるは共に謬也況やなとあのれぬろあのれよのしといふ心也といはれたる似て非なる事既に辨せり又俊頼俊惠等いつれの本によりてするといふ方に定められたるにのふはつのなしもし是も三句の異同ととはす一むきに執し申されたるふらはせぬといふに定めたると同罪也又外ふふく音とこたへやはせぬの例には心はへ違へる事上に盡せりこれと或人難して花のあきたるまて咲ぬも不足の事なれは郭公の